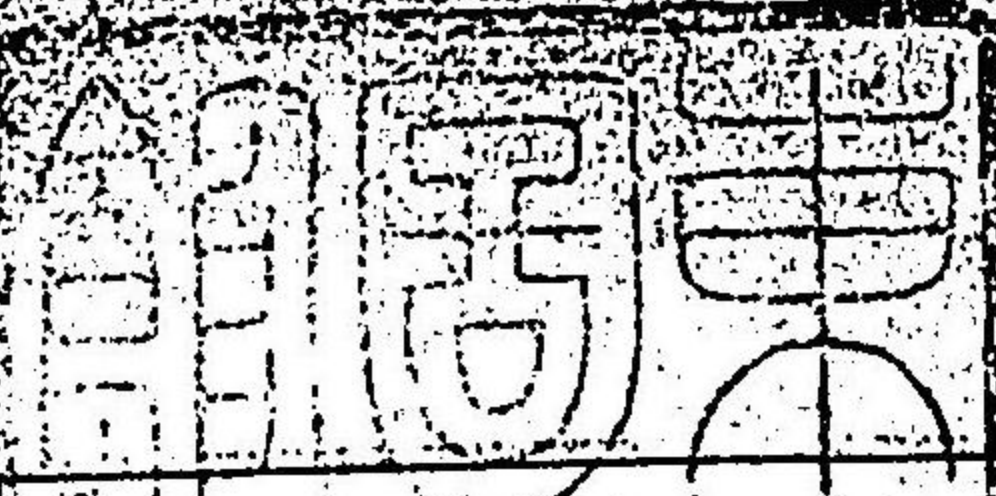
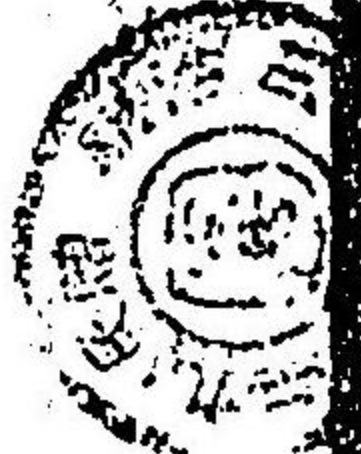


近世文學史論序

本書は幕府三百年間の儒學國學の變遷を評論せる者、題して近世文學史論といふは當れりや否、これ少しく惑を免れず。著者云ふ、三百年の文學、上行する者あり、儒學國學の若き是なり、下行する者あり、戯作の若き是なり、上下に通ずる者あり、美術工藝の若き是なり、今は特に其の上行する者を取り、他の下行する者と上下に通ずる者とは、異日更に大綱を提擧する有らんと、乃ち本書は目して以て近世文學史論の初巻と爲すも可、或は又此れ即ち正編にして別に續編の出つへき者と爲すも可、題名に就ては種々の解釋を許さざる能はざるべきも、近世文學史に關する重要な敘事文、將た議論文たるに疑なく、其語簡にして意長きを以て、



東洋堂



一讀或は晦昧を感せんも、愈々讀みて愈々明白を覺ゆべく、且つ参考書として座右に置くの便もあり。儒學國學の一般文學に於ける位置、之を譬ふれば猶ほ玄關より座敷に進むが如きのみ、興味は勝手口より臺所に入り、書生の下婢と争ふを視、井戸端會合の擾々を聽くに在るべきも、玄關より順序を履まざれば、家の結構遂に料り得ざるべし。西洋の文學史多く詩歌小説に偏し、文運の本素并に大勢を知り難きの嫌なしとせず、是れ之を編述する者の眼界狭きが故にして、眞の文學史は必ず先づ廣く大處を觀察するの要あり、文學の範圍は層一層廣濶ならずんは有るべからず。意ふに彼の三百年は三百年を以て終始し、封建の下に發現せし文學は、封建の没影と共に没影し、昔日の文學再び目撃す可あざる者の如く然り、然るも峩々山嶽を欺く氷塊の消融して川

と爲る、大變化は則ち大變化なるも、成分に於て曾て差違あらざると等しく、封建壞れて郡縣と成れるも、現下百般の事一々系を尋ぬるを得、文學の大變化といふも、寧ろ形の更まれるに過ぎざるを見る。前代到る處に儒者ありて、今幾と之れ無きは、これ消はて跡なきに非ずして、教育家といふ新職名の生せるなり、前代儒學國學の士流の學問として重せられ、今徒だ固陋の輩の職業として輕んせらるゝは、これ全然事の變革せるに非ずして、法政學といひ文學といふ新學名の起れるなり。儒學は由來多様に見べき者にして、幕府の初政より夙に治道の要具と爲り、羅山の將軍に仕へしも、法政の顧問として然りしものにて、其の僧に壓せられしは人物の卑かりしが爲りのみ、白石、栗山、皆法政に力あり、東湖の類亦然り、若し夫れ西山の若き、樂翁の若き、直に是れ儒とし

て國政に臨めるなり。兼山、蕃山は經濟に通せり、闇齋、藤樹、仁齋、徂徠、後素は教育に長して哲學に得る所あり、各々一家の見ありき。但だ書の少きや能く網羅して別に自ら見識を立て得たれど、新書の續々到來するに及で、此を讀むに之れ追はれ、相率ゐて讀書家と爲りしが、是に於て漢學あり、精里、二洲、一齋より以降、専ら書を講ずるを旨とし、北山、鵬齋、淇園、錦城等の才を以てして亦讀書に忙殺され、終生文字に苦めり、拙堂は稍々群を離れりとすべきか、山陽の讀書よりも、力を史に瀉けるは、亦聊か途を異にせるもの、考證足らずと雖も、縦横に國勢を推斷せるは、國史の用を發揮せりとすべきか。國文學は眞淵、宣長等素より其人に富み、全齋の漢吳音圖は博言學の先驅とすべし。斯の如く儒學國學は今の法政學と文學との前身なるが、法政學としては殊に甚しく形を變

四

したるの觀あれど、政治家がホメルスの詩、プルタルクの傳に得るあるべくは、漢書に得べき所少しとすべからず、所謂英雄なる者、東洋と西洋と頗る相近似し、西洋的の直に東洋的なるもの多きを考ふれば、古風の漢書も實際の法政に裨益なしとせず、大丈夫の精魄、時に龐大國興衰の間に養ふ亦妙とせんか、國學は古來の規制を稽ふるに必要にして、朝廷の事、毎に意を此に致さざるを得ず。文科大学に哲學、漢學、國史、史學、國文學、博言學あり、高等師範に漢文學、國文學あるが、法政以外の儒學國學は、面目を此間に保つ者とす。面目は則ち此間に保たると雖も、其の活機活用は盡く新面目を以て現はれ、新舊の間洵に著大の相異あり、畢竟形の變せる者にして、力の存するありと雖も、形の變は實に歴史の表號、前後を比較して優劣を判するも、自然の順序なり。判して而

五

して何似、曰ふべし、學問としては前の後に劣る遠きも、學者其人として、前は前或は後に勝る遠きものありと、新學開けて以來僅かに三十年、此間輩出せる者を以て直に三百年の人物に比するは、對を失ふやに聞ゆれど、昔時とて文運常々進めるに非ずして、時ありて急に盛を致し、或は元祿時代と稱し、或は寛政時代と名くべく、而して明治は即ち未曾有なる長足の進歩を以て名あれば、彼此の較量決して理なしとせず。熟々考ふるに、今は位高く、祿多く、而して信足らざるが如し、數千圓の年俸あるも、偶々同額の他官と比せられて俗吏と異なるなく、寛政の儒官の祿二百俵にして名望一世に高かりしと、逕庭あり、法政學にては井上毅氏の若き、勢力ありしと謂ふべきも、而も斯人や新學よりも寧ろ舊學を以て重せられしなり、教育にては福澤諭吉新島襄の二氏太だ力

六

あり、而も俱に事務に長して學力の稱すべきなく、昔人の學力亦群に抜けるが如くならず、漢學、國文、國史、博言、今固より斬新の説あるも、人を動かして得る者極めて少し、高に登て呼ぶも聲尙は遠に達せず、淺ましき事なり。要するに今の學者は見識ありて學に乏しき少數を除くの外、大抵は學藝を以て推さるゝ、恰も豪富の貨財を以て推さるゝか如く、貴物に在りて人に在らず、人としては絶て貴むべきなく、單に學藝を荷ひし凡人として認めらる、故に碩學と稱すべき者あるも、其言ふ所鸚鵡の語るが如く、幫間の笑ふが如く、更に重を占めず、隨て學藝の大に世用を爲しなから、學者の價格甚だ低し、前代といへども先生の稱は概して貴からざりしかども、之を貴くせし者亦少きに非ざりき、蓋し前に事々物々門閥を以て成り、布衣の力を伸はずべき自由は學問に

七

存し、爲めに豪傑の士往々にして學界に入り、學を以て侯伯を教誨し、學を以て民衆を風動せしむ。今は有爲の材ある者務めて俗界に走り、敢て書庫に兀坐して學者たらんとせず、竟に學界をして懦夫の世界に化せしめぬ、憾むべからざるか。然れども是れ學を修むるの道至て狭く、嚴緊なる規則を履まざれば學者たる能はざりしが爲めにして、設し己が欲する儘にして修業するを得ば、氣力ある者必ずしも學に冷ならざるべし、理化學の類は官公費を仰がざれば專攻し難かるべきも、法政學と文學とは道途頗る開發し、陋巷よりして到達し能はずとは限らず、豪傑の氣を負へる者書を讀む亦不可なからんか。儒學國學の變遷を繹ね來れば、此間の消息知るべからずとせず、文學の下行せる者の如何に進行し來りて如何に曲折すべきかも揣摩し得べからずとせず。

八

本書は熟讀すべきの價値あり。著者内藤湖南は自助の人、貌揚らずと雖も、蘊蓄する所頗る多し、致々として倦まずんは、其れ或は後人をして己を論せしむる猶ほ其の今時古人を論するが如くならしむるを得んか。然れども湖南は名の不朽を以て自ら慰むるが如き妄想漢たるに非ず。

明治三十年一月

雪嶺 迂人 識

黑漆崑崙。夜奔投海。百鬼瞪目。擱空追掘地
求。兩々三々。扶籬摸壁。右眼八兩。左眼半斤。
直饒與麼工夫。穿却皇天鼻孔得。猶是拖泥
帶水。有什麼交涉。且道。明月宿蘆花。白牛臥
露地底。也作麼生。黑頭杜多。白拈賊。漫弄燃
犀。倒把閻羅印。據欵結案。是賊知賊。罪狀分
明。須一坑埋却。圖天下太平。請借手大方。同
情者出來。

藹々居士青巒題

百州風雲箭の如く、烟霧墨の如し、盍そ速かに君か劔を負ひ、君か馬に跨り、直ちに江を渡り、河を渡り、北の方萬里の長城に上りて、出沒して平原を望まざる、文章雄圖を策し、俗子と得失を争ふ、要我徒の事にあらざるなり。山陽の別天、日本の南八、二君以て何如と爲す。

呂 泣 生

贈内藤湖南并題其近著近世文

學史論

寧齋 野口弑

知君經世平生志。史眼燃犀筆發硯。一代文章關氣運。百年河嶽見英靈。指陳貫串趙甌北。規畫詳明計改亭。似此奇才猶坎壈。紙窓風雪夜燈青。

黒頭尊者、志已に時と睽き、才世用たらず、精力を書卷に耗し、無聊を筆墨に遣る、縦に千古萬古を貫き、横に五方十方に亘り、其時を尙論し、其人を尙友す。嘗て興を近古の文物に動かして、三百年氣運の變移、寛濶なる寛文延寶風、伊達なる元祿寶永風、滋味ある安永天明風、派手なる文化文政風、射ら其時に處して、而して目たり其人に接するが若し。會心の處に到れば、便ち往々筆を呵し墨を驅ることを免れず。興酣以往、灑氣流露、譬へは猶武夫健卒、稍を右にし、劔を左にし、馬を盤らして、擊刺氣を盛にして、叱咤、僵屍草の如く、萬人盡く廢するがごとく、快言ふべからず、憂然として筆を舍け、は、燈華爲めに動く。

嬉々として梁に笑ふ者あり、汝をして汝が論する所の時に處し、汝が方ふる所の人と伍せしむ、汝果して能く頭地を其間に出し、

翰を操て其人と周旋し、其時を文飾するに足るか、汝自ら力を量らず、而して敢て妄りに前輩を是非するかと、之れが爲めに懊惱半日。

困て而して憊れ、寢て而して夢みる、儒服の客あり、勃焉として罵て曰く、孔曰く仁を成す、孟曰く義を取る、人の爲にす己の爲にす、汝將た何れをか擇ぶ、乃ち枯骨を鞭箠して、萬言千行、無用の辯を費す、汝竟に胡爲る者ぞと、覺めて而して汗背に、涙きを見る、之が爲めに又懊惱半日。

昔しは楊子雲、太玄を作る、或ひと玄の尙白きを笑ふ、今は黒頭尊者、近世文學史論を著はし、覺めて而して懊惱、夢みて而して懊惱、懊惱已まらず、頭も亦將さに白からんとす、寧ろ筆を焚き、墨を折り、思を絶ち、慮を廢し、死灰槁木に従て而して終らんか、尊者猶頭黒し、此の如く其れ退くこと能はず、將た寧ろ朱を拖き、紫を縈ひ、利奔名走、勳業紛華を取りて而して快うせんか、黒頭已に尊者と稱す、此の如く其れ進むこと能はず、進退兩ながら不可、已乎已乎。博奕なる者あらずや、之を爲すは猶已むに賢る、筆墨なる者あらずや、之を弄するは乃ち猶博奕に賢ること無からんか。

黒頭尊者 自識

例言

一此書の舊名を關西文運論と曰ふ、著者が昨年大阪朝日新聞社に在りし時、其紙上に連掲せし所なり。初め之を草するや、實に三百年文運の大勢に關係ある者、儒學、國學、小説、戯曲、美術、宗教等を網羅し、著者が一家見を以て、之が論斷を試み、以て之を大方に質さんと欲す、其の篇章の若きは、最も簡率を主とし、二三週の日、十四五篇を以て結尾せしめんことを期し、四月中旬、花を芳野に觀んとするの先日、先づ序論并に儒學の始章を草す。然るに既に筆を下せば、則ち往々豫期に違ふを免かれず、業時務を論議するに在るを以て、専ら本著に従事することを得ず、遷延數月に渉るの間、又他故に礙けられ、東西奔走、屢々續稿を廢し、篇章の長短、又意の如くならず、是を以て三十許篇を累ね、二百餘日を費し、而して僅かに儒學、附醫學、國學の三章を完成せるのみ。既にして社を辭して東上するに及び、同人交々懇慰するに、既成の部を哀めて冊子とし、之を刷行せんことを以てす、乃ち舊稿を取て閱

過するに、遺漏紕繆、層見疊出す、因て頗る刪改補修する所あり、又平生の著論、此論と相發明すべき者數篇を末に加へ、以て活刷に附す。

一本著極めて簡疎と雖も、三百年文物の變局に於て、容ほ大梗を盡し、必ら老しも關西を偏舉して、他地方を略せるに非ず、舊名の頗る妥當を失せるを覺ふ、故に補訂の次を以て、之を今名に改む。

一著者の浪華に在るや、客寓書に乏しく、大抵知人に假貸し、又書肆鹿田松雲堂主人、好意其の所藏を借示するに會し、僅かに以て參攷に資することを得、故に稽徵證引、極めて便宜を歎き、往々暗中摸索、架空結想、毎々負心の文字を作すことを免かれず、後修訂を経と雖も、一たび成れる結構、盡く改むべからず、特に其の太甚しき者を去る耳、若し大方讀者、批正を吝まるゝなくば、著者の慶甚し。

一本著の大阪朝日新聞に上るや、此に縁りて新たに老儒先生の知を辱うせること、慙からず、往々約するに高批を賜ふを以てせらる、今匆率印行するを以て、一々閱正を経るに違わらず、亦異日再訂の時を待つべし。

一本著の論次せんと欲して、而して竟に及ばざりし所、小説戯曲、美術の若きは、著者

の腹蕪、容ほ成案あり、宗教の若き、衰殘の期に屬し、大なる光明なしと雖も、殘山剩水、亦曲折の觀るべきあきにあらず、尋て當さに論次すべし、幸に再刷の日に際せば、順次増益して、三百年文運の大綱を領略するに於て、遺憾なからんことを期すべし。

明治三十年一月

著者識

近世文學史論目次

序論	一
儒學上	九
儒學下	三三
附醫學	六三
國學	八五
餘論	一三六

附録

地勢臆説……………一

日本の天職と學者……………一三

畫道の一大疑問……………二五

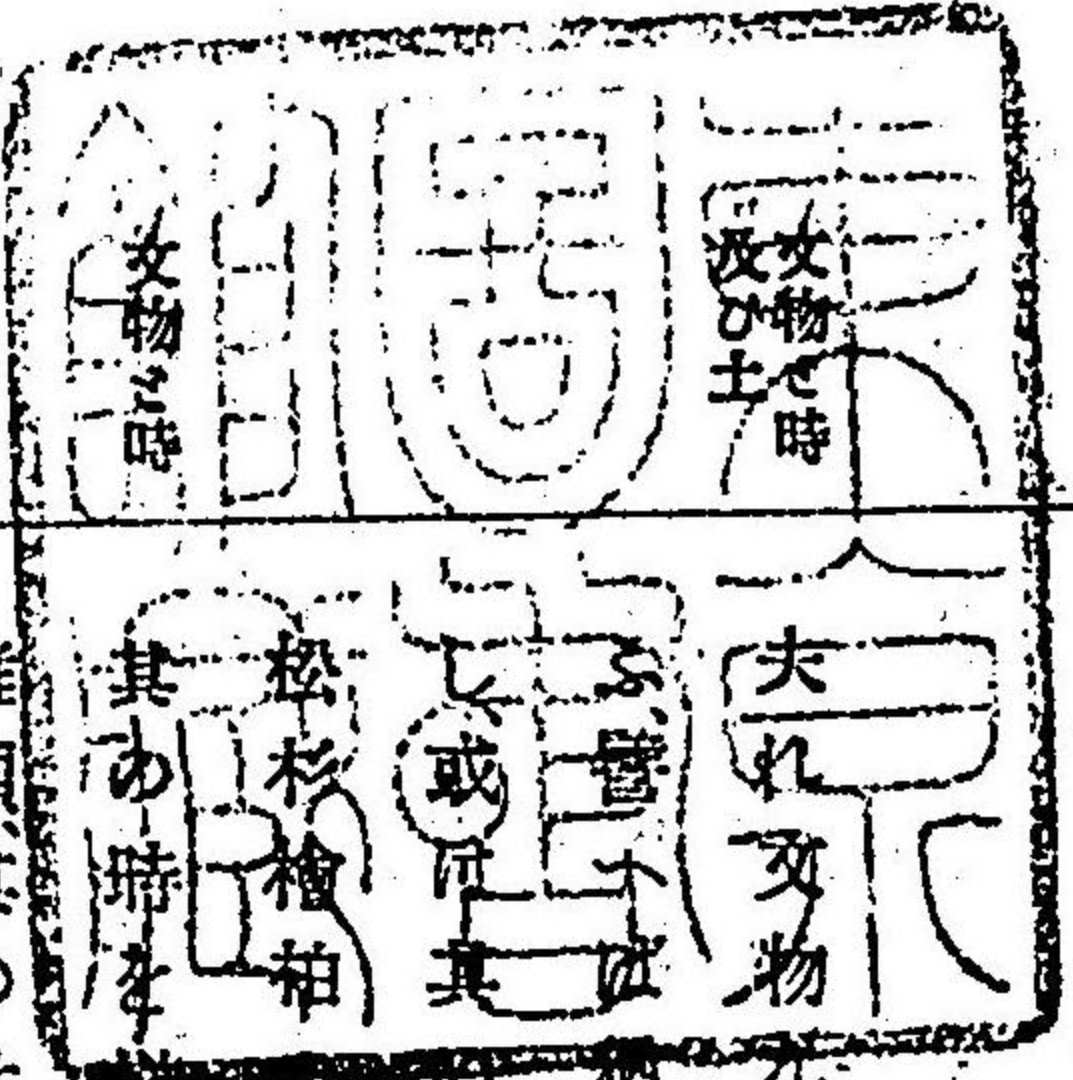
近世文學史論

内藤虎次郎著

序論

夫れ文物なる者は、民種の英華なり、方土の果實なり、或は其の時に應じて而して榮
る。譬へば、橘は櫻桃杏李の盛春に於ける、桔梗、敗醬、胡枝、紫莖の初秋に於けるがごと
し。或は其の壤に因て而して宜しうす。譬へば、椰子、榕樹の蔭を炎日の下に交へ、
松杉、檜柏の翠を堆雪の中に見はすがごとし。

雅頌其の絃は則ち韶武、辭令の春秋に妙なるや、戰陣の間と雖も、整うて而して暇あ
る、以て相尙ぶことを爲し、雍容閒雅曾て急言竭論せず、辯説の戰國に盛なるや、長短
挿闔、縦を合し横を連ね、人の國を安危し、人の家を存亡せしむ、記誦訓詁の兩漢に精
なるや、三冬二十萬言、奇字艱辭、博閱を銜耀し、名物度數、蟲魚草木、曲さに詳密を極む、



清談詞章の六朝に行はるゝや、半吐半吞、含糊微中、以て其の玄を競ひ、綺章繪句、駢四儷六、以て其の巧を争ふ、有唐の詩、菁華瑰麗、已に極り、馳騁揮霍、又有、渾々灑々、沈鬱頓挫、前より光にして而して後を啓く、有宋の學、天人の際を極め、性理の奥を發し、碎脛の習を擺脫し、精一の旨に體達し、雲霧を排盡して、親しく日月を睹る、明清の纂輯考據、二百四庫、汗牛充棟、獮の魚を祭るが若く、毫釐を剖析し、錙銖を甄別し、益と伍を爲す、かの佛法の如きも、永平に騰關西來してより、後、傳譯義學、先づ草昧の運に行はれ、羅什龍樹の空宗を傳ふるも、講敷の業を主とするのみ、法相、南山律、唐の初に盛に、善無畏、不空の密教、其の中世に弘まり、而して宋明に至りて、天台、南禪、乃ち天下を蔽へり、是れ其の時に應じて而して榮ふる者ある也。

其の土を以てすれば、則ち山東相を出し、山西將を出す、儒雅の風、洙泗に遺り、武健の俗、甘涼に存す、憲章儀文、經緯制作の美は、華夏の誇る所にして、箕子の洪範、周公の禮樂、實に集めて之を成し、鉤玄遠思、婉言微辭の妙は、吳楚の具ふる所にして、老莊の論著、屈宋の文章、又其の萃に拔く者なり、洙泗、徐淮、南北の間に介まり、而して子思、孟軻、英を含み、華を咀ひて、斯に其の物を備へて、而して并せて其の性を盡し、淮南の諸儒

に至りて、又齊東の怪詭を該ぬ、南北の際、晋は玄言を尙び、宋は文章を尙び、齊梁の君、其の子孫と、亦皆詩文に於て長を見る、二陸、張左、阮陶、鮑謝、豈に時の選に非ざや、而して元魏、齊周は、則ち猶ほ馬鄭の流風を受け、通經績學を以て業と爲す、徐遵明、劉炫、劉焯の徒、實に東京に嗣で、而して隋唐を開けり、唐秦漢の故地に踞し、其の盛時の學者、専ら三禮を以て重しとし、漢書文選之に次ぐ、凡そ音義註疏の書、此時に至て大成せり、北宋も亦頗る考古の學を雅尙す、南人の國に用ゐられしより、乃ち唐の太宗を誤て宋の太宗と爲す者あり、朝章典故の講ぜられざるを見る、故に南宋に至りて、鄭樵、李燾、王應麟、馬賁、與等、其の精博を極むと雖も、一世の趨く所は、則ち此に在らば、濂洛の學、北の氣運を牽て、而して之を南に渡し、朱陸の義、務め精微に在り、以て宋明に及んで餘姚の直截一派を出すに至る、佛教の弘まるや、釋道安、襄陽の人を以て、譯經の規模を一變し、廬山の慧遠、其の門を出で、始めて涅槃常住の旨を發し、蓮社淨教の源を開く、是れ南地佛教の先づ異彩を見はせる也、羅什門下、三論の宗、猶ほ北地義學の臭味あり、天台の智顛、曹溪の慧能は、南人の秀にして、法相の精緻、戒律の謹嚴は、北教の粹なり、智顛、北齊の慧文より傳ふと稱するも、文の門下北に在る者、聞ゆるなし、南

相時と土と
相違す

岳の慧思を経て、頗る自ら發明あり、敢て前轍を襲はず、况んや韻の大才、固より人の
牙慧を拾ふ者に非ざるをや、慧能の神秀と、頓漸の辨ある、又以て少室已來の旨に變
ずるあるを見るべし、杜順の華嚴は、天台法相の間に出入す、其の旨とする所、事々無
礙に在り、密宗の教相は唯識に依り、戒法は四分に依る、皆北地に官しうせし也。
之を歐西に例するも、亦曷ぞ然らざらん、唯だ是れ彼間文學の史、具さに此等の消息
を傳ふる者、寔に亦少からず、而して近日文士、耳熟し目慣る、所たるを以て、煩を避
けて一々證引せざる耳。
夫れ時以て之を經し、地以て之を緯し、錯綜して而もて之を變化す、文化の史、斯に燦
然として其の美を爲す、錦繡の文を成すを觀るに、繁簡相代る、此に絢爛の處あれば、
彼に散漫の處あり、人の視線必ずかの絢爛の處に集中し、而して其の段を成し、匹を
成す、繁簡の相代る、從頭徹尾、上下一様なるを嫌ふや、則ち亦一縱一横、以て其の變化
の奇を出す、横卷の山水を作るを視るに、必ず處々湊合の位置あり、以て全幅の氣脈
をして、斷續相屬せしむること、藕を折ること、數節、而かも絲は則ち相牽くが若くす、
而して其の湊合の處、或は重嶂、或は孤峰、或は懸泉、或は幽壑、乃至樓閣、危巖、林樹、密莖、

文化湊合
の中心
地勢既
に附具
はに附
録すに
し者就
るべき

宜しきに隨て點綴し、以て其の重複を避く、是に於てか文化湊合中心の説あり。
嘗て地勢臆説を述ぶるや、趙翼が長安地氣の説に因りて、頗る此の義を發す、秦中は
古より帝王州たり、周秦西漢、南北の際、割據の大國、皆踞して都と爲す、唐の開元天寶
に至りて、長安の盛極まれり、盛極まれれば必ず衰ふ、是の時地氣將さに西より東北に
趨かん、とす、安史の亂後、河朔三鎮、唐の節度を受けず、其の末に及で、長安夷して郡縣
と爲り、而して契丹已に遼に起る、洛陽汴梁氣の東北趨する者の爲に、逡巡潛引して、
一二百年の後、東北の氣、積で而して益固く、元明に至り、遂に天下の全きを有すと、趙
翼の論、大旨此に在り、因りて長安の前、洛あるを説く、蓋し武力の強、冀州に在り、唐虞
夏商、南面して天下を制するに當り、食貨の利、豫州に在り、人文乃ち此間に醞釀す、而
して洛は二州文物の湊合する所の處なれば也、又長安の地氣は、洛陽に代りて雍州
の人力を興し、而して其の索くるや、燕京の帝王都たるは、人作に出で、人文の嚮往集
中する所は、揚州に在ることを説き、以て趙氏の謬を匡す、既にして日本の天職と學
者を叩するや、云ふあり、
希臘のペリクレンスの時に盛なる、後に歴山王ありと曰ふと雖も、固より純正の希

日本
の
天職
と學
者
の
具
に
附
録
す

臘人に非ず、其の事業又攻伐に止まる、羅馬の神聖帝國一たび崩壊して、意大利の人力復た歐洲文明の中心たるに足らず、阿輸迦王佛敎の保護者たりし後、印度再ひ轉輪王を出さず、白蠟、墨西哥の若きは、其の生熟盛衰、自から一地疆に在て一元を終始して、全く境空に歸せり、乃ち支那に至りても、三代の兩漢と、唐宋明清と、文化一たび断えて、而して再び盛に三たび興るに似たりと雖も、河洛の開化は、關中の文明にあらず、江北の休治は、江南の人文にあらず、代るく相推移して、必ずしも復た興らざる也。

因て諸々國民が人道と文明とを光被するの職之を天より命ぜらるゝ者、世々にして其の任に堪ふる者を選ばるゝを説き、證するに

河洛の澤竭きて、而して關内の化盛に、北方の文物枯れて、而して南方の人文榮ふ、亦時を以て而して命ぜらるゝ所ある也、埃及、アツシリア、印度、波斯、フェニシヤ、希臘、羅馬、相踵で迭に興る、亦各時を以て而して命ぜらるゝといふを以てし、以て文明の中心、時と移動するを断じ、更に其の移動するや、後の中心、必ず前の中心に因ることありて、而して損益する所あり、前者の特色、或は消耗に

文明中心の移動

就くは、後者の特色、新たに展開するの地を爲す所以、而して各其の時に宜しうし、以て人道と文明とを萬世に維持するの意を鋪張せり、蓋し般は夏の禮に因り、周は殷の禮に因り、而かも忠や質や文や、尙ふ所は同じからず、漢の治は、蜀道を維へ、専ら王政を取るにあらず、故に周の禮文、秦の法律、并せ探りて斟酌す、唐は南北を合一し、詩賦經藝、兩つなから存して士を取るの法とし、氏族を志すは、六朝門地を尙ぶの風を傳へ、均田を定むるは、三代井田を制するの遺を紹ぐ、翟曇の化、東南に播して、馬鳴龍樹の教、般若の宗を開き、其の西北に敷くや、世親護法の徒、瑜迦の論を造る、皆外道の説に得る所あり、其の震旦に入るや、智者、大鑑の法、博大簡捷、佛に超え、祖に越ゆ、亦豈に儒學道教、清談玄言の風に移さるゝ者なからんや、希臘哲學の祖は、多く埃及、フェニシヤの間に遊び、羅馬の學者、制法家、概ね希臘に學ぶ、近世に及でも、所謂學術の復活は、又遙かに希臘の秘鑰を發くに起り、東方の文明は、十字軍の媒する所と爲り、以て歐洲新文物の生面を開けり、文物の已にアルプスを踰えて北せし後も、ドーザアの彼岸、此岸、ラインの東方、西方、迭に小盛衰なきに非ず、所謂エリザベス時期、ル井十四世時期と、再興獨逸帝國と、前後相代るに似たり、此は則ち文化湊合中心説の大梗

三百年來
文物の變遷

あり。
將さに少しく慶元以來、三百年間斯邦文物の變移を察し、而して其の前後遞に中心たりし關東關西兩地が、其の氣運に與りて力を爲せる所以を明かにせんと欲す、乃ちかの時の應ずる所、土の宜しき所、通じて之を四海に徴して、謬らざるに感ずることあり、故に先づ凡を發し例を設けて、以て其の端を啓くこと此の如し。



楓窓以前
の宋學

清原賴業
文治五年
八年

玄慧正平
五年寂年
八十二
虎關貞和
二年寂
桂庵永正
五年寂年

儒學 上

慶元以來の文物、其の最も先に最も盛に、異彩を放てる者を儒學とす。蓋し王室の式微、管清二家専門の學も亦衰殘に就き、禪家の僧徒獨り宋明に往來するを以て、文權漸やく此輩に集まり、五山遂に文辭の淵藪と爲れり、其の漢唐註疏の學廢して、程朱新註の講起るも、實に此際の氣運と相關かる。清原賴業が學庸を禮記の中に抜きしは、かの晦庵の時と相前後すと雖も、惜むらくは、其の説傳はらき、意ふに當時佛教亦已に台密の形式を専らとするに安ぜず、淨土の教、佛心の宗、世運の活動と相應じて、新に興る儒門の斯人あるを怪しまず、但だ繼起人なく、擴めて之を充たす能はず、久しからずして亂離相踵ぎ、公家武家、往々讎敵を相爲し、明經の博士も、禪僧の當時實力ある者に得らるゝが若くなるを得ず、是故に新註の經筵に講ぜらるゝや、或は以て玄慧が後醍醐帝に侍讀せしに始まると爲し、虎關師鍊、實に始めて語類を讀めりといふ、其の後、渡明の僧徒、彼地の文儒と應接する者、固より皆當時宋學の極盛に浸染せらるゝことあり、其の専心之に趨きしは、亦南禪の桂庵玄樹に始まる、應仁文明

待たずして興る者と爲す、宋學の佛老に浸淫して、孔子の旨に違ふを論じ、易の一陰一陽の義に據りて、生々息まざるを以て道となし、天地間一元氣と言ひ、其の二端を以て流行主宰と爲し、理氣先後の説を排し、充養の方を主として、痛く復初の説を斥けたり、其の篤學敦行、恬靜自ら守り、諸侯に祿仕せず、爛眼炬の如く、讀書紙背に透る、器識曠世と謂ふべし、故に趨合同じからざる者と雖も、其の用力の篤き、學行の致に至ては、同時後世、異論あることなし、五子家學を傳へ、而して東涯の博洽精緻、亦其の緒業を恢張するに足る、元祿の半ばよりして、寶永を経て正徳の末に至るまで、其の學盛行はれ、凡そ天下十に七、趨て而して之に歸し、元和寛永以來の風、是に於てか一大變せり、繼ぐに物徂徠を以てし、其の特絶の天才を以て、好名の念に熾に、既に頭巾習氣の、道學に甘ずる能はず、又時相及ぶ先輩の籬下に立つことを欲せず、偏強の性、適々李王修辭の説に合ふことあり、而して資稟文に妙なるを恃むや、乃ち經義を古文辭の間に求め、所謂聖人の道を以て、詩書禮樂の教に在り、事功苟くも立たば、心性に論ずることなしとし、其の博辯宏才、史傳律令度數方伎に至るまで、旁涉して兼通せざるなく、以て一代の才能を推倒す、其の學史乘實蹟を知るを尙ひ、空疎の言を

伊藤東涯
元文六年
七

荻生徂徠
享保十三年
十三

斥くと雖も、而かも鄙近の功利を以て、道徳の根據とし、高遠の思を遺すことを免かれず、其の經世の論に至ては、江戸を以て權力名爵の盡く由て出る所たらしめんとし、照公の遺意未だ行はれざる者ありと稱して、一種治安の策を建て、時政の因循を刺り、白石の無識を嘲る、或は此を以て賈生に比し、以て羅山の叔孫通に比すると相對す、頗る曠達豪宕を喜で、門戸を張皇し、一時俊髦、其の門に出で、而して名を成すを樂まざるあり、是を以て、該園一派の學、數年あらずして天下に彌漫し、享保より以て寶曆明和に及ぶまで、五六十年、靡然として、影從響應し、而して學風の轉移、勢全く成れり。

夫れ王仁の文字を傳へてより、文上宮に糊まり、詩大友大津に起り、吉備氏之を寧樂に弘め、嵯峨帝之を平安に鼓す、明經の科、大學に建ち、文章の士、朝廷に重ぜらる、然るに經を講ずるは漢唐註疏を墨守して、文を屬するは白氏文集を影摸するに過ぎず、當時氣運、誠に已むを得ざる者ありて、彼土に在りても、新義の勃興せしは、宋の中葉以後に屬し、而して我は則ち此際に及で、武治時會して、文教地に墜ち、人文の發達爲めに抑塞を被ること、數百年の久しきに彌るを致すと云ふと雖も、驢虞の治成りて

六七十年、儒林多士、猶ほ程朱の爲めに鞭を執るを甘ぜし時に當り、伊物二氏獨り赤
幟を樹て、思想獨立の先驅たり、偉なりと謂ふべきのみ。抑も仁齋の疑を宋儒に挾
さむ者、實に其の心に於て安せざる所ありて然るか、設ひ其の明の吳廷翰等の説に
啓かるゝ所あるを疑ふ者あるも、識者已に其の誣妄を辨ず、其の人と爲りを思ふに、
妄に異を立て新を標するを以て自ら喜ぶ者に非ず、故に其の門下、概ね君子人多く、
用世の才に乏しきも、輕薄の習なし、謹で剛傳を守ること、宋學の先輩に減せず、中に
就て並河、天民が識見超邁なるが若きに至ては、木荻二門の多士なるを以てするも
多く、其の比を見難き所也。徂徠に至ては、則ち滿腹覇氣、唯に其の出處の人心を飲か
しめざるのみならず、其の進むや、又實に兵家を以て祿を獲たり、但だ其の才敏、既に
人に過絶し、才給らざる所、又氣力之を濟す、而して其の洒脫流滑、禮節を簡略し、行實
を檢せざるを以て、才俊子弟、名利に熱中する者、從遊して其の欲する所を得るを便
とす、蓋し是に於て従前學者、體察踐行を重じ、修齊治平を志とするの風、熄で、而して
文士技を誇ぎ、詩酒徵逐、風流相高ぶるの習生ず、此は則ち二氏の相異なるなり、豈に
興國の氣象、伊氏に索き、而して承平の習氣、物氏に奇まる歟。

二氏の外に在て、當時の氣運と相關かる者、山崎の徒にして、淺見綱齋の若きあり、王
覇の辨を明にし、一生足京師の外を踏まざり、勤王の義を倡へて、萬世の爲めに太平を
開くを以て自ら任ず、博綜には則ち具原益軒の若きあり、其の晩年大疑録を著はし
て、宋儒の言、往聖の旨と合せざるを道ふ、蓋し聰明なる者の盡く前人に僕從する能
はざるは、益軒の篤謹と雖も、此に至る、勢なり、二子粗ぼ仁齋と時を同じうす、其の徂
徠と同時なるは、木門の諸子、白石、鳩巢以下、護國の徒と並び馳す、鳩巢自から謂ふ、義
理に於ては、必ず羽翁の許可を得て以て自から信じ、文辭に於ては、必ず木翁の品題
を経て以て自ら足れりとす、羽翁とは羽黒養潛、山崎の徒なり、故に鳩巢の學は、洛
閩を守り、其の文は、唐宋八家を主とし、以て當時古學、修辭の説に抗し、三宅石庵と東
西相應じて、宋學の殘壘を保つ、然るに其の文辭を斥け、石庵が懷徳書院も亦後年
中井兄弟を出せるを觀るに、其の學風、既に山崎一派と逕庭あるを見る、則ち時之を
然らしむる歟、將軍吉宗の治は、専ら吏才の能に任用して、文儒を尊ば、鳩巢獨り徂
徠と顧問に備はり、眷遇優渥なるを得しは、亦其人白石の志大に氣銳あるが若くな
らざれば也、新井白石、經濟の才を抱き、一たび明主に遭遇して、頗る志を時に行ふと

とを得、幾ならずして意を失ひ、事功多く廢すと雖も、かの皇族削髮の制を停めて、龍種の振々を圖りしが若きは終古沒すべからざる者、貨制の壞濫を正せるも、亦惠一代に決し、獨り韓使接應の儀、赫々の名あるのみならず、或は其の文綽を喜で、武健の風を損するを顧みざるを病む、然れども公武劫制の術をして、決して百世治安の遺法と爲すべからざらしめば、則ち一代の憲章、竟に選定する所ありて、以て必由の制と爲さざるを得ず、創業草昧の風、強霸權數の習、人の國を亡し、人の後を絶ち、以て自ら肥すが若きは、復た永く用ゐるべからず、而して式微の王室をして、其の僅かに積衰の餘に保てる名爵の虚權を并せて之を失はしめ、以て之を實力の府に授くること、徂徠の言の如くするに至ては、亦志ある者の忍ぶ能はざる所、故に白石が其の絶代の才調、典故の學、無雙と稱せらるゝを以て、之を實際に施し、以て其の時に應ずるの道を求めんとするを評して、江戸を變じて室町の若くならしめんとせる者と謂ひ、太平を飾るに過ぎずして、經濟の畧なしと謂ふは、匪たる也、白石の學問は、蓋し三禮に淵源して、國史朝典に渾融す、當時經濟を談ずる、荻生太宰の徒、皆禮樂を以て先とせざるなし、意ふには深く時俗の漸やく淫靡に流れ、鄭衛の音、人心を蕩搖す

安積泊
元文二年
癸酉八月

るに憤ふる所ある歟、而かも彼土聖王制禮の意を精究して、之を國家生民而還の變遷に稽へ、以て治平の經綸に試用せんとせるは、唯だ白石を堂々たりと爲す、亦其の史學の炬眼精識、以て之を裨くるある也、安積泊と問答せる所を觀、其の古史に發明し、世運の轉移に論斷する所を讀むに、疑を決し、幽を闡き、左右源に逢ふ、眇たる五尺の軀、三十五萬提封の三分一を費して、一代の才學を網羅せる水滸史館に當りて、綽として餘裕あるを覺ゆ、其の詩も亦天分高朗、論者謂ふ、高華雄渾、片言隻語も寒乞相に涉ることなしと、而して其の鞭を着くる、實に護國諸子の先に在り、但た志已に經世に在り、講授を以て徒を集めざること、熊澤番山と揆を一にす、故に其の學一世にして傳を失ふも、亦熊澤と轍を同じうせり。

水滸史館

水滸修史の學も、亦當時文學の一大偉觀なり、其の林氏の杜撰、國體名分を殺亂せるに激せらるゝ所ありといへば、則ち其の記聞の學、泛雜にして裁制なきを慨せるよ出るや、乃ち史を以てすと雖も、亦頗る山崎氏の經に於けると相類せる歟、大日本史、禮儀類典の作、無前の大事業たるに論なく、文書の探索、人を四方に派して、金匱石室、到る處に秘を發せしを以て、爲めに殆ど一世を傾倒して、繼絶興廢の風を策勵し、稽

文儒の品
下る

殿後元七
享和五年
享和七年
享和十年
享和十三年
享和十六年
享和十九年
享和二十二年
享和二十五年
享和二十八年
享和三十二年
享和三十五年
享和三十八年
享和三十九年
享和四十二年
享和四十五年
享和四十八年
享和五十一年
享和五十四年
享和五十七年
享和六十年
享和六十三年
享和六十六年
享和六十九年
享和七十二年
享和七十五年
享和七十八年
享和八十一年
享和八十四年
享和八十七年
享和九十一年
享和九十四年
享和九十七年
享和九十九年

渡井太室
天明八年
天明十年
天明十三年
天明十六年
天明十九年
天明二十二年
天明二十五年
天明二十八年
天明三十一年
天明三十四年
天明三十七年
天明四十一年
天明四十四年
天明四十七年
天明五十一年
天明五十四年
天明五十七年
天明六十一年
天明六十四年
天明六十七年
天明七十年
天明七十四年
天明七十七年
天明八十年
天明八十四年
天明八十七年
天明九十年
天明九十四年
天明九十七年
天明九十九年

江村北海
天明七年
天明十年
天明十三年
天明十六年
天明十九年
天明二十二年
天明二十五年
天明二十八年
天明三十一年
天明三十四年
天明三十七年
天明四十一年
天明四十四年
天明四十七年
天明五十一年
天明五十四年
天明五十七年
天明六十一年
天明六十四年
天明六十七年
天明七十年
天明七十四年
天明七十七年
天明八十年
天明八十四年
天明八十七年
天明九十年
天明九十四年
天明九十七年
天明九十九年

文墨餘技
の遺起
三浦梅園
寛政元年
寛政三年
寛政五年
寛政七年
寛政九年
寛政十一年
寛政十三年
寛政十五年
寛政十七年
寛政十九年
寛政二十一年
寛政二十三年
寛政二十五年
寛政二十七年
寛政二十九年
寛政三十一年
寛政三十三年
寛政三十五年
寛政三十七年
寛政三十九年
寛政四十一年
寛政四十三年
寛政四十五年
寛政四十七年
寛政四十九年
寛政五十一年
寛政五十三年
寛政五十五年
寛政五十七年
寛政五十九年
寛政六十一年
寛政六十三年
寛政六十五年
寛政六十七年
寛政六十九年
寛政七十一年
寛政七十三年
寛政七十五年
寛政七十七年
寛政七十九年
寛政八十一年
寛政八十三年
寛政八十五年
寛政八十七年
寛政八十九年
寛政九十一年
寛政九十三年
寛政九十五年
寛政九十七年
寛政九十九年

に規せられざる者、日月に益滋く、加ふるに當時諸侯の文儒を招聘する者、米澤藤山公の細井平洲に於けるが若きを除く外、概して一種の狎客を以て之を遇し、其の博洽に資て以て誇耀人に驕るの具と爲すに過ぎず、故に售るを求むる者、自ら其の心に孤て而して其の才を用ゐんことを欲する者に非ざれば、則ち斗升の祿を取て其の口腹に飽かさんとするの徒のみ。室鳩巢曰く、儒者寧ろ人主の忌む所と爲るも、人主の侮る所と爲る勿れと、鳩巢の八代將軍に於けるを以てすら、猶ほ此言あり、儒士の品位、享保の際よりして漸やく汚なるを見る。澁井太室云ふ、國初以前書生無し、書生あるは國初より始まる、然るに人主の之を視る、巫醫卜祝と同じ、進むに出身登庸の路なければ、則ち終身書生のみ、書生なくんば則ち己む、書生あるより以來、其の因しむこと未だ今日の若きは有らざる也、文宗の白石を用ゐ、備侯の蕃山を用ゐるが若き、前後に人なし、太上是師傅の優に居り、其次は教授の職を掌り、其次は列國に擧げられ、環列の祿を受く、其次は高門勳家に入出し、其次は類を市井に鼓し、最下なる者は憐を浮屠に乞ふ、大率其口を糊するに足りて、明友を恤ふるに暇あらず、出るに車馬なく、入るに僕従なし、其の困しむも亦至れり、之を上にしては人主之に望むに

諫を納れ國に益するを以てせず、之を下にしては衆人徳を厚くし行を尊うし、子弟をして矜式する所あらしむるを望まざる也、求むる所は文字のみ、其の卑も亦甚しと、此に至て頹風復た回すべからず、護國、赤羽の後、詩文を以て社を結ぶ者、此際に至りて其の盛を極め、服蘇門が長岡社、江村北海が賜杖堂、片山北海が混沔社、安清河が市隱堂、東西並び興る、江村北海が日本詩選を著すや、好名の徒、詩稿を投じて採擇を請ふ者、必らず刻費と稱し、若干錢を納れしむ、龍草廬、書畫會を創し、又其の文を作し字を書する、必ず謝金の多少を定めて、而して後之を許し、速に幣を贈らざれば、則ち輕諾して果さず、納錢入選、江君錫待、價作、文龍子明の語あるに至る、儒風の靡薄、人をして涕唾せしむ、然るに片山北海が混沔社は、則ち寛政三博士等を其間に出し、而して後市河寛齋の江湖社、又輕俊子弟を輩出す、禍福の相糾纏する、塞翁が馬のみならず。

經史足らず、而して異端に汎濫し、文墨の餘緒、衆技に精を耗する者、亦此の際を盛なりとす、富永仲基、服部蘇門の佛氏に於ける、前人の未發を啓き、三浦梅園の三語、天人の幽玄を窺ふ、此れ國より百代に光ある者なり、其の他高芙蓉の篆刻、吉田篁墩、木村

葛西因是
政文六年

安政五年
菊池五山

古賀精里
文政十年
七堂天保
五茶山文
政八年文
年八十文
文政六年

健左氏を學び、栗山諸人、唐宋大家を準とす、皆舊習を破る者、北山等の謾社諸子を詆刺すると相前後す、葛西庵、僧六如等宋詩を倡へ、市河寛齋、寛政の初より、江湖詩社を結びて、益性靈を主張し、清新流麗を以て後進を導き、大窪時佛、菊池五山等之に羽翼して、織巧雋奇を以て、更々相標榜し、一時海内を風靡す、詠物竹枝は其の好で新奇を競ふ所以て、前時古意少年從軍園怨の題目に換へたり、其の詩酒放浪、輕薄の習は、又往時修辭の徒の末流と相類する者あり、古賀精里嘗て其の子穀堂が、鵬齋詩佛、五山等と墨田川に舟を泛べて、賞遊を借にせしを戒めて、舟中の徒皆鬼怪なりといへり、五山又袁隨園に倣て詩話を著はし、其の錢を納れて人の詩を収録すること、前時江北海等の爲す所に異ならず、獨り菅茶山卓然として時流に抜き、穩秀雅雋を以て、一家の面目を備へ、其の得意の候に至りては、往々神韻超朗、自然に絶調を成し、遙かに正享諸大家に接踵せり、葛西因是、心を詩文の格法に潜め、發明する所ありて、後生字を商量する者の爲めに圭臬を貽す、亦此際在り、此れ實に寛政前後、文化、文政に至る、二三十年間の大勢なり、論ずる者云ふ、偃武以後の詩、丈山、艸山を以て沈宋とし、尙五山の風あり、木萩二家に至りて、一變して唐明と爲る、然るに享元の下流、訂飯陳腐

松崎懺堂
弘化元年
四化七年
猪飼敬所
弘化三年
餘年八十
朝川善庵
嘉永二年
九永六年
東條一堂
安政四年
古賀同庵
弘化四年
佐藤一齋
文政六年

に陥て、口を聞けば、陽春白雪、聚星投轉、萬口一辭、人をして臥せんことを思はしむ、天明寛政の間、再變して宋元と爲る、然るに其の餘流、織巧奇僻に陥て、聖得知、分外清、願る人をして吐棄せしむ、文化文政に逮て、専ら清人の口吻を學び、或は沈確士に左袒し、或は表子才を尸祝す、故に或は英靈間氣を尙び、或は才調嫵媚を喜ぶ、是れ皆氣運に移されて然らざるを得ざるの勢也、江村北海の日本詩史に論ずる所、味ふべしと、此論尤も此間變遷の消息を道破し得て當れる者也、
文政天保以後、經藝を以て專業とする者、漸やく寥落を致す、松崎懺堂は、洛閩を出で、漢魏に歸し、猪飼敬所古學の流れを承けて、又該博と稱す、朝川善庵、東條一堂、徵引博涉を好む、要するに皆考據の學なり、古賀同庵、淹通博綜を以て名ありと雖も、其の官學に在るを以て門戸を立てず、官儒佐藤一齋、安積良齋の若き、皆文章を以て聞ゆ、一齋陸王の説を喜ぶと雖も、時不可なるを以て、敢て公然之を倡へず、其の公然之を倡ふる者は、則ち大鹽後素の若きあり、性己に褊狹、學も亦博からざるも、其の用力の深き、發明の説少からず、蓋し餘姚の學を奉ずる者、中江氏の後、正徳中、三輪執齋の若きあり、巍然として一代の師儒たるも、亦繼で其の學を恢にする者なし、心學の徒、往

慶應元年 齋藤拙堂
 慶應元年 阪井虎山
 嘉永三年 安井息軒
 安永七年 明谷九軒
 文政八年 藤谷岩陰
 文政九年 藤澤東咳
 文政十年 芳野金陵
 文政十一年 明野金陵
 文政十二年 佐久間象
 文政十三年 山元象
 文政十四年 藤澤東咳
 文政十五年 藤澤東咳
 文政十六年 藤澤東咳
 文政十七年 藤澤東咳
 文政十八年 藤澤東咳
 文政十九年 藤澤東咳
 文政二十年 藤澤東咳
 文政二十一年 藤澤東咳
 文政二十二年 藤澤東咳
 文政二十三年 藤澤東咳
 文政二十四年 藤澤東咳
 文政二十五年 藤澤東咳
 文政二十六年 藤澤東咳
 文政二十七年 藤澤東咳
 文政二十八年 藤澤東咳
 文政二十九年 藤澤東咳
 文政三十年 藤澤東咳
 文政三十一年 藤澤東咳
 文政三十二年 藤澤東咳
 文政三十三年 藤澤東咳
 文政三十四年 藤澤東咳
 文政三十五年 藤澤東咳
 文政三十六年 藤澤東咳
 文政三十七年 藤澤東咳
 文政三十八年 藤澤東咳
 文政三十九年 藤澤東咳
 文政四十年 藤澤東咳
 文政四十一年 藤澤東咳
 文政四十二年 藤澤東咳
 文政四十三年 藤澤東咳
 文政四十四年 藤澤東咳
 文政四十五年 藤澤東咳
 文政四十六年 藤澤東咳
 文政四十七年 藤澤東咳
 文政四十八年 藤澤東咳
 文政四十九年 藤澤東咳
 文政五十年 藤澤東咳
 文政五十一年 藤澤東咳
 文政五十二年 藤澤東咳
 文政五十三年 藤澤東咳
 文政五十四年 藤澤東咳
 文政五十五年 藤澤東咳
 文政五十六年 藤澤東咳
 文政五十七年 藤澤東咳
 文政五十八年 藤澤東咳
 文政五十九年 藤澤東咳
 文政六十年 藤澤東咳
 文政六十一年 藤澤東咳
 文政六十二年 藤澤東咳
 文政六十三年 藤澤東咳
 文政六十四年 藤澤東咳
 文政六十五年 藤澤東咳
 文政六十六年 藤澤東咳
 文政六十七年 藤澤東咳
 文政六十八年 藤澤東咳
 文政六十九年 藤澤東咳
 文政七十年 藤澤東咳
 文政七十一年 藤澤東咳
 文政七十二年 藤澤東咳
 文政七十三年 藤澤東咳
 文政七十四年 藤澤東咳
 文政七十五年 藤澤東咳
 文政七十六年 藤澤東咳
 文政七十七年 藤澤東咳
 文政七十八年 藤澤東咳
 文政七十九年 藤澤東咳
 文政八十年 藤澤東咳
 文政八十一年 藤澤東咳
 文政八十二年 藤澤東咳
 文政八十三年 藤澤東咳
 文政八十四年 藤澤東咳
 文政八十五年 藤澤東咳
 文政八十六年 藤澤東咳
 文政八十七年 藤澤東咳
 文政八十八年 藤澤東咳
 文政八十九年 藤澤東咳
 文政九十年 藤澤東咳
 文政九十一年 藤澤東咳
 文政九十二年 藤澤東咳
 文政九十三年 藤澤東咳
 文政九十四年 藤澤東咳
 文政九十五年 藤澤東咳
 文政九十六年 藤澤東咳
 文政九十七年 藤澤東咳
 文政九十八年 藤澤東咳
 文政九十九年 藤澤東咳
 文政一百年 藤澤東咳

碁布大に相過ぐるなし、中に就て齋藤拙堂、阪井虎山、文章を以て壇坫の望を山陽に
 繼ぐ、拙堂最も大家と稱す、既にして文久中、昌平學、安井息軒、鹽谷岩陰、芳野金陵等を
 徵す、息軒の經術博洽、精核は、慊堂、侗庵以後の無き所に於て、兼ねて文辭に妙なり、岩
 陰の文章は、簡練勁拔、遙かに前人に超越す、皆慊堂の門に出でたり、佐久間象山、經說
 は一齋に承けて、餘姚を主とし、其の超群の才、西學に得る所ありて、盛んに時に鳴る、
 當時藤澤東咳、物氏に出で、別に一家を成し、春日潛庵、山田方谷、王氏の學を以て實用
 經濟の才あり、並びに關西に名あり、森田節齋、文章を以て、聲譽籍甚、林鶴梁と東西相
 稱引、延譽すと雖も、名或は實に浮く、蓋し直截簡捷を喜ぶ者は、餘姚氏に之き、精緻核
 實を好む者は、考據派に歸す、而して獨創特見の士は、則ち百家足らず、更に之を浮屠
 泰西の説に參せざるを得ず、世復た程朱一統の時に非ず、文運の變徵漸やく將さに
 熟せんとす、其の成るや必を將さに一種の異觀あらんとす、勢或は復た後の伊物諸
 子を出さんとも未だ知るべからざりし也、但た時幕政の未造に際し、内外捨擯、士人復
 た咕嘩を事とし、文藝に従ふに追あらず、十數年間、衰運日に長じ、以て明治維新の際
 に至り、時運の變態は、從來の文物を擧て、根柢より芟除し了し、其の變して而して成

林鶴梁 明
 治十一年 明
 治十七年 明
 三十七年 明

潜流の時

るの暇あらしめず、以て三百年文運を將て、一筆に勾斷し去れり、慶元以來、儒學の變
 遷、及び其の旁出の系たる文藝の沿革、大畧此に盡く。

儒學 下

夫れ清原頼業の卓見は、猶ほ長庚の空に當るが若し、官私の學、光既に虞淵に没して、
 大學の曹司、鞠して茂艸と爲り、勸學院の雀も、復た蒙求を嚙づるの聲を聞かず、頼業
 獨見を此間に奮ふ、豪傑の士と謂ふべし、五山僧徒が禪餘に涉獵する、桂庵、文之、梅軒、
 如竹が亂世に講說する、烟嵐を隔て、且つ見はれ且つ滅する、星光を望むが若し、混
 一の運方さに成るの日、惺窩氏出づ、乃ち皎々たる月輪を東嶠の上に見る也、故に惺
 窩以前、姑らく名づくるに、潜流の時を以てせん、譬へば、又河の崑崙に發し、千關に趨
 き、分流歧出、合して鹽澤に匯し、伏流千里なるが若し、文化未だ開けず、或は薩南に、或
 は防長に、或は南海に、散じて未だ合せせ中心の求むべきあらざる也、其の積石に至

りて、始めて禹域を浸す者は、惺窩の時然りと爲す。

惺窩の後七八十年、洛閩の學、一味瀉進す、其の惺窩の門に出でざる、例へば南學一派の若き、亡羊專齋等の若き、歸化の人、朱陳諸子に親炙せし徒の若き、源委或は異なるも、滙して而して一に歸す、惺窩の若きは、則ち又陸王を外にせず、詞藝を眩せざりき、羅山惺窩と嘗て朱陸を辯ずるも、必せしも嚴に涇渭を分たず、山崎闇齋に至りて、駁を變して純と爲し、塵を擧で精と爲し、高く性理を談じ、門戸の習、此よりして開くと雖も、未だ義理の異同を生ぜず、猶ほかの罹盛滅後、前番の上座大衆二部、論證未だ發せざるがごとき也。此時に當りて、京師には後水尾後光明以下諸帝、皆聰明英邁にまじし、後水尾帝は三宅亡羊、松永昌三等を召し、後光明帝は朝山意林庵を召し、靈元帝は仁齋の門人北村可昌を召して、經を進講せしめたまふ、就中後光明帝最も儒術を崇奉したまひ、御製の序を惺窩文集に賜て之を刊行せしめたまふ、皇弟尙仁親王、亦學を好み、栗山潜鋒、嘗て其の侍讀たり、保建大記を著して之を獻せり、其の他舊儀を興復し、故例を修備すること、慶長以來、一二百年、史筆を絶たず、而して京師の繁華、戸口の滋殖、明和安永の際に至るまで、猶ほ上進の勢微すべき者あり、其の元祿以前

に在ては、蓋し江戸の上に出でたりと云ふ、加ふるに文雅の俗、古より傳ふる所なるを以てす、徂徠稱して、洛は王臣の外、唯工賈之に居る、人に恒祿なし、唯末を是れ逐ふ、織齋の俗、周人惟れ肖たり、即ち儒生の其の間に寄する、亦生を爲し難し、則ち舌耕肆を開き、百千群を成し、日給するに違わらず、性を語り天を語り、率ね宋籍に非ざれば不可なり、其れ孰れか能く觚を握り頭を仰げて屋梁を視、曠日彌久、以て其の神仙より來る者を竣たん哉、故に聰僂仁齋の若きありと雖も、猶ほ其の習ふ所の者に率ふ、洛の重しと爲す所の者は、其主か、王臣周禮を泰火の餘に執り、以て海内を欺き、而して名姬靡曼、百貨纖巧の出づる所と、其の山川の韶秀、語音の都雅と、是れ亦洛人の誇る所、習ひて以て意と爲し、見る所既に卑し、復た其の外を思はずと云ふと雖も、其の講業を以て生を爲し、諸侯の祿を受けずして、而して能く道を樂しみ學を勤むることを得る者、京師の地を措て、當時他に求むべきなし、故に此際文學の隆、京師を最とす、惺窩、闇齋門下の諸子より、米川操軒、藤井懶齋、仲村惕齋、白田畏齋等、仁齋、益軒と時を同じうせる諸儒に至るまで、凡そ此地に在る者、大抵高行清節を以て、樹立する所あり、乃ち融先生の宇都宮遯菴、俚諺抄の著者毛利貞齋の若きと雖も、皆祿仕に汲々

家言を構して、先儒を辯駁するを見て、京師の學、此より變じ、京師の變は、則ち大阪江戸の變たらんと爲す、此言や實に以て仁齋が倡首たるの功罪俱に斷ずるに足るべく、併せて當時文化の中心、京師に在るを徵すべき者矣、父子門人と盛んに化風を揚ぐる、物氏の代り興るに及ぶまで、三、四十年、故に惺窩、關齋、洛間統一の時を通じ、て百餘年、此を京師中心の世と爲す、詞章に至りては、木門の桃李妍を争ひしは、錦里東下の後に在れば、創業の功之を京師に歸するを得ざるか、若きも、錦里平安の人を以て、風體一新の機を開きしを觀るに、亦京師文化の醞釀する所にあらずと謂ふべからず。

江戸が天下文化の中心と爲りしは、勢豈に元祿寶永より漸して、享保元文の際に全く成る歟、蓋し關東の文學ある、金澤文庫、足利學校、海内麻亂の際に於て、猶釋菜の禮を存し、其の藏書の文苑の珍たること、今に於て商鞅、周鼎の若し、金澤實時、貞顯の時は舊し、上杉氏三世、太田道灌、小田原北條氏の若き、四塞の地に踞して、一方の民を安せしを以て、攻城野戰の暇、皆能く心を文學に用ゐ、以て江戸文運の爲めに遠く潜流を存したり、徳川氏の開府に及で、既に林羅山を用ゐて、注記の職に備ふ、家康の馬上

澤庵正保三年
二、七、十、三、年
野中氏傳
小倉氏傳
役小倉氏傳
江戸に勤め
守戸へ供
せらるる
時、云々、
許す、
學を、
神、
故に、
其、
元、

天下を得て、而して世故に經る、儒士に聽て、而して政を爲す者に非ざるも、亦興學に志なしとせず、慶長活字は以て印書の業を盛にせんと欲するの意を見るべく、其の外國と往復する毎に、文教の張らざるべからざるを思ひしは、疑ふべからず、故に後人の羅山を答むるに、俗學を以てして、其の禮待せらるること、崇傳天海に及ぶこと能はず、文教の興隆をして、一蹶して七八十年の晩きを致さしめたるを議するは、未だ必きしも、酷論とせき、寛永中將軍家光、復た儒術を起さんと欲す、羅山の人と爲りを鄙みて、遂に心を傾けて、澤庵に歸依せり、元和寛永の間に當りて、江戸の宋學、未だ必きしも、京師に譲らず、野中兼山が未だ學に嚮はざるや、小倉三省の江戸に在るに託して、禪書を購はんとせしに、三省答ふるに、其の書は待たまへ、江戸に儒學といふて、あぢな學文はやる、是でなければ、天下國家あさまらざる由といふを以てして、たるを觀て、以て其の然るを知るべし、然るに、林氏三世、徒らに博洽を以て稱せられ、纂輯する所、諸書、世益たらざるに非ず、且つ草創の際、語りて詳かなるを務むるや、勢擇で精しきこと能はずと雖も、其の宋學を主として、而かも心を道德性命の理にだも用ゐず、巫醫卜祝と并肩して、士流に入ること能はず、又た務めて學權を壟斷して、

下に於ては、初くの々々越ん候間、面釋候頃、求さ之、由有、面儒、開許、しに迄、も如、返し、みは、下統、にて、初くの々々越ん候間、面釋候頃、求さ之、由有、面儒、開許、しに迄、も如、返し、みは、下統、にて、の道の朱是是、一冊章て、求く、下候り、々見此を、府有の、者て、風愛過、今等、氏頼、まめ、

林春齋延
寶曆八年
三月六日
江戸豊盛
の時

族屬門生の外、他人の之れを以て家を起すを欲せず、水府修史の擧すら、陰かに之を妨遮せんことを謀りしと云ふ、故に江戸初世、文學の振はざりしは、必ずしも當時戸口未だ大に滋さず、神祇、白欄諸黨の士人より、所謂町奴の徒に至るまで、任俠武健に偏せるに由るのみならず、山鹿素行が聖教要録、疑を洛閩に挾さむこと、伊藤氏の後に在らず、而かも入らざる書物著述を以て、寵を蒙り、終に其の晩年、専ら兵家を以て自ら居り、儒學を廢せしむるに至る、亦獨り山崎氏の故に由らず、名相松平信綱の若き、其吏才を恃で、林春齋等ありと雖も、迂として之を禮せず、而かも其の熊澤蕃山に於けるは、即ち一二會晤するも、優待至らざることなし、是を以て之を觀れば、林氏殆ど其の責を辭することを得ず。

將軍綱吉の時は、猶ほ漢の孝武、唐の玄宗の時のごとき乎、前三世、奢華の風未だ開け老して、興役の事既に罷み、蓄積天下に洽く、豊富餘あり、坐ながらにして此の盛運を享くる者、豈に侈大の欲を發せざるを得んや、孝武の遠略を務め、方士に惑ひ、桑弘羊等を任用せる、玄宗の安祿山を寵し、李林甫に任じ、楊太真に溺る、綱吉の柳澤吉保、萩原重秀、隆光等を用ゐる、輪臺の詔、武靈の讓、綱吉没後、外間の訛傳を招きしも、亦終

始相類す、獨り其文學隆興の事に於て相類する者なからんや、西漢の文學、孝武より盛なるはなく、有唐三百年、開元天寶、以て其の最高潮とす、矧んや乃ち綱吉の學を好むや、毎に親しく書を講じて、諸侯士大夫をして之を聽かしめ、以て自ら其能に誇り、儒員を以て士林に列して、皆蓄髮俗に歸せしめ、林氏の私學を擴めて、官學の規模を定む、幕府既に然れば、大小の諸藩、靡然として風を受けざるなく、國學の建設、儒士の招聘、一種流行の勢を成せり、家宣之に繼で、亦志文教に篤く、吉宗文編を惡で、祖制の健朴も則ると雖も、儒術の治具に資すべき者は、亦善く取て之を用ゐたり、元祿の際、江戸の繁華、前古に超越して、已に京師を凌ぎ、商賈百工、優倡雜技の徒に至るまで、盡く焉に赴て、而して售んことを求めざるなければ、儒士の口を講業に糊して、貧苦世を没ふるを迂とし、少しく功名に志ある者、亦翕然として西に背いて、而して東嚮せざるを、天和中、木順庵の東下するや、門下の盛なること、既に林氏を壓し、其の才を育し能を陶せること、三百年比なき者は、豈に鬱勃として暢ぶるを得ず、積で而して愈厚き、關東の氣運、先づ發洩の路を此に得たるが爲めか、物氏の力量、順庵の上にて在り、人を取るに才を以てすること、木門よりも寛に、而して其の成就せる人材、氣魄光

焰寧ろ譲る所あるが若きを覺ゆる者、伯樂一過の後、冀北馬群寥々の状あるに非ざるを得んや。寛永正徳より後、木門の英華、一時煥發し、而して徂徠復古の學を此時に倡へ、學は則ち辯博を尙び、文は則ち豊美繁縟を喜ぶ、特に其の氣象崢嶸、獨見を以て之を運すること、後の頼祭者流の若くならざる者あり、以て此の盛時の好尙に投じて而して太平を粉飾するに足る、徂徠の人と爲りは、人情に老熟し、其政術を談ずる、亦基づく所此に在りて、白石の禮文に心醉するが若くならざるも、其の學風に至りては、同じく豊華昌明の世を代表する者たるを失はず、時の人を作る、此の如き者あるか。

意ふに延寶以後、三四十年間は、京師の文物、華實既に備はり、其の儉薄の土俗、殆ど以て之に培ふに足らぬ、累々たる美菓將さに之を筐し、之を筐し、輸して他に之かんとし、新興の江戸、乃ら關東、沓の地勢と、武治豪華の習俗とを以て、林氏一棟の蒸々に滿つる能はずして、將さに西の有餘を承けて、其の不足を補はんとせる時なり。山崎闇齋が東下は、寛文中に在りて既に陽氣の微動を見る、谷一齋、南學の種を移し、水府史館の開創に及で、上國の紅白、聚めて一欄の中に栽えたり、是より先き、武家系譜の

文物の東

谷一齋元
七年十一

元佐々十竹
年九十五
中九二深
正徳二六
六三竹軒
酒泉三軒
享保三軒
五三軒
安藤紫軒
安藤不詳
享保五年
八五軒
鶴岡録齋
元禄六年
一六軒
一六軒
九六軒
雨森芳洲
寶永八年
八五軒
松浦頑圃
享保三軒
年五三
西山健甫
元禄元年

纂輯林氏、惺門の諸子と力を協せて之を成す、猶ほ多く上國人に屬す、既にして本朝通鑑の纂輯は、即ち其の門下生員之力、優に之を辨じたり、然るに水府の修史は、既に林氏に對して別に旗幟を建て、而して又用ゐる所の文士、佐々、中村、酒泉、安藤兄弟、鶴岡兄弟、三宅、栗山等、大抵京畿以西の産に係り、木門の多士、雨森、松浦、祇園、西山、南部、柳原等、十に八九は西人たれば、元禄寶永、所謂常憲院時代の文物、燦爛目を奪ふと雖も、竟に是れ移植の芳菲たるに過ぎず、其の猶ほ未だ老熟せる平安の地、仁齋の若き碩果を有して、四方の瞻視を集むるに及ぶ能はざりしは、宜なり。享保に物氏の興るに及では、則ち其の門下の英俊、太宰春臺、安藤東野、平野金華以下、大半東國の人に屬し、不ざれば、其の東國に長じ、東國に業を成せること、服南郭等の如く、不ざれば、其の東國根據の力に託して、其の地方に振ふこと、山縣、周南等の如き者なり、此際大幹旋の力は、只だ一個、荻生總右衛門の指呼に在りき、乃ち時勢と云ふと雖も、徂徠も亦人傑に非ざとせんや。

大宰春臺以爲らく、徂徠の志進取に在り、故に其の人を取るに才を以てし、徳行を以てせず、二三の門生、亦其の説を習聞し、徳行を屑とせず、唯文學を是れ稱す、是を以て

一 歿年三十 南部山
正 歿年五十 正徳山
五 歿年四十 安東野
享 歿年三十 享保東野
七 平野金華
享 保野金華
十年 山縣周南
山 歿年二十 寶曆周南
六 歿年二十 寶曆周南
播磨門の傳

學者の黨
争の黨

徂徠の門、跡弛の士多し、其の才を成すに及でや、特に文人に過ぎざるのみ、其の教然
る也。雨森芳洲、木門の高足を以て、深く徂徠に服し、其の子をして就て學ばしめし
が、既にして徂徠が人を教ふる徳行を先ぜずして、家塾序を失ふを以て、少年を託す
べからずと爲し、塾を出で、歸らしむ、然るに護門の學流行迅速、十年ならずして
海内を風靡せる者は、亦此の寛放の風、以て之を便にするあり。蓋し武治の豊盛、前代
に比なく、而して社會の風氣、腐爛已に萌す、上には權寵の政を弄する、盛に奢靡の習
を煽で、復た創業儉素の制に非ず、下には貨權市賈に歸して、豪興侈舉、流俗の趨嚮を
變じ、人々の志す所、富貴一途に在りて、苟くも以て功名利達の圖るべくば、賂託便佞
爲さる所なく、前時道義を守り、意氣を尙ひ、貧賤に終へ、凍餓に瀕して悔いざるの
風、日に銷し、月に磨せり、此れ護門の傳播、從前山崎伊藤諸氏の比に非ざる所以。故に
徂徠の義理に於ける、二辨の著、斷々然として一家の言を立つると雖も、其の門下經
義に達きの春蚕は、文辭に長ずるの南郭に視るに、世俗の崇奉至般なる能はず、是れ
獨り其の人と爲りの峻嚴、近づき難きと、温藉親しみ易きとに由るのみならず也。』
徂徠の時に當り、木門の氣焰、方さに熾んに、門下の英俊、徂徠を樹て、相是非する

江戸中心
の時

者あり、雨森芳洲は白石を謂て心術測るべからずと爲し、反て徂徠と親しみ善し、鳩
巢が白石と善きを以て、白石が盛に事を用ゐるの日は、頗る之に滿たず、又其の廢せ
らるゝの後、吉宗の問ふに白石の狀を以てするも、肯て之を薦めざるは、則ち志尙の
同じからざるに由るあるも、其の徂徠と並びに眷顧を享保に受るや、徂徠は毎々白
石を罵り、以て其の主柳澤が元祿に大用せられし後を承けて、白石が大に更革を施
せしに不平なるの情を洩らし、鳩巢は又但徂の學術を不正として、其の建言する所、
外藩を削盛し、譜代を増封する等の議、徂々之を排擧せり、徂徠が木門の多士に於て、
彼を排し、此に黨せざるべからざる者、以てかの勢熾、猶侮り難きを見るべし。徂徠の
門、春臺の識見自ら恃む、其の師と雖も、之を攻むるを避けず、其の正徳の政を稱して、
元祿の跡を議する等、護社中に在て、好で異見を立つ、夫れ内訌の生ずるは、則ち毎に
敵國外寇の患、寡き日に於てし易し、春臺が護社の籬下に一生を終へざらんと欲
するを觀ば、適に大勢の物氏に集まるを知るに足る也。
徂徠没して後、南郭が文壇に主盟たること三十年、江戸の文字を解する者、英華社に
參するを得ざるを以て耻とするに至る、高野蘭亭も亦名聲之に亞ぐ、此時に當り、林

高野蘭亭 寶曆七年 桂山彩巖 寛延二年 井上蘭臺 寶曆十年 長野華陰 明和七年 中根東里 天明五年 河野靜齋 寶曆四年 和智東郊 天明六年 三和智東郊 天明六年 永鷗蓬安 天明六年 林東溪安 天明五年

永九年 阮東郭三 寶曆七年 甘谷賢 寶曆四年 石川麟洲 寶曆九年 劉龍門明 和八年 東四儒風 的異同

氏の門、桂山彩巖、秋山玉山の若き、亦修辭を以て著稱せられ、井上蘭臺の若きは、其の説反て物氏に近く、室鳩巢が朱説を固守するを駁して、幕朝必ずしも宋儒に依らざると論じ、長野華陰、上國に去る後、考證に浸淫す、鳩巢の門に在ても、中村蘭林の若き、亦往々朱氏を議し、其近言近意を以て、古言古意を解するの謬を道ふは、物氏の學に類す。中根東里は終に餘姚氏に往て而して還らざり、紛々此の如し、其の能く舊業を守る者、河口靜齋以下、蓋し幾くなく、概ね亦偏師の材、力以て滔々たる者を壅ぐに足らず。其の關西に在ては、山縣周南、菽の藩學を建つる、一に物氏の細墨を奉じ、中國九州、風を望で之に趨く、和智東郊、瀧鶴臺、林東溪、其の門に出で、之に羽翼し、東溪は則ち京攝の間に教授すること殆ど三十年、以て物氏の學を皇張す、阮東郊、管甘谷も亦之が鼓吹を爲し、其の他、梁田峴崑の明石に仕へ、秋山玉山の熊本の學を建つるが若き、經義は物氏に依らざるも、亦皆古文辭播及に與て大に力ある者なり、然るに堀川派に在ては、東涯元文の初に没して、古義の徒、其の將帥を喪ひ、三輪執齋、餘姚を唱へて、挺然獨り秀づるも、知行合一の旨は、輕佻文士の相習染し易きが若き、非ず、宇野明霞、徂徠の風を聞て興り、別に一家を成すも、亦世を永くせず、浪華懷徳書院の諸子、朱學

の殘壁に嬰り、石川麟洲、木門の流を酌むも、皆勢甚だ振はず、古文辭の横行を極むる亦勢の必ず至る也、而して古文辭派の中心は、則ち江戸の芙蓉社を大なりとす、赤松滄洲が劉龍門に與ふる書に稱す、平安の文學に於ける、其の由來尙し、然れども今を以て之を觀れば、東都の盛に及ばざること遠き甚し、乃ち名下果して虚士なしと稱するに足る者、唯だ岡千里一人、其の他、彭々、燦々、要するに亦春秋に義戰あき者と、此書の成るや、寶曆明和の際に在り、洵に文化中心の轉移、形成りて久しきを知る也。』夫れ京儒の弊は、寡聞固陋に在り、賣講徇俗に在り、而して其の美は、高行清節に在り、躬踐體察に在り、能く其の弊に脱するを得しは、益軒、東涯、數子に過ぎず、東儒は則ち之に反す、列侯、第宅、雲の如く連なるの地に在りて、苟くも師儒と稱す、厚聘重禮、争て之を引かざるなし、其芻米僕賃の資に困しまずして、博涉を務め、洽聞に誇るを得るは、固より其の所なり、但だ利祿之を外に誘ひ、博雜之を内に亂せば、則ち志の堅かり難く、心の泛なり易きは、亦免かれざる也、是れ仁齋が肥侯、千石の聘を辭するを得て、而して徂徠が柳澤氏、五百石の祿に終らざるを得ざる所以なり、二山伯養、其の間に在るは、眞に風朝陽に鳴く者、東儒の長處は、徂徠出で、而して之を文辭に導き、而し

て大勢益定まる故に江戸が文化の中心たるや、其の特色は實に詞章に在りき。護社諸子、春臺、南郭より、既に一生を仕進の途に託せず、講業を張り、文社を設け、町儒者を以て門戸を立つる者、日に滋し、月に繁く、徂徠が之を洛儒に譏る所も、其の没する比ひには、則ち東儒に在て必きしも、怪しむを爲さざるに至る、是れ江戸の民物富庶、漸やく京師に駕軼せるの致す所にして、其の能く文化の中心たるを得る者、亦實に此の形勢あれば也。然るに東儒の純ら經術を以て人に教へずして、而して好で文辭を以て徒を聚むる者、是も亦其の風土の宜しき所たるを以てするか、則ち其の豪華の觀は、京儒寒薄の風に似ざるも、其の見る所の卑しきは寧ろ之に愈らずや。且つ之を澁井太室、江村北海の言に徵せん、太室曰く、關西の學、終身師の書を誦し、純にして駁ならずと爲す者あり、辭藻を黜けて正道を害すと爲し、而して深く家誠と爲す也。述作を好で、而して辭藻の外、經史あるを知らざる者あり、人々韻府を撰し、家々類書を藏し、甚しきは、每春花に對し、每秋月を賞し、擧げて冊を世に行ふに至るなり。關東の學、經を治むる者寡く、辭を修むる者多し、大抵文章は、則ち軌範、文範、明諸家詩は、則ち于麟選する所、唐詩、明七才子絕句、解史は、則ち左氏、司馬、典故は、則ち世說、樂求、多きを

具へて之を奇とし、鄉談之を誇り、方伎之を眩す、相傳へて曰く、某は唐詩に精し、某は世說に熟す、某は于鱗尺牘に嫻ふと、進で其の講説を聽き、退て其の訓註を搜り、童習白粉、以て一語の出づる所と、一字の據る所とを求む、得ざるあれば、則ち時日を惜まざ、行露を憚らず、必ず窮めて、而して止む、此を以て家を成す、一大異事なりと。北海も亦云ふ、惺窩先生よりして、後、京師の學匠、講説を宗とし、師弟の間も、嚴重にして、其の徒の師を信ずることも、厚く、講釋を聽くにも、必き、書を丁寧にして、世上のわる口にいふ、先生こゝに於て一咳すと云までも、記するからはしにて、其ころ中島先生なると云しは、諸州の書生を集め、所謂舌耕の席を開くといへども、さのみ、だりなることとはなかりしなり、然る故に、物學ふこと奇き世俗までも、何となく、學者は敬すべき事のやうに覺え、尊貴の學者を款待ありしすかたも、今時とは大に違へり、然るに護國の學起り、過激の言多く、やゝもすれば、洛儒々々といひ、其抗顏人師と稱し、叨りに自ら尊大にするなど、非議し、又講釋は、益なき事のやうに云ひ、輕俊の輩、風靡雷同せるより、學風一變して、講釋のもやう大にかわれり、其故いかむとなれば、徂徠既に講釋は、益少しといへり、さらば、徂徠に従遊の人は、師説を守り、講説をなして人を集

むることばなさいるかといへば、左にはあらず、中にも南郭など、赤羽に在て、左傳唐詩選を講ぜるには、其席へ出る人、殊におびたしく有しなり、是も時勢のやむことを得ざるにて、高名の下には、業を請ふもの多く、一人一人へは解説もしがたければ、これを一席に集めて講釋せざることあたはき、又一つには仕へて俸祿を得るにもあらざるは、姑らく耕織に代るに是を以てするも、餘養なき事なり、然れども講説の席を開けば師説に違ふ、師説に違ふといへども、其勢ひ講説を開かざること能はず、此に於て更に説をきして曰く、我洛儒の抗顔人師と稱するに倣ふには非ず、たゞ是を以て衣食のたすけとし、耕織に代るのみなりと、是よりして講釋をする人も聽く人も、其様子大に變ぜり、いはゞ京師の宮寺にて軍書の講談をなす輩の席へ、人多く集まるにさのみ異ならずと、關の東西、古今の變、誠は是の如き者あり。

云ふあり、此御國、文雅の盛なりしは、寶永正徳の間なり、享保の中頃より、文雅草莽に下り、有識の士、是を前知せるにや、赤石峴崑先生の詩に、登、高能賦、今誰是、海内文章落、布衣と俊、然先見の明、恐るべきにあらずや、民間にばかり文あらば、文衰なり、無位無官の者、詩文作るは、蟲草間に吟せるなり、それさへ近年傑出の者なし、枯草の蟲、霜枯

文章布衣
に落つ

の音といふべしと、是れ當時に在りて、文物を視るに社會の英華を以てせずして、治具の衰穢とするの見解に出づ、故に其の疎謬は辯ずるに足らざれども、此の言に因て而して文運の推移を見るべし、蓋し京師に在ては、文學始めより處士、町儒者の育成する所たりしも、江戸は即ち之に異なり、是れ觀察する者が其の衰勢に際し、顧みて木門護社の盛時を想ひ、驚詫して其の隆汚の因を上下の位に歸する所以なり、若し百年無事、社會機關の漸やく複雑に赴くや、恒祿の士、毎に窮乏に困しみ、農商の實力、其の貨權と同じく張り、而して綱吉の時、侈大の風、頓に其の勢の鬱興を致せるを觀ん者には、渙然として其の解を得難からざるのみ、此の形勢の變や、時と彌長じ、享保の吉宗、寛政の定信、明君賢相、綱紀を振肅するあるも、以て之を回らすに足らず、文化天保の際に及では、屢令を下し、市賈農耕の徒にして、浪士を聘し、武技を習ふを禁ずるも、終に制すべからず、文武の實力、士種の手を離れて、階級制の社會、乃ち顛覆の漸を成す、徳川中葉以後の史蹟、此の如きのみ、然れども、寛政より天保に至る五十年、其の文運は實に草莽の士に成就せられて、而して鉅匠名手、往々寶永正徳の諸子に軌過する者あり、草間の蟲韻、未だ必きしも、喬木の禽音に讓らざるなり。

文雅の士大夫の間を脱して、草莽の間に榮ふること、東西皆然るに及では、其の中心の權衡、復た搖て而して安からず、南郭寶曆に没してより、江戸の文壇に主なく、物學の末流、蔓延滋甚しきも、雜卉の時を得るが若く、大に相過ぐる者なし、折衷學の興るに及ぶも、其の首倡の名家と稱する者すら、僅かに一方に割據して、先輩を誣刺し、以て其の立命の地を占むるに過ぎざれば、復た此を以て一代の風尚を變遷ること、徂徠當時の如きを望むべからず、但だ家重、家治二將軍の時、政綱頗る弛び、而して田沼意次、其の機變の才を弄して、一世を攪亂し、百萬の市民をして、邯鄲夢裡に恍惚として、麻醉せしめたるが爲めに、江戸の繁華、益下層に入りて、彌狼維に流れ、詞章の末節に生を託する徒をして、自ら其の汚下を覺えざらしめしのみ、乃ち寛政異學の禁制、官學の振興に至りては、其の得失相掩はざるの觀あり、柴野栗山が白川定信に得て、盛んに其の議を主とするに當り、林信敬すら頗る之に平ならずして、程朱を偏守するは、幕府歴世の意に非ざるを上言せり、而して三博士没して後、其の禁も亦弛び、且つ其の禁制の鞭箠は、一代の學風を驅て、程朱に歸らしめずして、而して他に趣かじめたりと雖も、かの世の學徒をして、其の一生の安ずる所は、且らく問はず、必ず先づ

東嚮して昌平の發舎に入るの風を生ぜしめたるは、則ち全く効なくんばあらず、之を要するに、文化の中心、一たび江戸に歸してより、其の外形に於ては、徳川氏の世を終ふるまで、復た他に移らざるが若きも、其の實力の蘊する所は、則ち常に其の外形に伴ふ能はざる者あり、是れ察せずんばあるべからざる也。我が邦の地形、山骨峻聳して、直ちに海場に薄り、沃野極めて乏し、關東八州は其の最も大なる者、畿内諸國、地力厚からずと雖も、河川縱横、又大裏海を控え、漕運の便、此より便なりとするは莫し、故に此の二方土なる者は、天下民物の滙集する所の處、文化の中心、彼に移り此に轉ずるも、竟に此の二方土の外に出づる能はざる者は、之が爲なり、故に昔に在て東國王、化未だ洽からず、文物の輸入、西蕃の交通に仰ぐの日は、裏海沿岸、人文最も昌んに、吉備一帯、材能毎に産す、文化中心、漸やくに東國に移るに及び、京師江戸、兩都を聯繫する海山二道の材、鬱然として茂生するも、亦勢の必ず至る也、尾參勢濃の野、其の衍沃、關東に亞ぎ、其の津泊の便、畿内に亞げば、則ち材の此間に生るる者、尤も滋く且つ偉ありとす、尾張の敬公學を好み、堀杏庵、陳元贊等を聘せしより、國文儒に乏しからず、而して明和安永、關東の儒風、委瑣殆ど極まり、詞藝輕薄の

南宮大湫 安永七年 塚田大峯 天保八年 鷹津盛堂 八治十五年 森春濤 治二年 奥田三角 天明三年 津阪東陽 天保八年 土井不詳 治三年 明井不詳 治六年 土井不詳 治六年

關西實力 關西實力

習、一世を糜爛するに當り、細井平洲、南宮大湫、尾材を以て晚に江戸に出で、雅量徳行、澁井太室等と同じく四方の景仰する所と爲り、就中平洲が米澤の政治に與かり聞ける底績、嘖々傳稱せらる。塚田大峯の經義に於ける、亦一時の選、其の後風流文士、恒に跡を絶たず、郁々たる文國として、以て幕末に及び、鷺津毅堂の經術、森春濤の詩詞、明治の世に亘りて、皆一代の鉅匠と稱せらる。津の藤堂氏も亦黈裘の初めより、早く文學を尙び、如竹、三宅寄齋等、嘗て藩祖に禮待せらる。藩の士、奥田三角は東涯の高足たり、津阪東陽、文化文政の際に在りて、一方の名儒たり、猪飼敬所も亦招聘に遭ふ、近代には齋藤拙堂、文章巧妙、海内匹罕なりと稱す、土井肇牙は放曠にして能文、明治の世に及べり、凡そ此皆名通國に聞え、才一代に抜く者、但だ其地兩都の間に介するを以て、竟に獨立して一中心を形くる能はざり、其の名を成す者、東江戸に於てせざれば、則ち西京攝に於てせざるを得ず、是れ誠に天の其の勢を限るなり、抑も平洲、大湫が儒者の品位を顛覆至極の時に保てるが若きは、其の關東文運に効せる者、輕しと謂ふことを得ず、尾材の力、決して藐視すべからざる也。

五十四

山縣大貳 明和四年 三

浪華文運 五井持軒 享保六年

先聲たり、竹内式部、公家を糾合して、變を資曆に企て、而して山縣大貳、王政を夢想して、禍を明和に取る、是れ其の關係甚だ明かなる者なり、折衷の學は井上金峨、片山兼山に始まると雖も、柳原篁洲が紀藩に儒官たる、訓詁は馬鄭に據り、義理は程朱を取り、真野華蔭が京師に教授する、己に百家に出入し、又鄭註孝經を南都東大寺に得て、考證の風を開く、折衷一派の東都に横溢するに當り、皆川淇園、閑物の學、獨造深詣、確として把持あること、汎々の徒に同じからざる者あり、龍草廬が瘳せる書畫會、後年江戸に盛んに、江村北海が日本詩選、五山堂詩話の藍本たるが若き、其の弊習に屬する者も、亦概ね西之が始を爲し、東に傳へて之を完成す、高山彦九郎が謀は光格明主を奉じて、此勢を政治に實にせんと欲せる者、其の急進に過ぐるを以て、專遂に成らずと雖も、江戸中心の安からざる、關西實力の冥々日に長ずるは、以て測知するに難からずとす、而して又此際最も特出の顯象を浪華文運の勃興とす。

浪華の文學、世五井持軒を以て首倡と爲す、大抵仁齋益軒等と時を同じうす、懷徳書院、享保に建ち、三宅石菴、中井贄庵、持軒の子蘭洲等、相踵で教授す、木門一派も入り、物氏一派も入り、其の地は即ち西南諸道の要津に當り、五方財貨の集散する所に於て、

五十五

中井翁庵
寶曆八年
六月二十

巽齋即茶
山前發年

子琴即甚
盛庵也

其の人は氣を好み利に銳に専ら廢著交易の事を爲し、所謂屠販豪俠墮地異なる者、固より文物の發達に適するに非ず、而かも西國侯伯の財政、必ず命を此の地に聽き、豪商大賈、坐ながらにして貨權を操るの勢已に定まるに及んでは、篤く富力を恃で、閒を文藝に娛しむ者、間亦少からず、木巽齋の若き其の最も著はるゝ者、蓋し此の時に至りて、而して従前諸子辛苦栽培の種芽、勃如として榮を示せる也、寛政の學政更新、其の令の發せらるゝは、則ち江戸に在り、而かも宋學再興の端は、實に浪華混沌社に發し、三博士と其の在野羽翼諸子と、皆此の地に在りて相交遊し、意氣投合、以て此の學を東都に成せる也、中井竹山、議論公武を動かして、其の丰采膽氣、宛として、浪華賈人の風あり、宋學を以て旗幟を建つと雖も、自ら惺窩關齋兩派の徒たらずと稱す、是等も亦た後世所謂實學の祖にして、三博士等と同じく、文辭崇尚の風を以て、性理空談の習に換へ、以て文恭院時代、五十年間、特異の光彩を文物に賦したり、山本北山等、設社修辭を攻撃せること、勉めざるに非ず、然るに其の結果や、人の爲めに嫁裝を作すの觀ありて、關東の文章、終に西來博士派が聖堂風に壓せられ、其の詩に於けるも、江湖社諸人、撥亂の力は、誠に之を效せり、而かも首難の功は、子琴、六如を推さる

を得ず、反正の功は、茶山、星巖に歸せざるを得ず、此の文辭時期の最高潮は、文に在て、佐藤一齋の頼山陽と、詩に在て、大窪天民の梁星巖と、東西相匹す、其の三博士時期以前の風を承くる者、履軒の鵬齋と、其の行を放にし、其の思を精にす、亦匹なり、三博士後、經義を以て家を成す者、謙堂の敬所と、亦匹なり、文辭時期の後勁たる者、良齋の拙堂と、亦匹なり、其の力量、其の著述に表見せる者、精細に之を較せば、固より軒輊なくばあらず、而して之を總ぶるに、西の鬱勃たる實力内に蘊する者、之を東に比して、反て毎に重厚なる者あるが若きを見る也、

浪華文運の興隆と相前後して、鎮西の發達は、頗る生面を開けり、夫れ肥筑の港津が、海外交通の門戸たること、上古より已に然り、鎖國制を爲してより、瓊浦一港、猶ほ外船の互市を許さる、而して三百年崇儒の風、勢必支那文物の輸入に隨て、大に時尙に影響する所あきを得ず、朱明一代、洛閩守株の學風は、先づ其の初世に至大の感化を與へ、次で、嘉萬七子は、物門一派七十年流行の泉源を爲し、歸震川の時習の外に、獨立せる、以て室鳩巢に比する者あり、而して山本北山等が設社諸子を排撃せしは、明かに袁中郎が李王を詆斥せしに倣へり、其後考證學の流行は、又明、末清初の風を承

鎮西文運
の發達

安東省庵 元禄十四年 高天滿 保元七年 岡島冠山 享保十年 山片蟠桃 文政四年 山片蟠桃 文政四年 山片蟠桃 文政四年

くる所多く、當時學者争て新渡の書を購ひ、以て其博辯を助けたり、因是が詩文を論ずる、金聖歎等の跡を襲ひ、茶山の詩、實に始めて漁洋を尸祝すと稱せられ、山陽の詩李北地を慕尙するも、其の絶唱たる詠史樂府は尤西堂が作に啓かるゝあり、星巖一派の體、乾隆嘉慶の作家に肖する者あり、夫れ此の如し、何ぞかの輸入の門戸たる鎮西が、三百年文運に於て、興緊の功用を成就せるを疑はん。但だ夫れ京師江戸が方さに上進の勢に在るや、其の消化力の強盛なる、外より來る文物、盡く吸収して其の口腹を肥さるなれば、則ち鎮西偏鄙の地、以て之を阻滯して、自ら取て餌養すること能はず、故に安東省庵、貝原益軒、夙に鴻儒と稱し、高天滿、岡島冠山、西音に通ずるを以て、同時諸子に稱譽せらるゝも、未だ其の地に據りて上國に抗衡するに足らず、其の名を成す、概ね二都に於てせざるを得ざりき、既にして木門物門の俊秀、相踵で東來し、以て文權を把握す、蓋し大勢の此時に於て、轉振せらるゝを見る、江戸中心の時期、關なるに向ふとして、新舊二都、食鱗已に飽き、其の醞釀する所、散じて之を四方藩國に敷き、以て海内に滋潤し、而して有力の侯伯、封境相犬牙し、加ふるに海外文物の浪潮に著すること、獨り支那のみならずして、其の西洋技術に於て、又最も早く通ず

關西人材 山片蟠桃 文政四年 山片蟠桃 文政四年 山片蟠桃 文政四年

るの利あること、鎮西諸國の若き者、其の先づ嶄然として頭角を露はすべきは自然の勢、此れ龜井父子、海内物學の後勁として、而して又鎮西學風、逆流東上の陳吳たる所以、三浦梅園、帆足萬里の學、絶特の力を見し、宜國の詩、別に門派を成せる所以なり。』之を前輩の言に聞く、三百年間、其の一毫人に資する所なくして、断々たる創見發明の説を爲せる者、富永仲基の出定後語、三浦梅園の三語、山片蟠桃の夢の代、三書是のみ、關東學者、頭を四子五經に埋めて、門戸の主張に一生の精力を耗す、而して關西には、則ち往々能く流俗見に超脱して、心を根抵の疑問に用ゐたる者ありと、凡そ非常の士、人に抜くの業を成す者、或は高峻超邁、萬人の従ふ能はざる所を爲し、或は時尙の嚮ふ所を導て、一代の宗匠と仰がる、人各々趨合あり、未だ遽かに二者に擇ぶべからざる者あり、是故に物徂徠の文辭を以て、徳川盛世の代表たり、談笑して天下を塵くが若き、後に之を排する者ありと、雖も、又全く其の圈套に脱する能はず、寛政更新の後、八家を以て李王に換ふるも、竟に一たび盛なりし文辭嗜好を撲滅するに至らず、亦豪傑たるを失はず、而も其の利祿姓名を土芥にして、思を疑ふ所に潜め、五百歳にして其の解を知る者を待つ、醇乎たる學士の風、豈に尤も尙ふべきにあらざや。三人

者皆關西に産し、而して其の二は浪華に係る、且夫れ其の人物を以てすれば、藤樹の行、番山の才、仁齋の學、皆千百年間出の偉觀、東人之之に比すべき者、其れ唯だ白石、徠二子か。澁井太室曰く、愷窩以降、世の宗とする所五人、羅山博にして多可、藤樹約にして自ら盡る、關齋精にして刻剝、仁齋醇にして自尊、徠徠敏にして放縱と、羅山東に用ゐらると雖も、而かも西に産す、其の東に生れる者一人耳、雨森芳洲曰く、中江與右衛門は賢人也、得て間然することなし、山崎嘉右衛門は丈夫と謂ふべし、伊藤源助は少時儀刑を靚望す、君子なり、荻生茂卿は故人なり、博覽文章、海内比なし、木下先生は英才を教育すと、其の東に生ずる者、亦一人耳、天の關西を眷すること、何ぞ此の如きの厚きや。

夫れ元祿寶永以後、江戸の般賑、海内に比なきを致し、文化中心も亦全く此に移りて、一國勢力の東偏、殆ど回すべからざるが若し、然るに關西の實力、冥々の際に長じ、天明寛政の際、學術の生面を開く、實に西材の力に資るに至れる者、其の源は固より浪華地氣の興隆に由れり、かの西南諸國の發達や、亦盡く其の結果を浪華に集注せざるなければ、其の財力の益阜厚なる、乃ち従前賈俵の淵藪をして、一時儒士の冀北たらしむ、而して西南諸國の漸やく其の力を増大する所以は、則ち蜀府關東に在りて、其の勢力、長鞭馬腹に及ばざるの觀あると、及び帝者の神京、海内の望を撃く者、こゝに存し、而して其の尊嚴歲月俱に崇く、學術の益明かなるに隨て、益其の光輝を發揚するに在り、加ふるに明君踵を接し、潛徳の四方に洽きこと、水の地下に行くが若く、天下の文治を希ふと、武治を喜ぶとに論なく、其の幽光の一たび煥發せんことを期せざるなし、而して關東は即ち吉宗去て後、主に暗弱多く、賢宰時に出で、其の祖制を改め、王室を尊で、以て其の威力を保たんとするも、勢已に及ばき、水府尊王論、一時天下を動かし、幕末諸藩の學制を建つる者、必ず範を取る、蓋し當時世論、實に三百年習染の儒學と、新興の國學との衝突に惑ひ、水府の主義、此の二者を折衷して、頗る着落あるを以て、争て此に趨くのみ、但だ其の時已に革變の運に迫り、大に四方の瞻望を集めて、關東中心の勢力を復するに至らずして、浪焉として熄みぬ、文久の安井鹽谷芳野等を舉用するが若きは、傾覆の機前に在り、儒學の運命、秋葉の野分の風を待つが若し、其人の學問文章、觀るべき者ありと雖も、所謂文運に於て復大關係あることを得ず、而して公卿の諸大夫、及び近畿士人の山崎氏峻峭の學風を承くる者、大

六十一

鹽後素等以來、精悍の王學を攻むる者、實に公家を煽し、西南諸侯の力を用ゐて、明治の大更新を成せるを觀て、以て百年以來の傾嚮を見るべく、之を文化中心の脱殻は東に在りて、而して潑々たる金蟬は、早く已に關西に翺翔すと謂ふ、必ずしも語權衡を失ふと爲すべからざる也。

夫れ慶長庚子、大勢一定してより、徳川氏の世を終ふるまで、精しく之を算すれば、二百七十許年、前百餘年は文化の中心京師に在りて、理學の期たり、而して詞章は猶ほ混沌の時に屬す、古義派の興る、之が殿後たり、故に其の所謂異義も亦義理上より見を立つ、中間七八十年、中心江戸に移りて、文辭の期たり、古文辭派、前の古義に資りて、更に之を洗刷し、學問用心の根柢より異見を出し、而して斡旋して之を文辭に趨かしむ、後八九十年、中心の形は東に存して、而して其の實は西に移る、經義の復興を名として、而して文辭の嗜好を廢せず、墨守の陋を去ると稱して、考證に、餘姚に、百家異端に汎濫す、是れは則ち江戸中心の餘風を承くる者、亦猶ほ江戸の京師に資るあるがごとし、而して其の間特絶の人物は、流行渦心に立てる時の代表者に在らせしめて、渦外に超脱せる遺世の徒に在り、かの創見の三人者の若き是なり、關東關西兩中心が、尾參勢濃と鎮西と以て之に陪し、而して一昂一低、儒學の盛衰を促がせる者此の如し。

既述の趣

附醫學

儒學は實に三百年文運の一大脊梁なり、其の政治と相表裏して、凡そ理亂休戚、因循更革の故、此と相係らざることなし、其の經絡氣脈の通ずる所を釋ねば、かの肢體筋肉の動止操作する所以に於て、明らかめ知るべからざる莫し、而して儒學に觀貼して、其の關係最も緊密に、其の變遷發達の跡最も類同せる者は、醫術を然りと爲す、足利氏の季世、和氣丹波兩家の業漸やく振はざるは、猶ほ菅清二氏の學のごとく、半井瑞策が和氣氏に掉尾たるは、亦船橋秀賢が清原氏に中興せるに類し、上池院、吉田、竹田諸氏が僧官を以て、專業の家たるは、五山僧徒の間々、儒學に精しき者あるに似たり、古河三喜が明に入りて留學すること十二年、以て李杲、朱震亨の術を傳へしは、猶ほ

醫術の變遷

松橋秀賢
慶長十九年
辛酉年六月

古河三喜
と桂庵

曲直瀬道
三喜愷窩
道三文隆
三年癸卯
八十九

桂庵が程朱新注を専研せしがごとく、其の一生を東偏に終りて、大に中原に行はれざりしも、亦桂庵が學、獨り薩南に遺りしと相同じ、李朱の學、補中益氣を主とし、五行運氣、臟腑配當を論ずること、宋儒性理空談の習風を承くれば、即ち其の兩ながら我が新時代文運の潛源たる、偶然に非ざる者あり、曲直瀬道、三は其れ醫家の藤愷窩か、其の術を三喜に東國に得ること、猶ほ愷窩が桂庵文之の傳を薩南に得るがごとく、大に李朱を標出して、方術中興の祖たること、愷窩が宋學の祖を以て、并せて儒學の中興たるに異ならず、其の著啓苑集、天正二年、朝廷特に詔するに、天下に願ち永久に傳ふべきを以てす、亦後光明帝の愷窩集に序して、校刊せらるゝに同じ、但だ其の輩行は遙かに愷窩に長じ、其の歿年も亦慶長以前に在り、是は則ち以て氣運の促がす所、兩道の勃興、期せずして同じきを見るべく、後に古方家の興る、復古派儒學の誘引する所と爲る者と均しからざる者あり、豈に人の生に於けるや、其の急なること、義よりも甚しき者あり、故に醫術の行はるゝこと、儒學よりも速かに、而して又其の術を操る者、富榮なり易ければ、則ち因循して改むるを思はず、故に其の變革の運は、寒薄の儒生に後るゝを免かれざるか。

岡本玄治
正保四年
井上玄徹
貞享三年
山脇道作
延寶六年
五寶八十年
野間玄琢
慶長永
古林見宜
明曆三
九長徳本
寛永七
八

講解專門
の圖

曲直瀬家の見孫、東下して幕府の官醫と爲るは、愷窩の高弟、道春の見孫が、關東の文柄を執ると同じく、其の門下の或は東に下ること、岡本玄治、井上玄徹等が若く、或は西に留まると、山脇道作、野間玄琢、長澤道壽、古林見宜の徒の若き、亦愷窩の徒、兩都に家を爲すと同じ、道壽が修學に科程を立つること、朱子小大學の意に倣ひ、又精を藥品に致して、土佐用の稱、土佐道壽が名と不朽なるを以て、之を南學の徒に比するは、稍牽強に嫌ありとせんか、然るに甲斐徳本が自然良能説を倡へて、患者の好む所を邀へ、利導啓發して、妙技奇中、其の峻拔の術を奮て、廉潔の行を兼ね、惠澤一方の民に被るは、豈に中江藤樹の類たらざらんや、其の時皆儒に先だつは、亦かの生と義と趨舍の遲速、世俗の免かれざる所なれば也。

儒家に在て、宇都宮遜庵、毛利貞齋の徒、専ら諺解を以て、淺蒙を啓く、醫家も亦之有り、南川維遷云ふ、國初京師の醫家、素問難經を講ざる者、嬰庭東庵を嚆矢とす、其の門人、味岡三伯に至りて、其學愈盛に行はる、井原道閑、淺井周璞、小川朔庵、岡本一抱子、皆其の傳を受て、生徒を教育す、堀元厚、朔庵に學び、亦諸子と頡頏す、此諸人皆講授を以て任と爲し、而して治療を専らにせせと、一抱は戯曲家、近松門左衛門の弟、其の醫方諸書

を諒解すること數十部、後進に益すること尠からず、醫學の傳播益盛にして、而して弊も亦隨て生ず、陰陽運氣の空理、天下を靡從せしめて、絶て發明創見の技なし、是れかの宋學性理の談漸やく人心を厭はしめしと同じく、勢極まりて將さに變せんとするの候なり。

儒醫

正統文獻
寬永間人
松宗巴
長宗巴
元祿下西
年十六
村冬嶺
寶永上冬
年七
二寶永八
年二十年

儒學の盛あるに及び、京師の儒者、仕へずして家を成す者は、講説に入らざれば、即ち往々方技を兼ねて以て口を糊す、堀杏庵が曲直瀨正純に學び、江村專齋が秦宗巴に學ぶが若きは、則ち亦仕途に在て之を兼ねる者なり、松下西峯が古林桂庵の高足たる、村上冬嶺が世醫たるが若きは、則ち方家よりして、儒を兼ねる也、伊藤仁齋は儒者の醫を兼ねるを不可として、儒醫辯を作る、然るに其の門人並河簡亮は則ち以爲らく、儒流皆恒祿あるを得ざれば、則ち醫を兼ねて業と爲すも、道に害せず、専ら儒を以て居るときは、或は衣食支へず、其の志を固うする能はざらんと、其の門往々儒醫を出し、而して古方の大家と稱せらるゝ者あり、論者謂ふ、仁齋徂徠、古學を倡へしより、醫家も亦復古を主とする者あり、簡亮が古義の徒にして、其の方技仲景を宗とするを觀るに、古方の興る、豈に此際よりするかと、簡亮が古方の祖とすべきと否とは、未

だ遽かに断せべからずと雖も、當時變候己に熟して、而して儒の古學の勃興、又外より之を蕭せしは、則ち疑ふべからざる也。

古方家の
嚆矢

名護屋丹
水元祿九
年九
北山友松
元祿中

名護屋丹水、北山友松、貞享元祿の際に當りて、先づ明醫の窠臼を去りて、直ちに仲景に沂る、丹水は平安の人、少にして經學を勤め、易占に精し、壯に及で醫に歸し、言ふ、吾が藥を用ふる、病因の陰陽虛實を問はず、唯だ見證に就て治を施すのみ、輒近方法細碎多岐、語を古に考ふるに、徵信すべき少し、志ある者術を擇ぶを先と爲す、後世憑臆の論、一切廢棄し、然る後醫治始めて道ふべきのみと、一世の李朱を奉ずる時に獨立して、務めて之を排斥し、撰述頗る富む、衆謗喧然、醫家に古方後世の目ある者は、丹水より防まると云ふ、門下又盛んに、芳村恂益の若き、隱居して著述を以て終り、徂徠稱して好學君子の醫と爲せり、後藤長山は則ち贅薄きを以て、丹水の門に入るを拒まれ、發憤して遂に大名を成す、徂徠が仁齋に書を贈りて答へられざるに激するに似たり、友松は長崎娼婦の子、明僧化林獨立二人に就て醫を學び、亦仲景を規範として、諸家に參酌し、業成りて大阪に行ふ、學問浩博、行事奇偉、聲一時に震ふ、二子者の輩行は仁齋より長ずれば、此れ猶ほ未だ儒の古學に啓かれし者と謂ふことを得ず、意ふ

後藤長山
享保十二
年五
五保七
年七
獨立寬文
十二年
年七

山脇東洋
寶曆十二年
八月

吉益東洞
安永二十年
七月

方家
香川太冲
寶曆五年
七月

三香月牛山
元文五年
八月

山村通庵
寶曆元年
八月

永富獨嘯
應明和三年
三月

奥村良筑
寶曆十年
七月

古方隆興
東洋三仁
東洞三徠

東洋三仁
東洞三徠

東洞三徠

東洞三徠

東洞三徠

東洞三徠

東洞三徠

東洞三徠

仁齋の學之を宋儒に比すれば、已に存養を費て、重きを日用行事に置き、其の經濟を談ずる、桓寬の鹽鐵論を取りて、稍功利に傾ぶけりと稱す、徂徠が跡を論じて心を問はざるの學に至ては、固より純乎たる功利の説なり、蓋し世情の趨く所、議論漸やく唯物實驗の主義に流るゝ者、當時自然の勢なりし歟、丹水が見證施治の説の若き、亦仁齋の言に冥契する者あるに似たり、山脇東洋、吉益東洞等起るに及では、即ち高く周漢を談じ、盛んに家言を張りて、古書を疏解す、是れ實に物氏の風に浸染する者也。』丹水、友松は必ずしも所謂儒醫の徒に非ず、後藤良山、其の門人、香川太冲、及び松原慶輔、香月牛山、山脇東洋等、相踵で輩出し、各古醫方を以て鳴る、而して是れ皆儒醫の徒なり、良山は江戸の人を以て、家を京師に成し、始めて順氣説を唱へて、宋明諸醫の甘補を主とするを徒論とし、謂ふ百病は一氣の溜滯より生ず、故に順氣を以て治療の綱要とすべしと、乃ち艾灸、熊勝温泉を用ゐて沈痼を活暢せしめんことを求む、香川太冲之を推衍して、藥選等の著あり、温泉治法に於て最も得る所あり、山村通庵も良山に學で、人工泉を創意す、松原慶輔は並河簡亮の門に出で、寛厚の長者を以て、山脇、吉益諸子と傷寒論を會講するや、推されて主と爲る、丹水、良山、慶輔、東洋、世に古方の

四大家と稱す、蓋し東洋に至て、益古方の勢焰を揚げ、儒に於ては漢魏の古學、醫に於ては張長沙、勵精之を攻め、聲名藉甚、又識鑿ありて才を愛し、永富獨嘯庵、吉益東洞二子、皆其の推轂に因りて材を成し、譽を馳す、吐方を越前の奥村良筑に受けて、汗下吐三方を備具し、官に請て刑屍を解剖して、職志を著はす、儒醫の盛、此に至りて極まり、而して古方の隆興、勢も亦定まれり、古益東洞曰く、我が醫方、之を今の儒流に視ぶれば、東洋は其れ伊藤仁齋か、衆に先て鞭を著けたり、吾が業は敢て物徂徠に譲らず、隠として一敵國の若き者は、永富氏の子か、我死せば即ち此人將さに海内の冠冕たらんとす、蓋し東洋の前、古方の大家なきにあらざ、然れども其の一世を風靡して、大勢を定めし者は、洵に其の功を推す、東洞の此の言ある所以、而して又其の才物を變成すること、木錦里の風あり、其の時は則ち錦里仁齋に後るゝこと、且さに六十年ならんとす、亦醫方の儒學に比して大に變じ難き者あるを見る也、永富氏の子、落々たる人傑、其の東洋より少きこと、二十七歳、東洞より少きこと、三十一歳なるを以て、兩つながら後生畏るべきの目あり、而して中道夭折す、吉益東洞、晩に大名を成し、則を扁鵲に取り、方を仲景に考へ、宋後温補諸説を一掃し、以爲へらく、

萬病一毒、藥も亦毒、毒を以て毒を攻め、毒去て體佳に、未だ始めより元氣を損せず、何そ補と云はんやと、藥徴、方極の諸撰、相繼で成り、峻劑を驅使して、沈患痼疾を起し、剛厲峭直の性を以て、流俗の惑を啓き、緩劑温補、劇毒除かず、以て死を致す者は、非命の命か、良醫に遇はずして、粗工の手に斃るゝ者は、非命の命か、死生命あり、醫の治する所は、人事、醫にして、死生を司らんと欲するは、天命を以て私有とするなりと言ひ、治驗卓絶、門下濟々、醫方の大變、此に於て全く成る、東洞毎に言ふ、天下の醫、余を以て標準と爲すと、後の古方を唱ふる者、皆東洞を祖とす、其子南涯、更に之を推衍して、氣血水の説を立て、謂ふ、人身の營養する所以の者、氣血水の循環して、已まざるを以てす、病毒の生ずるは、三者停滯して、常を失へば、故に毒は一にして、而して毒の因る所の者は、三つと、父子相承けて、其の業益々廣し、其の譏園を以て比と爲すは、賊に當れるを見る、其の立論も亦、教を重して、性を問はざる、儒の古學家の説に類するあり、然るに儒學に在りては、仁齋一逝して、中心東に移り、醫方に於ては、則ち東洞の起る、猶ほ關西に於てす、是は則ち二術の必ずしも相同じからざる也。

東洞の中心未だ東に移らず、關西醫術の全盛

吉益南涯
文治十年
九年

東洞の中心未だ東に移らず、關西醫術の全盛

荻野元凱
文治三年
癸卯

鍼灸復古

安永の間、斯道の光輝、燦然として、盡く關西に發す、荻野元凱は、金澤の人、惠美三白は、廣島の人、並に吐方を善し、元凱朝に仕へ、僧官に補せしめて、典藥大允に任ず、三百百病停食に生ずるの説を唱へ、嘗て佛書の四百四種の病、宿食を本と爲すと言ひ、又病を治するに、斷食法を用ゐるを言ふを見て、引て以て證と爲せり、元凱は、又刺絡を善くす、同時平安の垣本鍼源、最も刺絡に精しく、常に謂ふ、一鍼以て萬病に應ずるに足ると、攝入菅沼周桂、善く鍼灸を用ひ、鍼灸復古と稱す、世之を古方鍼と謂ふ、慶元の間、京入松岡意齋、金銀を以て鍼を製し、而して意齋流あり、其の門人加茂祠官、駿河、幕府に仕へて、駿河流あり、又明の術を傳へし吉田流あり、而る後、杉山流、關東に興りて、管鍼を用ふ、此に至りて、鍼科又一變す、産科には、賀川玄悦の關西に鳴る、亦明和前後に在り、産論の著あり、養子玄廸、産論翼を著はし、其の子、關齋、久しく、缺けし女醫博士の官に復す、蛭田玄仙、白河の人、亦産科に長じ、賀川氏の術、未だ關東に及ばざるに當りて、大に東國に行はれしも、遺書傳はらば、門下の述作、又其の蘊を發するに足らず、外科には、吉益、中條二流の金瘡醫、已に陳して、寛文、延寶の交より、南蠻流漸やく盛んに、栗崎流、檜林流、カスバル流等あり、紀人華岡隨賢出で、而して面目一新す、隨賢は吉

産科

賀川玄悦
安永六年
癸卯

外科

花岡隨賢
天明六年
癸卯

益南涯の門に出で、又大和見水に外治を受け、磨淬多年、内外合一、活物究理の説を
 抑め、藥餌鍼灸の及ばざる所、腹背剗くへく、腸胃瀰ふへし、苟くも以て人を活すべく
 ば、必ずしも成規に局促せせと爲し、麻沸の方を製し、癩痲者に値へば、先づ之を投じ
 て昏醉せしめ、然る後手を下す、奇功偉績、世稱して華佗再出と爲せり、門人本間玄調、
 瘍科秘録を著はして、其術を東國に弘む、東洞の門には、村井琴山固く師説を守りて、
 鎮西古方の泰斗たり、中西深齋、傷寒一書を攻讀すること三十年、論者其の註釋顯明、
 實用に期するを稱す、瀬丘長圭、腹診の法を闡發して、江戸に行はれ、東洞稱して東方
 の一人とす、橘南谿、天明中に在りて、元凱の門人、中途若村二人、享和中に在りて、並び
 に刑屍を解視して、東洋の遺緒を繼ぎ、御醫畑柳安、醫學院の號を賜て、最も講説に勤
 め、學範の者、深粹確實と稱せらる、此れ其の最も著はるゝ者なり。

凡そ此間遷移、醫方に於て實に前古未有の大變態たり、一時趨嚮、各科の方法、必らず
 實驗實効に據りて、以て議論を立て、従前性理空談の習、洗除して遺すまじし、而して其
 の成功は、大抵關西人の手に藉て而して之を始終す、儒の古學、端を西に造して、効を
 東に收むる者と同じからず、豈に醫の市野に行て以て業を爲すこと、儒よりも易く、

村井琴山 享和三年
 文政三年 深齋
 中西深齋 享和三年
 瀬丘長圭 享和三年
 畑柳安 享和三年
 柳安 享和三年
 元凱 享和三年

關西の醫方
 關西の醫方
 關西の醫方
 關西の醫方

又且つ京攝の地、素より散地處士が、清苦刻勵、以て頭地を流俗に抽で、家に名け命
 を立つるに宜しく、而して關東の醫は、其の食祿に飽き、其の舊習に安ずるを以て、寧
 る其の位地を危うし、其の成敗を賭して、以て功名自ら奮ひ、駭異特絶の行を爲さん
 こと、儒よりも難き者あるか、後藤良山、儒と爲りて伊藤仁齋に超え難く、僧と爲りて
 隱元に兄たり難きを以て、慨然として思を醫方に潜む、是の若き者、獨り良山のみな
 らず、乃ち關西杏林の動盪、人目を駭せし所以、故に其の大家と稱する者、山脇東洋が
 御醫の家を承けし外、率ね皆其の身に及で名を揚げ業を成せる者なり、但だ關東も
 亦獨見の士なきに非ず、内藤泉庵、醫經解感論を著はす、論者以て條分縷析、頗る濬發
 多し、未だ排割の習を免かれずと雖も、亦葛藤を爰除し、別選を開く者なりと爲す、望
 月三英は、吉益東洞と時を同じうし、世に稱して天下の二名手とす、而して三英悦び
 ず、東洞を斥して、口を開けば周漢を稱するも、特に張子和の餘流に出で、屢暴自ら用
 る、人を刀に試むる者と爲す、醫官立稿の著、古醫方を表章して、痛く五行運氣の妄
 を辨ずと雖も、所謂古方は京醫の古方に異なり、其の學博覽に得て、經方を融會し、偏
 執の見を立てず、深く識者に許さる、原芸庵、京人を以て江戸に移り、機警を以て鳴る、

望月三英
 明和六年

原芸庵
 永四年

醫方の折衷派

遠井園南
天明二年
山田圖南
天明四年
天田圖南
天明五年
七

福井楓亭
寛政四年
八
和泉泰純
享和三年
六
三
多紀兵三
三博士
多紀慶淡
享和元年
多紀和元
享和七年
桂山文化
七
五十六

目黒道琢
寛政十年
田村元雄
安永五年
太田澄元
寛政七年
五
多紀隆庭
安政四年
三

皆東醫の録々たる者なり然るに其の醫方復古の功竟に東國に成らざる者は惟だ
かの因習の弊之を致すに非ずや

論者云ふ享元以還長沙の學大に開け戸ごとく著はし家ごどに述ぶ漢土に譲らず
然るに吉益爲則一切武斷枉を矯めて直に過ぐ其子猷務めて之を皇張す亦蛇足を
免かれずと吉益氏の前四家に拔て古方を大成するを以てするも鹵莽の譏は往々
之れ有り是に於てか變移の候亦兆す蓋し亦儒の折衷考證の學興るの運に應ずる
有る也平安の淺井圖南素難倉公に原き折するに仲景を以てし毎に香川吉益二氏
を排す議論頗る江戸の望月三英に類す江戸には則ち山田圖南博辯宏識傷寒論集
成の著中西深齋辯正名數解と並び稱して諸家駐釋中最も要領を得たりと爲す論
者云ふ博引旁證從前固陋の習を一掃す其の長博に在り其の短も亦博を嗜むに在
りと皆天明中に没して當時古方の途轍を踏まざる者既にして天明寛政の際福井
楓亭和田泰純京師に興る楓亭學該博を極め術精巧を致し歸趣古方家に異にして
一時の大醫と稱せらる天明中江戸に召されて醫官と爲る泰純は則ち吉益の門下
に出で別に一家を成し謂ふ古來名工碩師神を醫術に専らにし各々得る所あり

其の善に法りて而して其の疑を闕かば古人孰か我師に非ざらん傷寒金匱は固よ
り我道の詩書殘缺ありと雖も要領備さに存す歴代方書猶ほ鄭訓朱義のごとし各
一長あり偏廢すべからずと是れ明らかに折衷の説を執る者なり同時江戸の官醫多紀
藍溪桂山父子丹波氏の遺裔を以て先世創設せし躋壽館の規模を擴め既にして白
河侯の新政に遭逢するや躋せて國策と爲し諸生を教育す亦三博士が昌平學を振
興すると相應ずる也特に其の官市の名家を延き并せて在野儒士を聘すること三
博士の學政を制する狹隘なるに愈る者あり明和再營の後桂山は素問を講じ山田
圖南桃井陶庵等は傷寒論目黒道琢等は内經難經等服部玄廣は靈樞加藤俊丈は難
經田村元雄太田澄元等は本草小阪元祐岡田道民は經絡井上金峩吉田篁墩龜田
鵬齋太田錦城等相繼で儒籍を講じ一時名流網羅殆ど盡く江戸醫學是に於て鬱然と
して興起す桂山の學又精博匹無く其の著はす所諸註衆説を條疏し精義を斟酌し
是より先き諸家が五行經絡を厭て臆造論駁訂詁の義を失ふ者桂山の書出でて人
々適從する所を知り粗鹵杜撰の風熄む論者謂ふ桂山葦庭二氏學術湛精尤も解經

東國醫方の
振興

鈴木其知
文化十三年
歿

岡節齋
弘化五年
歿

村田誠齋
安政五年
歿

四段年六十年

の體を得、而して學者漸く正路に向へりと、藍庭は桂山の孫なり、古賀精里も亦桂山を稱して、攻方善治、教育三者を併せて之を有し、兼ねるに篤行博愛を以てす、其の徒雲集、造就する所多しと謂ふ。醫方此に於てか再び變じ、而して中心始めて關東に歸せる者は、多紀氏經營の効なり、意ふに其成功、三博士の儒に於けるよりも善き者あるを見るは、亦其能く時運に應じて、研究の方、至當に歸し、矯直偏執を爲さざるに由れるか。

多紀氏父子一たび東國の醫方を振ひて、而して名匠並び起る、猶ほ西の山脇、吉益二氏に於けるがごとし、醫業教授諸人、既に一時の選たり、其の他片倉鶴陵、藍溪の門に出で、更に産科を賀川氏に學び、術一時に震ひ、名桂山に亞ぐ、鈴木其知は偏強にして學に沈潜し、岡節齋は山田圖南の門に出で、文恭將軍に寵眷せらる、而して藍庭又先緒を其の間に擧ぐ、徳川氏の末、洋醫方大に興るに及で、従前諸家齊しく振はざるを致すと云ふ、蓋し京師に村田誠齋なる者あり、吉益北洲の門に出で、師家氣血水の説を敷衍し、二物三氣四氣三變と爲し、河圖洛書に本て説を立つ、西洋解剖學を排して、生機活動の迹を覘て説を爲すは、廢城殘壘を覘て以て戰機を論ずるが若

西説暗合

し、脈を診し胸腹を按し、活動の妙を察するの猶萬軍馳逐の狀を目撃するがごとき、に如かずと爲す、然るに其の性命の理、藥劑の能否を論ずるに至りては、往々西説に暗合す、則ち亦時運の自ら至る、自然に此の如き者あるか。

儒醫相資

三百年間、醫方三大時期の沿革、大畧此の如し、而して古方の興る時、最も光華の發揚せるは、儒の古學の先輩、最も雄偉非常なると異なるなく、亦其の儒學に薰染せらるゝ所多きは、彼れ實に三百年文運の大幹にして、醫方百技、皆之が枝葉たりしを以て也。鳥山見庵、古方未だ興らざる前に在りて、經を伊藤仁齋に受け、其の徒をして兼ねて儒學を講ぜしめ、物徂徠も亦醫の儒書を讀まざるべからざる所以の由四あるを條説す、劉石秋云ふ、後藤長山は經義に純に、山脇東洋は疏解に博く、香川修菴は書として讀まざるなく、香月牛山は儒雅自ら喜び、吉益東洞、永富獨嘯菴は兵法經世の學に於て、尤も深鍊と稱す、刀圭を以て家を爲すと雖も、要皆古今を貫穿し、百家に入し、瓊奇儻能く言はんと欲する所を言ひ、爲さんと欲する所を爲し、以て一世に偃蹇す、人豪と謂ふべし、京人目するに儒醫を以てする、亦謂れなさに非ずと、夫れ古方家の祖、此數子者を出でざれば、即ち儒醫の功や没すべからず、多紀藍庭云く、近日醫

家著述、多く名儒の手を假て顯はる。醫經解感論の太宰春臺に於ける産論の皆川淇園に於ける産論翼の柴野栗山に於ける、皆是なり片倉鶴陵の著も亦多く龜田圃齋、太田錦城二子の手に成ると、橘南谿嘗て論じて云く、漢土の醫は文質に勝つ、皇國の醫は質文に勝つ、文質該ぬ備はりて、漢人に愧ぢざる者は、香川太冲のみと、又云く、本邦醫籍、大抵不文、西人に示すに足らず、唯だ産論、學範の二書、文章觀るに足ると、産論の成るや、文辭粲然、世皆稱歎す、玄悦淇園を見る毎に、未だ嘗て感泣して之を謝せまらんば、あらまると云ふ、山田圖南の集成も、亦稿未だ成らずして歿し、其の友太田錦城、其の門人と實に之を修定して世に行へり、誠に醫方の儒學と盛衰相縁り、變移相類す、由る所極めて深きを知るに足る也。

本草學は原と、醫學に附庸として興る者、慶元の際、吉田宗恂、藥性に精しきを以て稱せらる、洋舶獻ずる所の珊瑚枝、柏枝、瑪瑙花を辨識するを以て、家康に寵遇せらる、然るに當時未だ建て一科を爲さず、諸醫撰著、亦發明の説なし、寛文延寶に及び、肥前の儒醫向井元升あり、繼て貝原益軒あり、始めて彼我を對照し、親しく物産を驗し、此學の端啓く、長崎の盧草頌、本草を講じて、藥性集要を著はし、之を福山徳順に授け、徳順

本草學
吉田宗恂
長五年

向井元升
延寶五年
九十六

稻生若水
正徳五年
一

松岡玄達
享三年
丹羽正伯
寶曆二年
三野呂元丈
野呂元丈
寶曆十年
小野蘭山
文政八年
二

田村藍水
即元雄

大阪に往て、亦徒を集めて之を講せ、加賀の稻生若水は實に徳順に従て、本草の學を受けし者、性鑒別に妙に、古今を總括して、庶物類纂一千卷を著はす、大抵益軒と時を同じうす、新井白石稱して、齡未だ五十からずして、此の大著あり、古今罕觀なりと爲す、其の門松岡玄達、丹羽正伯、野呂元丈、又出藍の譽あり、關西の本草學、此よりして盛なり、丹羽、野呂二子、關東に用ゐられ、藥を諸州に採る、玄達の講業、獨り京師に盛んに、進に列なる者數千人、是より後、江戸の服南郭が莊子を講ずる外、比す可きなしと云ふ、玄達の門、小野蘭山を出す、博識無雙、殊域産する所、一卉一介の微も、立ろに指名せざるなし、寛政中年七十餘、關東に辟されて、本草を隣壽館に講ず、又諸國採藥の命を奉ず、論者或は之を李時珍、リンナアスに倣へて、宇内本草の三大家とす、關東には即ち阿部將翁、東奥南部の人を以て、漂泊して清の福建に留まること十八年、本草を學で歸り、江戸に居り、享保中幕命を奉じて、藥を東北諸國に採り、發見する所多し、壽を保つこと一百四歳、寶曆中に歿す、亦一代の偉人なり、田村藍水、其の門に出で、幕府の醫官と爲り、人參の耕作、熟製に於て、最も功績あり、其の子元長、其の門人、讃岐の平賀鳩溪、皆時に名あり、而して鳩溪の機警多能、尤も發明多く、又蘭人に學で、始めて西洋

宇田川榕庵
應弘化三
十九年

洋學

の物産學を倡ふ。宇田川榕庵の植學啓源は、リノナスの綱目に據り、此學翻譯の嚆矢とす。今の伊藤錦窠は尾人を以て榕庵に學び、其の聲海外に播す。此は則ち蘭學の支派に屬す。稻生阿部二氏、東西に祖たり、而して其の流兩つながら昌んに名家踵を接す。然るに其の專家極めて鮮なく、固より時の習風と大に相關すべきにあらざるを以て、其の變遷の際、儒學醫道の低昂顯著なるが若きあらざる也。

徳川氏の中葉以後、醫學と糾纏して而して興り、潛流浸潤、以て明治文運の源と爲りし者を洋學とす。島原教匪の亂、益海禁を嚴にせしより、蘭人の長崎に互市するを許すと雖も、象胥の吏、唯だ其の言を記するを得て、而して其の文を讀むことを得ず。國字を以て蕃語を記して、以て通譯の用に備ふるに過ぎき。故に、外科の醫、洋方を傳ふる者、西、栗崎、檜林、カスバル、吉雄の諸流、頗る世に行はれ、寛文の初め、已に幕府の官醫と爲る者あるも、特に手授口傳に得て、方書を緋て講究するに非ず。又泰西星曆の學を傳ふる者、往々横文を解讀するあり、崎人林吉左衛門、其の門人小林義信と並に徒を聚めて講習し、正保中、林は刑死し、義信は禁錮せらるるも、後赦されて從遊、頗る盛に、天和三年、官曆の日蝕を錯推せるを言て、而して中るあり、譯官西立甫は明曆二年、

西川忠英
享保九年
七年

禁書令弛

青木昆陽
西學を中
興す

青木昆陽
明和六年
二

幕命を受けて、葡萄牙の天文書を解讀し、向井元升、國字之を寫して、名けて乾坤辨説と曰ひ、西書翻譯の嚆矢たり。延寶中、召されて官醫と爲り、譯官西川忠英、泰西の曆算に通ずるを以て、享保四年、召されて江戸に至り、將軍吉宗、諮問する所あり、此の數人者、蓋し皆西籍に通ずるも、講習は國禁たるを以て、學其人と共に絶え、克く其の緒を續ぐなし。寛永七年、禁書令出で、殆ど百年にして、而して享保五年、始めて西書の教法に關せざる者は、舶齋を許すの令あり、是れ將軍吉宗が實用を尙び、又心を星曆推歩に留め、西人の其の術に精しきを聞き、其の書を得て、之を譯せしめんと欲するに由る也。

青木昆陽、幕府の儒官を以て、吉宗に眷遇せられ、其の命を奉じて、始めて横文を攻む。延享中、長崎に遊び、精思研鑽、稍其の聲音語路の旨を得たり、譯官西善三郎、吉雄、幸作等も亦た官允を得て、西書を緋く、此を西學の中興とす。大槻玄澤曰く、和蘭學の一途、白石新井先生に草創し、昆陽、青木先生に中興し、蘭化前野先生に休明し、鶴齋、杉田先生に隆盛なりと、白石は横文を修めしに非ず、特に其の絶倫の才、早く意を外邦の事情に留め、正徳中、羅馬人に就て、其の所説を記し、采覽異言、西洋紀聞を著はす、百年鎖

前野良澤 享和三年八月
 一 杉田玄白 文政十年八月
 十 桂川甫周 文政五年八月
 九 大槻玄澤 文化七年八月
 八 大槻玄澤 文化七年八月
 七 大槻玄澤 文化七年八月
 六 大槻玄澤 文化七年八月
 五 大槻玄澤 文化七年八月
 四 大槻玄澤 文化七年八月
 三 大槻玄澤 文化七年八月
 二 大槻玄澤 文化七年八月
 一 大槻玄澤 文化七年八月

國の習に染みし邦人の心目之が爲めに洞開せらる。是れ草創の功を此に歸する所以なる歟。故に西學の入るや、之を啓く者は星曆地理而して之を張る者は醫術なり。前野良澤は初め古方を吉益東洞に學び、齡知命に近うして志を蘭學に興し、青木昆陽に學び、又長崎に赴きて、吉雄、檜林等の譯官に受く、杉田玄白、明和中和蘭の人身解剖書を得て、良澤等と之を死囚に對驗して其の精確を覺り、相俱に譯業を興し、講明社を結で、有志の士を集め、拮据四年にして解體新書成る。蘭學興隆の機、此に於て定まれば、玄白の業を羽翼する者は、桂川甫周、中川淳庵等あり、大槻玄澤は仙臺の人、良澤玄白等に學び、更に長崎に遊學し、天明中蘭學解梯を著はし、始めて其の聲音の理を明にし、其の修學譯辭の法に及ぶ。文化八年、幕府翻譯局を設草天文臺に置き、玄澤に銀を給して蘭書を和解せしむ。子玄幹、蘭學凡、西音發微を著して、文典の學益明かなり。宇田川玄隨、良澤玄澤に學で、始めて西洋内科の書を著し、其の嗣孫榕庵、植物學化學の著譯あり。文化文政の際に至りて、此學益盛に、名匠輩出す。因入稻村三伯、玄澤の門に出で、京師に教授す。藤林泰介、小森鶴齋、又其の門に出づ。近畿の洋學は則ち此時よりして開く也。天保弘化の際、京師に新宮涼庭、小石元瑞あり、既にして船曳卓堂

新宮涼庭 享和三年八月
 八 小石元瑞 文政六年八月
 七 小石元瑞 文政六年八月
 六 小石元瑞 文政六年八月
 五 小石元瑞 文政六年八月
 四 小石元瑞 文政六年八月
 三 小石元瑞 文政六年八月
 二 小石元瑞 文政六年八月
 一 小石元瑞 文政六年八月

女科の譯あり、廣瀬元恭、物理、生理の學を興し、浪華の緒方洪庵、病理の書を譯す。然るに江戸に在ては、其の學を爲す者、杉田玄白等よりして、已に醫術の外に逸して、竊かに資て經世の談に渉る者あり、西域物語の著者本多利明、時務を論じて破天荒の言あり、青地林宗、氣海、觀瀾の著ありて、又幕命を奉じて、異域の地理事情を譯述し、笑作阮甫省吾父子、歴史地理に精通し、高野長英、渡邊華山等は、其の所學に因て時事を諷し、以て禍殃を取れり。杉田成卿は海上砲術の書を譯し、又獨逸の書に渉る、弘化嘉永の後、邊事大いに滋く、海外諸國の學益開けて、獨り蘭學に止まらず、而して江戸の文物、鬱然として海内蒼萃の處たり、以て今日に至る。夫れ洋學一途、獨り儒學、醫術と軌を同じうせき、専ら東に盛にして、而して西は則ち寥々たる者、豈に其の興るや、時已に文化中心、東移の後に在り、而して其の學又た物質に偏して、理義に涉らず、又東の宜しき所に於て、西の便ならざる所なるを以てするか。要するに、其の勢慶元以前の儒學に類し、白石の草創、或は清原頼業に比すべく、福澤氏の業、慳窩氏に似ることなしとせき、以て明治文運の潜源と爲すべくして、以て徳川氏の盛を鳴らす者と爲すべからざる也。



國學

國學儒學
の相縁相
斥の
荷田春滿
元文元年
八十八年

加茂真淵
明和六年
三十七年

春滿と仁
齋

國學が三百年文學の偉觀たること、以て儒學に雁行すべし、而して其の發達の際儒學と或は相縁り、或は相斥く、前後轉振の大關鍵は、則ち荷田春滿、賀茂真淵に在り、猶ほ儒の伊物二子あるがごとき也、然るに春滿の歿する、仁齋に後るゝこと三十年、真淵の歿、徂徠に後るゝこと殆ど五十年、亦以て儒學の徳川氏文學の大幹たり、諸他の學藝、或は爲に誘はれ、或は爲に激されて而して起るの勢を見るべし。
春滿が洛南、荷稻山の祠官に崛起せるは、仁齋が堀河の市人に振ふと、勢相同じ、但だ仁齋の學、猶ほ宋儒の臭味を脱せず、纔かに徂徠に至りて、乃ち一切理談を廢し、而して經義詞章、合して一と爲る、春滿國學の復古を以て任じ、國史私記、古文古歌、兼綜して該通せざるなく、史の神代卷、萬葉集に於て、實に卓として一家を成せり、詠歌は其の主とする所に非ず、又中世以後、淫靡風を成せるを憤り、一生戀歌を詠せざるが若きは、亦徂徠が通達圓滑を愛して、大に文風を煽げると同じからずと、雖も其の従前神道者流、詠歌之家に滿たずして、兩つなから之を洗刷せんと欲せるは、仁齋とも亦

異なるあり、是れ實に儒の古學興るの後に、出で、焉に觀感する所あるに由れる歟、其意見粗ぼ其の國學校の創立を幕府に建議するの書中に見ゆ、曰く、

今也、洙泗之學、隨處而起、擢墨之教、逐日而盛、家講仁義、步卒斷義、解言詩、戶事誦經、闕童壺女、識談空、民業一改、我道漸衰、紀土州嘗嘆焉、田園競捨、資產傾盡、善相公深痛矣、臣竊以是亦足以見太平日久之象、唯有爲可痛哭、長大息者、在我神皇之教、陵夷一年、甚於一年、國家之學、廢墜存十一於千百、格律之書、泯滅、復古之學、誰云問、詠誦之道、敗闕、大雅之風、何能奮、今之談神道者、是皆陰陽五行家之說、世之講詠誦者、大率圓頓四教、儀之解、非唐宋諸儒之糟粕、則胎金兩部之餘瀝、非鑿空鑽穴之妄說、則無證不稽之私言、曰秘曰訣、古賢之真傳、何有、或蘊或奧、今人之僞造、是多、臣自少、無饑無食、以排擊異端爲念、以學以思、不與復古道無止、方今設非振臂張膽、辨白是非、則後必至塗耳、塞心、混同邪正、欲退則文已漂已晦、欲進則老且病且憊、猶豫無所決、狼狽失所爲、伏此請望、或京師伏陽之中、或東山西郊之間、幸賜一頃之閑地、斯開皇國之學校、然則臣自少所蓄秘藉、與牒不少、至老所訂、古記實錄亦多、嘗皆藏于此、備他日之考索、僻邑之士、爲絕難及者、或有寒鄉之客、有志而未果者、間多借之讀之、才通一書、百王之澆醜、此知洞覽

千古、萬民塗炭、可拯、幸有命世之才、則盡敬王之道、不委于地、若出琢玉之器、則拂本氏之教、再奮於邦、六國史明、則豈翅官家化民之小補乎、三代格起、則抑亦國祚悠久之大益哉、萬葉集者、國風純粹、學焉則無面牆之譏、古今集者、詞詠精選、不知則有無言之憾、夫本邦設施學校、權輿于近江朝廷、主張文道、濫觴於嵯峨天皇、菅江家有分彰院、源藤橘和繼起、太宰府有學業院、足利金澤延及、然所藏三史九經、陳俎豆於雍宮、其所講四道六藝、薦積於孔廟、悲哉先儒之無職、無一及皇國之學、痛矣後學之鹵莽、誰能歎古道之潰、是故異教如彼盛矣、街談巷議、無所不至、吾道如此衰矣、邪說暴行、乘虛入、憐臣愚衷、創業於國學、鑑世倒行、垂統於萬世、首創難成功、非經國大業邪、繼續易用力、真不朽盛事哉、臣之至愚、何之知、所不敢自讓者、語釋也、國學之多、紕繆、後世猶有知之者、典籍猶存、古語之少、解釋、振古不聞通之者、文獻不足、國學之不講、實六百年矣、言語之有釋、僅三四人耳、其爲巨學、新奇是鏡、極無超乘、骨髓何望、古語不通、則古義不明焉、古義不明、則古學不復焉、先王之風拂迹、前賢之意近荒、一由不講語學、是所以臣終身精力用盡、古語也、

以て其の時と其の志を立つる所由とを知る可し、其の儒學に於ける、必ずしも之を

村田春海
文化八年
六年

在滿實曆

排斥せざと雖も、其の父仇を殺せば、其の子却を行ふ、漸已に此に兆す、真淵宣長以下、
竟に儒者と相証誓するに至りしを怪むなき也。春滿の此文を讀むに、其の文辭世儒
も或は逮ばず、下真淵の若き、亦少時修辭の學を爲し、頗る護派の詩を善くせり、然る
に其の門人に至りては、村田春海が自ら儒者を以て任じ、而して國文に妙なりしを
除く外、儒氏の言に精通する者、寥々日に寡し、徳川初世の儒者、概ね兼ねて國文に通
ぜざるなく、往々歌集を遺す者あり、護氏出で、而して其の門人南郭の若き、猶ほ詠
歌ありと雖も、春臺輩より已に斯道は以て遂に堂上に勝ち難しとして、全く之を廢
し、然る後儒者の國文を善くする者、極めて希なるを致す、是に於て二道の背馳、復た
合すべからず、春滿の若きは、固より當時吉川、垂加以下の神道、和漢を雜糅し、二條冷
泉家の歌學、形迹に拘束せらるゝを慨じて、而して起ると雖も、未だ此を以て門戸を
張り、以て異教の徒と相排斥するに意あらざりしに似たり、其の資性慷慨にして、而
かも峻刻、崢嶸の行を爲さず、自から京洛人の氣象あり、歿するに臨み、其の著書稿本
を焚き、未成の言を以て後生を誤らざらんことを欲す、真に深人なる哉、其の嗣子孫
在滿、御風蒼生子の若き、關東に家すと雖も、自づから父祖の風を承け、出處荷くもせ

元四年
御風天
四十七
民子天
六十年
六十五年

春滿以前
の和歌

下河邊長
流貞三
十三年
契沖元
十四年
年六十二

宗祇文
二永貞
八貞德
承應二
三年八
三十八

ず、廉介不羈、時俗に染まず、亦堀河氏と相類する者あり、而して在滿の國歌入論、官家
の拘束を非り、古今傳授の妄偽を辯じ、定家卿を退けて、而して後京極攝政、其經を進
め、議論痛快、歌道の振作に於て、實に撥亂の功ある者、其の箕裘の業を克くする、殆ん
ど亦紹述氏の下にあらざる也。

春滿が終身其の精力を用盡し、以て敢て自ら譲らずと爲せる所の者は、語釋に在り
き、是より先難波の下河邊長流、圓珠庵契沖、相與に流俗の間に振ひ、沿習の陋を排し、
拘忌の弊を去り、古言を考證して、歌調の汚れるを慨し、語格の誤を正し、之を上世の
風に回さんと欲す、延寶天和の際、水府義公、修史の舉ありて、心方さに國學に嚮ひ、亦
釋萬葉集の著あり、因て遙かに二人を鼓舞して、其の業を大成す、是に於て契沖萬葉
代匠記の作あり、義公又其臣安藤年山をして就て學ばしむ、今井似閑、海北若沖、野田
忠肅等は、二氏の傳を受けて、京攝の間に往はる、蓋し古今傳授の義、東常縁が宗祇に
授くるに起り、數傳して細川幽齋に至り、之を亂離の間に維持す、松永貞徳、幽齋の傳
を受けて、徳川氏の初に鳴る、堂上公卿の和歌を善する者、世亦其人を絶たず、而して
騷虞の盛運、又麗藻の煥發を催す、鷗巢、水日、桃藻の三御集、帝者の斯道に勉めたまふ

中院通村 承應二年
通茂 寶永七年
通八 寶永十年
通四 元文二年
通七 享和元年
鳥丸 光文五年
寛永 十一年
武隆 小文六年
實隆 元文六年
三下 長八文八年
水安 長八文八年
佐川 壺齋 文政二年
六十 長好 文政五年
加藤 望月 文政五年
四望 長好 文政五年
天月 長好 文政五年
三和 長好 文政五年
平同 長好 文政五年
寶永 七年
文長 七年

と洵に著きを見るべく、而して後水尾帝憤世の詠、最も人心を興感す、冷泉飛鳥井二氏は專業の家と稱し、又中院通村、通茂、通躬、鳥丸、光廣、光榮、武者小路實蔭諸卿あり、或は以て惺窩氏の勃興、清家中興に況ふべし。論者云ふ、慶元以後、堂上の歌盛にして、泰斗に乏しからず、此等諸公、詞林に冠冕たり、天下之に鼓動せられて、二條家の風振ひ興る、而して其の下流、詞の禁忌に束縛せられ、又三玉集等を模範として、風調日に降る、長閑しな、あかれすとの詞、人を嘔吐せしむと、蓋し草庵の嗜蠟、草根の人工、以て無二の寶典とし、陳言を黠化して、巧を造語の末に求む、其の此に至る者は亦宜あり。木下長嘯、佐川壺齋の武門に出でて、隱居吟詠するは、石川丈山が詩に隱るゝに似たり。加藤盤齋、望月長好等、貞徳の門に出で、寛文延寶の間に、行はれ、長好の門、平間長雅あり、大抵契沖と時を同うし、河瀬菅雄も亦此時に當れり、有賀長伯は長雅に學て、名所の考證に精しく、門下極めて廣く、川井立牧等、以て翹楚と爲す、春滿の時に當る、是れ皆復古以前の名家にして、舊習に沿て敢て革めざる者なり。貞徳の時、林道春其の博通の餘を以て、歌學に涉獵し、往々專家を凌いで、秘説を辯駁すと雖も、業とする所此に在らざるを以て、新たに成説を立つることを爲さず、故に近世古學の祖、實に

有賀長伯 元文二年
元文 七年
戸田茂睡 寶永三年
寶永 七年
北村季吟 寶永八年
行 寶永八年
茂睡 寶永八年
近衛家熙 元文七年
元文 七年
存滿以前 神道
吉田兼見 慶長十五年
慶長 十五年
兼治 元和十六年
兼治 元和十六年
元和 十六年
五十二年 元和十六年

長流契沖二氏を推して、倡首と爲す、春滿乃ち其の後を承けて、大に後學を啓ける也。江戸の隱家茂睡が二條冷泉二家の禁制、極めて理なきを論じ、吟詠情を摠べて、敢て拘束を受けざりしは、亦二氏と時を同じうす、其の識見固より二氏の下に出でず、而かも仕を致して、隱居し、其學傳ふる者なし、豈に山鹿素行の類か。北村季吟が貞徳の門人を以て、出藍の譽あり、元祿の初年、關東に辟されて、父子祿を受けしは、木順庵の東下と相前後す、而かも其の學風は、則ち寧ろ弘文院の迹に似たり、故に木氏が宋學古學の過峽たり、又林家に抗衝して、盛に英才を育し、遂に能く徠門の徒と文華昌明の時に相馳逐するを致せるは、則ち之れ無し。春滿同時、近衛家熙、野宮定俊の若き、堂上の名家を以て、亦古今傳授を排して受けず、斯に亦東西氣運の早晚異なるを見る。其の神道に在りては、神祇四姓、下部氏獨り變故に遭遇して、漸やく利權を占む、兼俱延徳中に在りて、説を足利義熙に進め、古記神異に託して、其の族系を文り、其の家業を弘め、兼見、梵舜、兼治等兄弟父子、徳川創業の際に在りて、頗る寵眷を受け、遂に神祇長上と稱するに至る、唯一神道の旨、猶ほ眞言の事相を踏襲し、密乘の敬意を附會し

兼從萬治
七年

吉川惟足
元祿七年
九月

垂加時代
の神道

出口延佳
元祿三年
卒

て、竟に兩部習合の實を脱せず。兼治の子兼從、豊國の社務に補せられて、家を萩原と稱す。豊國社毀たるに及び、後水尾帝の旨を以て、僅かに配流を免かれて、吉田に整居す。吉川惟足、乃ち其の隱栖に就て神道を學び、盡く其の秘義を傳ふ。或は云ふ、惟足は江戸の買人、産を破りて鎌倉に隠れ、素より詠歌を好で、竟に神道を學ぶに志あり。慶安萬治の際、京に至りて兼賴に従學し、竊かに其の家の書を盗み、吉田氏の訴ふる所となりて、殆ど將さに罪を得んとす。會々人ありて營救し、幸に免るゝを得たりと。既に東歸して、寛文の初、會津正之侯に親信せられ、堀田正俊、稻葉正則兩侯も亦其の說を喜び、業漸やく世に行はる。兼從の人物、固より惺窩に比すべきにあらざるも、其の勢或は相類す。惟足は則ち以て羅山に比す、可ならんか。

山崎垂加の神道に於けるは、則ち山崎闇齋の儒學に於ける也。其の地位既に類し、其の人亦同一人たり。寛文の末、闇齋の會津侯に仕ふるや、惟足が門人服部春安、其太極說を破じて、國常立尊の義を立つ。闇齋因て終に惟足に就て神道を學ぶ。又伊勢流の神道を出口延佳に受け、中臣稔の深義を大中臣精長に受く。延佳は外宮の祠官、易理に通じ、其の神道を説くや、輒ち陰陽五行を談じ、又五部書に據りて說を立つ。然れど

も其の學術該博、吉田氏の鹵莽なるが若くならず、衆說を蒼萃し、間發明あり、蓋し度會氏の學、元應中家行類聚神祇本源を著はし、北畠准后が元元集、神皇正統紀の原づく所となりしより、中ごろ微にして、乃ち延佳に至りて、更に述作あり、神代卷を説けば所謂神宮傳説を宗とし、准后の東家秘傳、忌部正通の口訣、一條禪閣の纂疏より、私記、卜部懷賢の紀釋等、溯り、中臣稔を釋すれば、卜部家習合俗說の附會を晒ふ、其の學は則ち惟足に過ぐ、而して其の俗に容れらるゝの才、或は及ばざる也。垂加二家を折衷すと雖も、蓋し亦延佳に得る所多し、豈に其の儒に於ける、南學を受くると類せらるに非ずや。天人唯一道の要、土金の教に在るの說を立て、謂ふ、土と敬と、倭訓相通すと、以て居敬究理の說に合し、神聖の世に出る、東西處を異にするも、其旨妙契すと爲す。深く猿田彦神を欽し、云く、道は大日靈貴の道にして、教は猿田彦の教なりと、五部書を信じて、垂加の號も亦寶基本紀の神垂冥加の語に取る、留守友信以て近世神道の正統を得たるは、山崎垂加一人なり。高才明智、博學實德にして、卜部、忌部の傳を兼綜し、諸社家に存する所を蓄めて、擇で其の正に就き、三教習合の雜說を棄て、集めて大成し、上神人の徳光を掲彰し、後代に正統の傳を垂ると爲す。正親町公通、其傳を得、

元文元年 鳴祐之 保元元年 正徳元年 享保元年 天保元年 弘化元年 貞享元年 天明元年 文政元年 享和元年 元禄元年 宝永元年 享保元年 天保元年 弘化元年 貞享元年 天明元年 文政元年 享和元年 元禄元年 宝永元年

春滿以前の史學

故に山崎氏神道の嫡宗を正親町流と稱す、又下御靈社司板垣信直、攝人高田未白、山本源藏等あり、就中玉木葦齋等時の冠冕と稱す、鳴祐之は後に別に一家を成せり、關東に在ても亦澁川春海に傳へ、以て跡部光海、伴部安宗等より、岡田盤齋に遞及して、世に鉅匠と稱せらる、此等は、大抵春滿と時を同じうす、松下見林も亦度會氏より伊勢流の傳を受け、延佳の子延經、又家學を傳ふ、本源和平の神道と稱する者、林中助の若きあり、其他神佛習合の説を主とする者には、山田の祠官、龍照近の若きあり、延寶天和の間に著はれ、唯一家には長崎諏訪の祠官、青木永弘の若きあり、享保中に名あり、要するに皆所謂陰陽五行、胎金兩部の圈套を脱せず、而して勢の氾濫する所は、則ち天和の初、舊事大成經の大偽作を激成す、蓋し林羅山、既に神國説を立て、神道の佛法に殺亂せらるゝを厭ひ、兩部家の義を斥く、垂加は唯一家に學び、又五部書を取る、故に自ら其の流れを佛意に入るを覺らず、而して其の人素より浮屠を排す、是れ神道の儒佛二氏に率かるゝ、竟に一塲の大争鬪、大混亂なきを得ず、天和に於ける潮音が大成經は、此の時會に投じて、而して作れる者、文運の俄かに興る、挾書律の除ける漢代と類する者ありて、盡殘焚餘、眞蹟雜出す、寛文より以て元禄に及ぶ實に偽書

時期と稱すべし、獨り大成經のみならず、特に其の問題重大にして、而して其の詐力一代を掩ふに足らず、轉瞬の頃便ち敗れたり、雖も、以て其の時の趨く所を見るに足る、吉川惟足も亦此の計に與かれり、春滿が慨然として其の殺亂を匡正せんと欲せる所以、此に在らずや。

史學に至りては、材の豊富、學の博洽、力を得る所十の八九、獨り天才神識を以て之を濟すべきに非ず、故に林家の本朝通鑑、水府の大日本史、固より寒薄なる關西の企及すべからざる所たり、乃ち關東に在ても、三長兼ね備ふる源白石の若きすら、古史通讀史餘論以下の著、特に其の創見の卓異を見すのみ、かの林常二氏纂輯の業は、則ち之が爲めに頭地を放出せざる能はず、况んや其餘をや、且つ西山公の材能を網羅する、關西の史才、概ね探て、樂籠に收め、栗山三宅等の若き、特に其の才華を西に揚ぐれば、則ち亦羅致を免かれず、契沖、長流、詞藻の人も、亦皆嘗て徵招に遭ひ、其の超世逸俗の姿、僅かに曳尾の操を全うすることを得たり、但だ山崎氏の徒、往々亦國典精博を以て關西に鳴る者あり、鳴祐之が日本逸史、大八洲記ある、谷秦山が保建大記、打聞ある、其の志は、則ち大に稱すべき者あり、然るに祐之が正親町公通の歌人の薦を屠と

黒川道祐
元禄二年

春満以前
の有職學

野宮定基
正徳元年

三橋宗恒
享保三年

高橋永三
享保三年

壺井鶴翁
享保二年

壺井鶴翁
享保二年

せず、泰山が神道を固執して、其の同門三宅尙齋とすら合せざる、實に其の東用たらざるの素を見る。儒醫の徒、松下見林、黒川道祐、並に國典に通じ、見林の博識、最も及び難しと稱す、異稱日本傳、比較史學の端を啓き、識者以て國學者必讀の書、著者が從難きの續學を知るに足るべき者と爲す、前王廟陵記、國朝佳節錄、亦廢典の興復に資なくばあらず、或は契沖の古言を解釋せるを稱して、見林の學識を遺すに不平なり、其の後世に重ぜらるゝ此の如し、意ふに其の人と學と質實樸茂、才を詞藝に驚せず、故に當時に烜赫たらざる耳、有職の學は、堂上家より出づ、故に殆ど關西の専らにする所、白石が典故に心醉するや、其の教を受くる所は、則ち野宮定基あり、定基の門、高橋宗恒、元禄寶永の際に名あり、享保中梅園惟朝が國史神祇集の編を續ける樋口宗武あり、歌は契沖を慕ひ、尤も有職に精しと稱す、壺井鶴翁、考證頗る精しく、著述最も富み、踴然として時の大家たり、春満と時を同じうせり、春満の國史を究めんと欲するは、亦かの林家常藩と精博を競ふに非ず、將に以て皇道の由る所を明らかにし、教學を陵遲の餘に挽かんとする也、格律を起さんと欲するは、亦所謂有職家と撰を同じうせず、將に典禮の殘闕を補て、之を當世に施さんとする也、故に眞淵以下、春満

關西中心
の時

眞淵と徂

の學を傳ふる者に、史學を專業とする者あらず、在滿の令式に志あるや、故實興復の運に會して、朝廷の大儀に補ふ所ありき。之を要するに春満以前、國學の英華、全く關西に發し、二條冷泉の秘、有職故實の儀、之を堂上に占有して、地下の聲は、鞏毅の下に在るも、與かり聞くことを得き、徂徠が秦火の餘を以て海内を欺くと謂ひ、春臺が歌道の堂上に企及すべからざるを嗟せる所以、獨り神道のみ、吉川、山崎氏の傳、東も亦之を有すと雖も、習合、伊勢諸派の並ひ昌んなるは、亦に竟に西に及ばず、春満又爬羅剔抉、垢を去り、光を彰し、教政を興起せんと欲し、建學の議、幕府に容れられて、既に地を洛東に卜し、而して其の歿するに會して、果さず、眞淵田安家に仕へて、而して氣運學風、斯に一變せり。加茂眞淵は國學の物徂徠なり、其の春満に伏見に學ぶは、徂徠が初年仁齋に傾注するが若く、其の家を江戸に成して、古學を倡道するは、徂徠が古文辭を以て旗幟を建つるに同じ、並に曾一代を風靡して、門生天下に布き、十年からずして四方風を採り、面目一新せり、眞淵の學は、長を萬葉に見、契沖春満の說に因りて、更に之を振明す、蓋し古史を明らめんと欲せば、古言に通ぜざるべからず、古言の精、萬葉に蓄まる、故に

先づ萬葉を研究し、以て古事記、日本紀以下に及び、更に之を上世の器服に參し、皇朝の古風を盡して、溯りて神世の情を探り、以て所謂神皇の道を知らんと欲す、是れ其の學を爲すの序とする所、意ふに契沖の草創、専ら舊規の破壊に在りて、未だ新たに適従すべき所を定めず、又志歌體の洗新に存して、以て古史研究の門と爲すが若きは、或は未だ思ひ及ばず、故に動もすれば綿密に過ぎ、瑣屑に流るゝの譏あり、其の詠歌の若きも、長流漫吟集に序して、滿誓の舊柯を奮て、八雲の茂林に入り、縱横調を成して、昔人の道はざる所を道ひ、物名俳諧毫髮遺憾なく、無常歌に至りては、詞采の富麗、我邦未有の長篇たり、其れ十年經思の兩都賦の亞かといひ、契沖も亦晚花集に序して、若狹の少將を棄て、隱遁に生を終へし長嘯子、獨り其器大なると敵なかりしも、此を以て翁に比せば、拔山の力或は愈らん、弓を挽き、劍を揮ふの技、翁實に焉より長ぜんと、互に相推稱すと雖も、譏者仍或は並ひに玉葉を以て帳秘として、未だ中古に溯るとを爲さすと謂ふ、春滿は固より語釋に由りて古道に進むの義を建て、高簡爽朗にして、務めて大體を重ず、而して其の自ら歌詠に發する所は、則ち未だ其の倡ふる所に副ひ、天に世聽を聳かす者あらず、眞淵出で、絶倫の天才を以て、古言を運用す

ること、日夕常用の語の若く、縱横揮霍、絶て寤覺の態を見せ、詞意俱に高古にして、直ちに人九赤人の壘を摩す、蓋し眼千載を曠しうし、南都以還、僅かに鎌右府に於て神契するあるのみ、徂徠を以て之に比するに、其の前に契沖、春滿ありて、古言の勝廣たるは、徂徠が前に殆ど古人なきに及ばざるが若きも、其自ら作る所に至りては、矯矯磊落、天馬空に行くの風骨、峻上渾灑、銀河天より落るの聲調、心手相應じて、馳騁厥かず、徂徠が習氣未だ除かず、而して英雄人を欺くの類に非ず、抑も亦國語の做し易き、異邦缺舌の音と比すべからざる者あるか。

徂徠固より仁齋を壓するに意あり、故に事々にして其の爲す所に反し、務めて其の轍を襲はず、眞淵は則ち春滿を師奉すと雖も、春滿既に學問は天下の大路、壘斷して自ら是とすべからず、學者亦必ずしも師教に拘泥すべからざるを道ふ、古學の徒、師弟の義を重じて、而して各發明あり、敢て墨守せず、永く一種の美風を傳ふる者は、蓋し此に淵源す、是を以て眞淵の春滿と、學問趨嚮頗る亦逕庭なきを得ず、春滿は皇朝の書を讀まん者先づ西籍に涉りて、事理を明辨し、南都の辭藻を采りて、神世の蕪逕を開き、雄心を作興して、往蹤を尙論せば、古道復せざるを患へずと謂ふ、眞淵に至り

ては、古道を主張して、儒學を論駁し、人作に出で、強て天地の心を限隘せる者と爲し、禪讓放伐の習を罵斥し、而して邦俗往昔婚娶犯倫なるを回護す、其の言詭激に過ぎて、中道に醉ならざる者あり、黎民の愚は君威を彰はす所以と曰ひ、間蕪穢の地を存して、大道乃ち成ると曰ひ、夷狄禽獸の道、必ずしも貶すべからず、生類蠢々、人其の一に居る、何ぞ貴賤靈蠢を其間に存せんと曰ふ、枯燥なる科學懷疑の見に類する者あり、宣長以後、益儒者と相攻めたり、殆ど亦仁齋が猶宋儒理談に出入し、徂徠興るに及で、乃ち道即文章の義を立て、性理の徒と極力相抵排するに似る也。

卜部氏の徒、舊事紀、古事紀、日本書紀を稱して三部の本書と爲す。舊事紀は度會延佳嘗つて之を校讎し、源白石は其の重複錯亂多きを以て、未成の書たらんことを疑ふ、而して其の偽書たるを斷ぜし者は京師の多田義俊なり、義俊は壺井鶴翁の門に出で、其の人疎放不羈にして、而して才識警敏、古書を攷證し、眞偽を抉摘する、往々人意表に出づ、眞淵と時を同じうす。眞淵は則ち謂へらく、舊事紀は偽書と曰ふと雖も、猶ほ八百年前の作に係る、間古言の參稽すべきありと、本居宣長も亦其の大同以後に成り、紀記二書を編輯して、時に古語拾遺及び今は已に亡せる古書に取る者と爲

す。書紀に至りては、舍人親王の撰既に其の謠を極め、國史の首に居て、後世の模範たれば、學者崇奉、唯だ及ばざらんことを恐れ、歴世講説、其の奥旨を發明するを以て務と爲さざるなし、其の神代卷の若き辭を措き、文を成す、儒釋の書に出入して、傳會するに理談を以てし、易きを以て、神道者流、最も之を崇重し、兩部唯一、伊勢垂加の徒、皆之を講誦せり、浪華の際、白井宗因、寛文中に在りて、神社啓蒙を著はす、義俊が以て羅山の神社考に愈れりとする所なり、宗因の言に、神代卷も取るべきは二三策のみと云ふ、然るに春瀧は猶ほ盡敬王の道を稱説すれば、未だ之を批斥するに及ばず、眞淵古道を明らめんと欲せば、先づ漢意を淨刷せざるべからざるを主張するに及で、乃ち稍書紀を疎じて、而して古事記を右にす、嘗て古事記を釋するに志あり、齡晚景に薄りて果さず、本居宣長之を繼承して、遂に古事記傳の著、古言に由りて古史を解し、古俗に徴して古道を明らむるの學を大成す、宣長公然書紀の漢習の病を斥し、敢て舍人親王の剪裁を議す、其徒益此説を講張し、而して古事記遂に日本紀に代りて、古學の經典たり、然るに宣長の同國に谷川士清あり、垂加派の神道を、玉木葦齋に受け、後に別に一家を成し、日本紀通證の著、儒佛の書に涉獵して、辭句の本づく所を擧

天野信景
享保十八年
三月十七日

野時繩
元禄十六年
三月十七日

吉見風水
明和八年
八月餘

荒木田經
元禄二年
十二月

宣長の古
學古道

げ博く先哲の説を彙集し、參互検討、註するに漢文を以てす、又尾人河村秀根あり、天野信景の門に出で、其の兄秀頼と並に博洽を以て知られ、書紀集解の著、以て士清の通證と並駕すべし、此等は皆眞淵と時を同じうし、同じく考證を主として、而して古學の徒と趨舍を異にする者、其の紀平洲、南宮大湫等と大抵相前後するを觀るに、當時尾參勢濃の野、文運の鬱勃たる以て見るべく、其の地内外兩宮の存する所に於て、度會氏父子以下、國學の來龍、固より儒學より深遠に、尾張津島の祠官、眞野時繩、菅原直勝、下部兼魚、東愚、度會延經等に學で、古今神學類聚鈔百卷を著はし、松下見林の刪正を求めしは、元禄中に在り、又天野信景の若きあり、春滿と時を同じうして、博洽の學を成し、以て後進を啓けば、其の成就せる文物に於て、亦國學の徒、大に儒者に過ぐるあり、且つ其の家を爲すも、必ずしも東西兩都に出づるを須みずして、其の土に就て業を成すことを得たるは、異とするに足らざる耳、尾張東照宮の祠官、吉見風水が、従前神道者流が據りて金科玉條とせる五部書の偽作たるを辯じ、宗廟社稷の別を明にして、外宮を社稷に貶し、度會延經が辨抄を増益して、吉田氏の僭妄を發せしも、亦此際に在り、風水も亦垂加の門流に出で、別に一家を成せる者、意ふに士清

風水並に師風を變じて、力を考證に専らにす、豈に其の時之を致すか、抑々其の地之を然らしむる也、荒木田經雅が、神宮儀式帳解を著せる、宣長と同時の人に係るが若き、亦其の餘波と謂ふべし、而して其の土風の精を鍾めて、精博の考證に奮ひ、更に獨創の識見を以て之を運し、國學に於て無前の偉勳を策せし者は、則ち松阪の醫生本居春庵なり。

春庵は則ち宣長、所謂鈴屋大人なる者、始め京師に出で、醫術と儒籍とを攻め、既にして契沖、眞淵の書を讀で、志古學に嚮ふ、一夕眞淵を松阪の旅舎に見て、遂に籍を其の門に委し、爾後贈答質疑、屹々倦まざり、而して其の新たに自ら發明する所は、則ち更に精駁を極め、古學一道、金聲して之を玉振し、古事記傳の大著は、實に其の本領の存する所、蓋し半生の心血を注ぎ盡せる者、其の書を讀めば、上世の言語風俗、器服禮文、身處して而して目睹するが若し、後之を指摘する者あるも、特に其の枝葉末節に過ぎざり、夫の大綱の若きは、一定して動かすべからず、其の古道を主張するや、之を産靈神の産靈に歸し、陪冊二神之を舉めて、天照大神承けて、而して之を保つ所と爲し、天皇の大御心を心として、其の詔命を敬奉し、其の惠澤に頼りて、各祖神を齊祀し、克く

其の分を盡して、歡樂以て世を終るに在りと謂ふ、或は其の老莊の説に類せるを疑ふ、而も彼は虛無自然を主とし、此は實體ある神物を奉ず、天祖を以て日神と爲し、天命因果を排して、禍福の原を禍津日神、大直毘神に出づと爲し、古傳の載せざる所は、之を神異不測に歸して、妄りに臆度を加ふべからずといふ、其の門人服部中麻、更に推衍して三大考を著はし、天地泉の開闢を示す、蓋し忌部正通が神代口訣、貞治中に於て、水土圖して一圓球たり、天其外を包むの圖を作る、谷泰山以て千古の秘を啓くと爲す、中麻豈に此に基て、之を葦牙の傳説に參し、而して三大清濁昇降離析の説を爲せるか、又俄羅斯北邊の警に際して、馭戎慨言の著あり、尊内卑外の旨を擴めて、此邦を以て獨り天照大神の邦にして、大地の頂上、萬國の最尊と爲す、是に於て儒佛の徒、撥りて而して之を難じ、宣長も亦此と往復相辯じ、益其の説を張る、而かもかの婚娶犯倫の事の若きは、是れ古の俗にして、今の習に非ず、人の今日に處するは、公法世尙準じて而して之に従ふ、是を神道と爲すと解し、反りて儒者を難するに、貴賤離婚の陋俗を以てし、族品の天分溢るべからざるを道ふ、其の語格を論定して、詞玉緒紐鏡を著はし、音韻の學を釐正して、漢字三音考、字音假字格を著はせるが、若き緒餘に

屬すと雖も、亦皆先聲未發の蘊を發し、一世の耳目を新にせり、晚年藩主紀侯、召見して侍醫の班に加へ、其の京に入るや、四方才俊就て學を受くる者多く、縉紳鉅卿も亦其の講筵に列す、蓋し此より前き、縉紳家各其家傳を守り、地下の人を視ること奴隸の若くなりしに、是に至りて、草莽學者の説、頗る其の耳を傾くる所と爲れりと云ふ、宣長、眞淵を謂ふ、其の道を論ずる、未だ語て詳かならざるあり、故に大義未だ顯はれず、又其の漢意を去ること、未だ全く淨盡せず、往々其の窠臼に墮るを免れずと、蓋し眞淵の才、文辭に長じて、而して理義に略す、或は其の天分然る者あらん、抑も亦勢の已むを得ざるか、何となれば、眞淵の地位は破壊に主とせざるを得ず、是れ其の論議、顯ら性靈に發して、動もすれば、證引に疎に、簡捷獨斷に過ぎて、理路組織に短なる所以、宣長は則ち地位建立に宜し、故に其の古史研究に於ける、言靈の精微を發して、彼が如きの斐然を成すことを得、而かも其の古道の説に於けるは、豊かならざるの載籍に擇んで、已に備はるの儒術に抗せんとす、經營太だ困しみて、功或は其の勞に酬はず、同門の間、猶ほ紛紜を招く、然れども、其の純ら我が古史に據りて言を立て、衆技雜流に出入せざるを以て、臆說率合の弊較少し、乃ち下りて平田の徒に至りては、建立

眞淵宣長
用心の異

加藤枝直
天明五年
四月

整文私記
に古事記
傳に其姓
を以て人
を稱すべ
は無位初
の稱あり
きるを以
てさるを
曾美さか

の説益熾にして、赤縣印度乃至西歐の古傳、搜羅して而して參取せざるなからんと欲し、偏強の才、比較宗教學の緒を啓て、稽徵辯博、一代を壓倒すと雖も、其の世俗學者をして瞠目して而して疑怪せしむるや益甚し、古學の徒にして、専ら文辭一端に浸淫せず、道義の説に出入する者、大抵本居氏を宗とするは此か爲なり。且つ眞淵始めて榛蕪を芟り、我より古道を推拓す、故に觸目自ら新異に驚詫すべからざるなく、好奇の心動き易く、耽古の病生じ易し、嘗て正月に當りて、躬ら古制の服を服し、其友加藤枝直以て已甚しと爲し、喜て今俗に戻るを戒しむ、宣長の見は則ち諸に異なり、謂ふ道なる者は上之を行て而して下に施す者にして、下私に定むべき所に非ず、神學の徒が俗に異なるの行、即ち古に合せしむとも、今世に在ては私たるを免れ、道は天皇の天下を治むる所以、今其の正大公共なる者を以て、自ら限りて隘小にし、巫覡の爲に類し、詭秘隱怪、自ら標榜して神道と謂ふ、歎ずるに勝ふべけんや、上の時に制する所、下之に遵て是非することなし、古遺の意此の如し、故に吾家祭祀、佛施僧の事、一に先世の爲す所の如くして、惟だ謹み、強て世俗と異を立てず、學者宜しく道を明らかにするを以て務とすべし、私に道を行ふべからず、唯だ其の明

き、又其
風、後を
王、人の
に、疑し
も、宣長
する、此
如、し、
古、の、
見、難、
し、る、
べ、

歌論の異

縣門諸子
の趨密
村田春道

らむる所以、て人に教へ書に著はし、之を後世に傳へて、五百歳千歳、以て時至りて而して上の用ゐて以て天下に施さんことを待つべしと、眞淵の詠歌に於ける、殆ど天授あり、宣長及ぶ能はず、而かも其の歌を論ずるが若きは、則ち亦宣長の言正鵠を得る者多し、歌體の變遷、勢の已むを得ざるに出で、措辭設意、世を逐て充足し、古風後世、各其の長あるを言ひ、新古今を以て斷じて極盛の運とし、而して又其の當時作者の獨造妙詣して、後人の學び難き者と爲す、所謂古風家が萬葉を墨守するは、矯情尙ぶに足らずとし、其の學修の序は、亦宜しく後世よりして古風に入るべしと論ず、細かに其の論次する所を咀嚼するに、剖析徹に入りて、批評の切當せること、其の頭腦の健實を想ふべし、縣居氏を以て該園に比せば、宣長は其れ春臺か、而して其の人東に與らず、豈に當時江戸文運、其の大幹たる儒學すら方さに碎瑣に流れて、以て此の絶代の大材を承當し起すに足らざるか、而して眞淵の門、文辭を以て鳴る者は、則ち大半東材、古體の歌鬱然として東都に興る。宣長云く、東には文人春海あり、京には歌人蘆庵あり、其の詞章の工、吾が及ばざる所なりと、蓋し眞淵東下して、村田春道、加藤枝直、以て莫逆の友と爲し、小野古道、林諸島、

明和六年 春 堀尾 三 千 五 年 文 化 七 年 小 野 五 十 年 加 藤 永 六 年 安 永 五 年 七 年 林 政 五 年 六 年 政 取 十 年 天 保 二 年 油 谷 六 年 子 寶 二 年 堀 野 八 年 子 天 明 六 年 子 餘 明 六 年 子 餘 明 六 年 小 山 田 四 年 清 弘 四 年 十 五 年

加藤宇萬伎、春道の二子、春郷、春海、枝直の子、千蔭、楫取魚彦、倭文子、餘野子、筑波子等、以て受業の弟子とす、皆東國の出、而して最後の三子は婦人なり、其餘皆古言の學を攻めて、萬葉古體の歌を善す、就中春海、千蔭、最も少年後進にして、又た最も秀俊たり、關東古學の徒、大抵二子の門に出づ、然るに二子の趣嚮、頗る其の師と同じからず、春海謂へらく、詠歌の法、古言の學は、縣翁を奉ずと雖も、道は則ち周公孔子の道を道とす、和學者とは儒の本朝典故言辭に通ざる者、本邦の俗、少うして儒、老て佛、古より盡く然り、此の二者を捨て、別に道を建つるは、吾未だ之を聞かずと、是れ其の白川樂翁に悦ばれて、其餘稟を得る所以にして、又本居氏の徒と相悪く、彼は此を譏りて倭とし、此は彼を罵りて妄とする所以か、其の文辭に至りては、宣長すら已に推服す、以て其の價を定め難からず、大抵其の歌、所謂古學家と異なり、必ずしも萬葉の辭を采らざ、故に平易にして、味長し、其の和文は、則ち門人小山田與清評して曰く、詞を古に采り、心を今に設け、體をからくに、かりて、錦をちり繡をさへよそほひて、文かく道のはしだてて、これされしは、今むかしにたぐひなき功なりけりと、時に稱して、貫之以來、能文比なしと爲す、千蔭も亦瀟洒たる詞人、兀々道を求むるの徒にあらず、萬葉畧解

關東に於ける有職

日下部景衡 景保 景中

の著、後學に惠あり、筆札の妙、世の景嚮する所と爲るのみ、亦以て關東の氣風、文辭に宜しくして、而して理義は其の長ずる所にありたりしを見るに足る、論せる者云ふあり、美樹魚彦の儔は、眞淵初年の姿を専らとし、萬葉の語を以て歌を作す、其の下流奇僻に流れ、佞屈、擊牙、人の耳を聳駭して、意は必ずしも後世に異らず、千蔭、春海の儔は、古今を以て正鵠とし、中古のうるはしきを希ふ、是れ眞淵晩年の風に遵ふ也、本居宣長、國學は青藍の美を負ふと雖も、和歌は新古今を以て宗とし、歌のさま華に流れて實少し、要するに和歌は所長にあらず、門下異流、雜出、此の如きは、眞淵の大家たる所以也と。

關東將軍三四世の後、世々京師貴種清族と姻を通ず、而して繼ぐに五世豊亨の運を以てす、禮文綺縵の習、先づ後庭より開けて、武弁樸野の風、漸く世俗に鄙しまる、其の外に於て北村季吟の東下して、和學所と爲るは、其の内に於て秀才の妾媵、先づ物語草子の講筵を開くに促がされし也、六世の文雅なる、近衛公の東下、新井氏の西上、益典禮の修備を務めて、有職故實の研究、漸やく學者の心を用ゐる所と爲る、其の草摺の功、白石の力を大なりとす、白石が外弟に日下部景衡あり、武家の故實に精し、白石

伊勢安齋
天明七年

元野安通
寛政五年

二原長俊
寛政九年

四原貞雄
寛政六年

一貞雄
寛政八年

大塚蒼梧
享和三年

三和
享和三年

京師歌人の
盟出

入江昌喜
寛政九年

加藤景範
寛政九年

有賀長政
寛政六年

文政長政
寛政六年

小澤蘆庵
享和七年

九松元龍
享和七年

伴蒿蹊
文化三年

化三寛政
文化三年

八十寛政
文化三年

二延文
文化三年

似寶曆
文化三年

三寶曆
文化三年

八十六
文化三年

三浦安永
安永三年

軍器考の著、其の資助に頼ること多しと云ふ。安永天明の際に及で伊勢安齋あり、其家室町氏以來、武家典禮の事を主とる。安齋家學を講習して、博覽該通、著述極めて富み、攻據精密、従前未だ有らざと稱す。往々前輩の誤謬を斥正し、甚だ裨益あり、偶々其の議論、古史神道に渉る者を觀るに、亦識見の人に抜くを見る。門人眞野安通、神原長俊等盛んに其學を發揮す。同時瀨名貞雄も亦武家の故實を研索し、最も元和以來の事實に精通せり。既にして大塚蒼梧、寛政享和の際に當りて、有職故實を以て家を成し、兼ねて儒籍に渉り、和漢を貫穿し、其の考證の精核、安齋の上に出るも、其の下に在らざと稱せらる。且つ安齋の學は武職を主とす、而して蒼梧は則ち律令朝儀に通ず、蓋し此より前京師搢紳學士の專占たりし有職の學、適さに此際に至りて關東學者も亦其の域内に闖入することを得。但だ夫れ眞淵の勢は猶ほ徂徠の時のときも、眞淵の時は猶ほ徂徠の時のときもを得ず、護社英傑諸人、關東氣運の精英を吸收して、零は盡き、寶曆明和以後、頗に衰頹を極む。眞淵別運を取りて、新たに興て之を振はすと雖も、人才頗る落莫の歎なくばあらず。故に縣門の勢焔は、物門の熾盛なるに及ばず、而して其の關東中心の據を立

つること、亦半として、抜くべからざるを致す能はず。千蔭春海等の俊髦、砲を東都に發するの時と雖も、京師の間、猶ほ之と相抗衡して、關東學風の披靡する所と爲らす。其の混華に在りては、江田世恭、入江昌喜の若きあり、有賀氏の徒に、加藤景範あり、有賀長政も亦起て家學を此地に振ふ。其の京師に在りては、小澤蘆庵、伴蒿蹊、僧澄月、慈延、平安和歌の四天王と稱す。然るに四子の才、軒輊なきに非ず、一概に並び稱するは、固より公論に非ず。蘆庵の才、調秀拔、最も餘子の及ぶ所に非ず。素より武技に精しく、資性亦慷慨、其の滄生君平が山陵志を修めんとする志を嘉して、之を其の家に舍し、富豪三井某の輕薄を惡で之と絶ちしが若き、以て其の人と爲りを見るに足る。其の歌直に性情を摠べて、修飾を假らざるを以て主とし、所謂たゞごとを以て歌の至境とす。蓋し頗る時習に慨する所ありと云ふ。是より先き元文より寶曆の間、僧似雲あり、歌を好で西行の跡を慕ひ、古今傳授を藤原實蔭に受けて、遍く名山勝地に遊び、和泉弘川寺の地を以て西行の墳と爲し、庵を結びて居る。明和安永に及び、僧涌蓮、亦和歌を善くし、眞率樂易の風に長ず。京師たゞごとの一派、實に此等より發す。蘆庵の逸才、既に奮習に沿て、搢紳家の法則に拘束せらるゝに堪はず、又古學の驥尾に附して

信偏の語を作すを屑とせず、是れ其の別に法門を開くたゞと一途に出づる所以か。蒿蹊も亦同調の人、其の結想、人家の庭園、假山假瀑、奇卉異花、雜然として秀を競ふが若きを服ひて、悠々として山峙ち水流るゝ自然の景物に類するを愛すといふ、又能文の名ありて、時人傳等の著あり、然るに香川景樹の未だ行はれざるや、之を嘲て曰く、此の如き文字我二十年前にして辨すべし、唯だ此の如きを爲さざらんを欲す、我の今に至りて文章なき所以也と、亦時に英雄なく、賢子をして名を成さしむるに過ぎざる耳、澄月の歌、蘆庵に雁行すと稱す、往々奇趣を求めて、専ら率易を爲さず、慈延は則ち才調較劣る、夫れ澄月、蒿蹊は武者小路實岳に従て、二條家の風を傳へ、蒲蓮、蘆庵は冷泉爲村に従て、冷泉氏の法を受く、各々變ずる所ありと雖も、要するに皆後世風を倡へて、古學家と並び馳する者たり、冷泉爲村は則ち當時に在りて、搢紳家の歌風を振ひし者、日野資枝も亦之と名を齊しうす、而して梨木祐爲、祐之の孫を以て、亦爲村に學び、詠歌八萬首、精力比なしと稱せられ、前數子と時を同じうす、此れ猶ほ徂徠歿後、享保元文の間、京師猶ほ古文辭學の侵襲する所と爲らざりしが、ことごとき歟、論者云ふ、蘆庵古今體を唱へ、見聞する所に隨て、心の趣く、所率易詠出するを主とし、

梨木祐爲
享和元年
卒

香川景樹
文政四年
受年七十七

關四の語
學放古有
職家

富士谷成章
安永八年
受年七十二
御杖文政
六年受年
五十六

特に六帖の風を希ふ、適々二條家近時の束縛を打破するに足る、同時伴蒿蹊、古學を尙び、又中古體の歌を唱ふ、近世地下和歌の盛あること、實に安永天明の際に在り、偃武以後、詠歌一道、堂上を歸となせし者、此に至りて乃ち一變して、地下の達人を以て標準とす、而かも二條冷泉の間全く其人なしといふべからず、蒲蓮は爲村卿の門人なり、黃中は澄月の門人にして、又西洞院時名卿の琢磨を受く、是より先二條家の歌人、江戸に武田自寛あり、大阪に加藤景範あり、京には澄月、大愚あり、又閑院尹宮美仁親王、傑出の歌仙にして、御詠近世の姿に非ず、風體立意、殆ど三代集の眞に逼ると、亦以て當時の形勢に於て、發明する所あるに足る。

富士谷成章が言語音便の説を究むるは、豈に其の兄淇園が開物の學に觀感する所あるか、本居宣長、玉の緒を著はすや、成章がかさし、あゆび二抄を觀て歎じて曰く、豈に意はんや、我に先て鞭を著くる者あらんとはと、其の詠歌作文も亦復かに時流に抜けり、歌を搢紳廣橋氏に學ぶを以て、其の超警の才、往々古風に出入すと雖も、毎に京家を回護して、陽に之を論破せず、而して徹に其の獨見を示す、用意蘊藉及び難き者あり、惜む其の世を永くせざるを、而かも子御杖家學を承けて、又詠歌に妙なり、考

藤井貞幹
元治六年

高橋宗直
天明八年

橋本經亮
文化三年

京極古學
の播布

上田餘齋
文化七年

古の學には藤井貞幹あり、其の家言、宣長等の嘲罵する所と爲る者、杜撰の譏を免かれずと雖も、篤學好古、著書後人に惠すること多し。有職の學には、高橋宗直、宗恆の子を以て、其の家學を大成し、亦儒學を伊藤東涯に受く、尤も諸家の記録に通達し、其の著書石類書二百餘卷、莫然たる大冊、以て其の博洽を見るべし。其餘數十部あり、宗直の門、橋本經亮、警敏不羈の資を以て、力を斯學に専らにし、服飾故實の攷證極めて多く、寶石類書の校正も亦其の手に成れり。中道夭折、著書稿を脱せる者甚だ少きも、其の學識超群なるは蓋し没すべからずと云ふ。武家の故實に東備の土肥經平の若きあり、其の著書も亦能く世に播せり。

京極の間古學あるは、加藤美樹之を東より移植せしに濫觴せる歟、其の門に上田餘齋あり、崎行狂才、俗と睨乖し、交友極めて寡く、其の親しみ善する所、蓋庵蒿蹊數子に過ぎず、又門戸を張り、子弟を延くを意とせざるを以て、其の文辭珠貝の璀璨たるが若く、其の旨趣、古松の槎枒たるが若く、異彩溢發、奇姿橫生、獲難きの珍たりと雖も、識る者尙に鮮し。鈴屋氏の業大に盛にして、東は江戸より東海諸國、西中國九州迄、迄るまで、門葉滋蔓するに及び、京極も亦古學の風靡する所と爲る者、殆ど三十年、此時に

田山敬儀
文化四年
前波默軒
元治四年
小河西流
文政三年
五原雄風
清原雄風
文化七年

國學の傳
堀保巳
文政四年
文政七年

當りて、蘆門の英俊、田山敬儀、前波默軒、小河西流等ありと雖も、以て原を燎く、の火を撲滅するに足らず、又且つ前後下世し、有賀長收、富士谷御杖等も亦相踵で而して逝く、是れ古學の家をして獨り張らしむる所以、亦猶ほ元文以後、東涯以下相踵で地に就き、而して古文辭の横流天に滔るがごとき也。然るに海道以西、古學を爲す者、既に本居氏を宗とすれば、則ち千蔭春海の徒、盛んに關東文場に相翺翔するも、勢函嶺を踰へ西すること能はず、怜野集の撰者、清原雄風の若き、鎮西の人を以て、かの二子の間に遊ぶと雖も、其并漫放浪せし所の地は、亦關東を出でず、竟に芙蓉社諸人が海内文壇の主盟たりしが若きと能はざる也。

堀保巳一が和學講談所を寛政中に開きしは、三博士學政更新の運に合す、而かも其の學は歴史律令を主とし、其の業は史料の蒐輯、刊行を専らとす、群書類從の成る、實に我が刻書の事に於て、無前の大業たりしと雖も、三博士が學風の肅清を圖りて、毀譽紛々、一大警策を儒學の趨嚮に加へしが若きことあるなし。若し保巳一をして、覇心を包藏せしめんに、は、吉川家の惟一神道、北村氏の和學所、之を衰廢の餘に、起すと、三博士が林家の業を扶植し、擴めて昌平學の盛を致せしが若くし、以て當時古學

萩原宗固
二年八十八

山岡明阿
九年永九

屋代弘賢
十年保八
天保四年八
石原正明
二年四十年
文政六年十
松岡辰方
七年七十四
天保七年七

中山信名
五年七

考據派

符谷保六
天保六年十
市野迷庵
十年七十一
北野慶嘉
永元十年七
永元十年七
石川雅望
天保七年十
八保元十

村田了阿
十年保七
天保十年七

の徒を鞭撻せんこと、或は其の宜しく出づべきの途たらん、意ふに此の若きは、學術の進運に於て、必ずしも希ふべき所に非ず、而して保巳一の偉たる所以は、亦此に出でざるを以て減せざる也。保巳一の學を爲すや、萩原宗固の指導に頼ること多し、宗固は二條冷泉二家の風に入して、詠歌に名あり、而かも能く加茂真淵が當世に卓絶せるを誦りて、保巳一をして己れを棄て、之に就て教を受けしむ、僅かに半歳にして、眞淵歿す、保巳一又嘗て律令を山岡明阿彌に學ぶ、明阿も亦眞淵の門に出で、師と趣向を異にし、別に一家を成せる者、其の長ずる所は、紀傳律令に在り、其の精力の注ぐ所は、類聚名物考三百五十卷等に在り、保巳一の學風、淵源する所なくば、あらず、而して精博更に焉に加ふ、其の著者と以て、煩雜比なき校訂の業を成し、能く後世をして其の惠に頼らしむるに至ては、眞に千古特絶の奇事、人類記性の妙用を極めたる者と謂ふべきのみ、其の門に屋代弘賢あり、藏書五萬卷、博覽にして、筆札絶妙と稱せらる、石原正明、松岡辰方は有職故實に精しきを以て著はれ、中山信名は放逸にして、舊記文書に通ぜるを以て名あり、蓋し當時儒學已に考證一派あり、學人の相商ぶるや、輒ち博洽を銜ふ、氣運の感ざる所、國學の徒も亦た博覽一派の別に旗幟を建

つる有り、瑞氏は其の大幹なり、而して其の之と相前後して、各自ら家を成す者に至ては、林々として衆き也、符谷校齋は純ら國學を以て著はるゝ者に非ず、其考據和漢に涉りて、彼間の學に於て、漢儒の言を取り、唐鈔宋槧、碑摺法書、以て古泉貨に至るまで、珍異獲難き者、兼儲せざるなく、和名鈔、靈異記、法王帝說等を訂證し、古京遺文、度量權衡考等の著あり、亦松崎謙堂が漢學を主張し、石經を開刊すると、時を同じうす、校齋、市野迷庵と并せて、三右衛門と稱せられたる一人、北靜庵、亦博洽を以て時に名あり、好で前人の紕繆を指摘せり、靜庵等と同じく狂歌に名ありて、宗匠の號を允されたる石川雅望が、雅言集覽の著ありて、其の文を作るや、一句の來歴なきはなきを期せしが、若き、罪なくして配所の月をながめんと、言ひし顯基中納言を景慕し、蚤歲薙髮して、一生不犯ありし村田了阿が、考證千典、俚言集覽の著あるが、若き、是れ皆當時專家の外に在て、博覽一派の風を揚げし者、若し夫れ古學の徒に在ては、春海の門人に小山田與清の若きあり、擁書倉の藏書數萬卷、其の富屋代弘賢と並び稱せらる、春海、千蔭の後、與清、平田篤胤、伴信友と、或は稱して三大家と爲す、平田は神學に聞え、伴は考證に名あり、而し

岸本由豆 流弘化三 十年八
 大石千引 天保五年 五
 輕浮一流

て興清の長は類書に在り、大家の稱當否必ずしも論ぜず、而かも其の博引旁搜の力に至ては、同時蓋し能く相若く莫かりし也。同門に岸本由豆流あり、亦多く珍器異書を藏す、狩谷松齋と姻婭の好ありて交り善くし、儲藏の奇に相誇れり、其の著書は大抵亦考證類纂に屬する者なり。夫れ本居宣長の國學を爲す者を指導するや、古書の註釋を作るを以て、喫緊の科目と爲す、關東古學者は、則ち天明修靡の風を承け、重ぬるに文恭院時代繁華の習を以てす、儒風の文酒微逐に染みて、稠人廣座、應酬の際に勝を求め、刻苦焯礪、力學必傳を期する者甚だ罕なり。春海、千蔭等、實に此の輕浮一流の主盟たり。然るに春海の門、小山田岸本二子の若きを出し、千蔭の門、大石千引の若き、亦頗る力を榮華三鏡の類物語の外に在りて、前人未だ手を下さざる者に殫精す。同時國學の徒、力苟くも企つべくば、註釋を以て其の蘊蓄を見さんことを欲せざるなく、千蔭の門、岡田眞澄の若き、其の師の餘技たる筆札に於て得る所あるすら、乃ち書話の著、假字の源流を釋ねて、考證の力を示すに至る、亦以て一時の風潮を見るべし、但だ其の志尙は竟に博を街ひ奇を好むの弊を免れず、殊に親切着實の風少し、是は則ち時習方俗の遠かに脱し易からざる也。

京攝の博覽家

尾崎雅嘉 文政十年 三
 橋本稻彦 文政六年 文
 伴信友 化信三年 仲
 平田篤胤 年七十四 平
 天保四年 天保八年 天
 弘化元年 弘化元年 弘
 足代弘訓 安政四年 安
 三河村益根 文政三年 文
 西文政三年 西文政三年

瑞氏の業、霸府の資を仰ぐは、關西學者の固より望むことを得ざる所、然るに其の單獨の業として、博洽の實力を見せし者は、京攝の間、決して其人なしとせず。浪華の尾崎雅嘉、和漢の群籍涉獵せざるなしと稱す、而して其の當時學者異を並て名を求むるの弊を慨し、著述する所皆親切後學に使せしが若き、用意の甚だ篤きを見る。鈴屋の門、橋本稻彦、中道にして天折すと雖も、其の篤學精敏は、明らかに府流に非ず、伴信友は三百年考證の大家、亦本居氏に私淑せる者、平田篤胤が其の相善かりし日に稱して、校訂の才、當世無雙と爲せし所、皇室神祇より古文古歌の解釋、雜攷隨筆の類に至るまで、考證して而して能く其の要を得、精核周緜、一絲の滲漏なきに至らざれば、敢て安せず、宜なり、後の學者、其斷篇零冊と雖も、珍として之を傳ふるや、北邊氏の門に、榎並隆建あり、國史類函二百五十卷、源氏物語麻袋五十卷の著、其の精力過絶を知るに足る。尾參勢濃の間に在ては、本居氏の學再傳して、足代弘訓を生ず、江戸に出で、瑞、狩谷、北、屋代、諸子の間に交遊し、國史人名部類以下、考證類書の著編、千卷に餘れり、河村秀根の子に益根ありて、國史制度、家學に關する著述、頗る亦之れ有り、桂園の門に出で、一種出色の才調たる穂井田忠友、其の制度地理古器の考駁に於て、南都

藤井田忠
友弘化四
十六年五
心と關東
博派中

國學の三
大變

の秘藏を發し、精確なること藤貞幹の上に在りと稱せらる。其の浮夸矜持の能なく、實際實用と親しむより之を言へば、此等諸子の業、豈に必ず關東諸子の後に在る者ならんや、抑も瑠氏の大幹たるは、殆ど動かすべからざれば、則ち博涉一途、竟に關東以て中心と爲さるを得ず、亦儒學と跡實に相似る也。

夫れ春滿の前に在ては、神道者流、詠歌の徒、有職の家、各別に家を成して、必ずしも相渉らず、貞徳惟足、鶴翁の徒、經神家の業を移して、草野の士を以て之を唱ふ、一變なり、而かも未だ混一して相通するに至らず、春滿其の卓絶の見を振ひ、長流、契冲が語釋の説に鑒みて、盡く之を神道、有職の學に施し、直ちに其の源に溯り、其の歸一する所を求めて、以て之を澄清し、而して其の流委岐派する者をして、亦皆混濁に免かれしめんとす、眞淵之を承け、一生の成就する所、亦語釋詠歌を出でず、間々論著する所は、則ち魚にして未だ備はらざる者多し、而かも古學の旨、章然として已に一代に申ぶ、其の門に及はざる者と雖も、學を爲すの方嚮、宜しく改めざるべからざるを知り、復た從前沿習杜撰の説に安ぜず、是れ春滿眞淵、其の手に於て親しく神道、詠歌、有職の學を該ねて、而して之を一にする能はずと雖も、而かも神道、詠歌、有職の學、皆二子の

清水濱臣
文政四年
九遊清
本間游清
嘉永三年
片岡寛光
天保九年
春庭文政
大平文政
藤井高尙
天保十年
村田春門
天保七年

古學を倡ふるに因て、而して其面目を改めたり、二變あり、此より其後、苟しくも國學を爲す者、異を立て新を標する、一にして足らず、而して多少古學の矩度に出入せざる者なし、但だ夫れ混一の運は、特に大變態の際に在りて、大に人に抜くの才有り、乃ち能く焉に乗じて行く、其機一たび去り、其人一たび逝けば、則ち亦分離の勢、腫で至る、眞淵の門、已に宣長の古典に長じ、千蔭、春海等の詞章に専らなる、岐して而して二と爲り、往々相容れず、其の旁出する者、明阿と爲り、保已一と爲り、紀傳律令の學、亦派生す、春海の門、與清、月弦等は博覽を主とし、清水濱臣、本間游清、片岡寛光等は、仍ほ文雅詞章を以て家を成せり、宣長の子春庭、其の門人石塚龍麿、其の義子大平の門人、僧義門等は、語言の學に精しく、門人藤井高尙、村田春門等は、文詞和歌を改め、服部中庸等は、古道の發揮に勉め、而して其私淑せる二英物、平田篤胤の神典に於ける、伴信友の考證に於ける、亦皆其の趨嚮を一にせず、此を第三變とす、亦猶ほ儒の資曆、明和の後、學風、藤氏の殼中に落ちざるなきも、而かも百家競ひ起り、各々軌途を異にし、能く相統一することなく、宋學の再興、異學の禁制も、以て之を遏むるに足らざるがごとき歟、而して其の間に在て、踔厲風發、一代を振盪し、天下の耳目を聳動せし者を、神道

の平田篤胤、詠歌の香川景樹とす。
篤胤東偏に生れて江戸に出で、驚悍の姿、辯博の才、因頼轉軻の際に發奮して、傲岸凌厲の氣を鼓舞す、宣長の書を讀で、其の說に服し、自ら稱して門人と曰ふと雖も、其の學術人物、自然同じからず、宣長が平正にして篤學、古を好で、今俗に逆らはざると撰を異にし、古道を振興して之を當世に施し、神典を以て萬邦經緯の憲章と爲さんとす。服部中庸が三大考の說を擴めて、靈の眞柱を著はし、益々天地泉開闢の說を主張し、日月大地を以て幽明の理に傳會す、紀記以下有る所の古書を蒼萃して、彼此綴輯、其の意を以て捏合し、古史成文を著はし、更に其の傳を作りて、其の道とする所を表章し、定めて百代の大經と爲さんと欲す、亦已に宣長が諸古典に擇で、古事記の最も古にして眞なるを取り、循々として之を釋して、以て古俗古道を釋ぬるの類に非ず。其の力を用ゐる所は、又特に外邦の典籍に在り、是を以て支那に於ては、道教織緯の書を究め、星曆、卜祝、醫巫、妖魅の說を求め、皇天鬼神を畏れ、祭祀郊禘を虔むむ古風を懿として、後世儒教が人を以て天を揆り、理を以て道を解するの虛偽を謗り、其の天竺に於ては、大藏の遺す所に由りて、摸索探究、梵天の古說を取り、外道の說雜出して、

梵志の徒衰へ、佛陀の教、理義安排、外道の上に加へて、而して古傳の眞益を殺亂するを論じ、外道佛敎を斥けて、之を梵志の古に復せんとし、而る後盡く之を我が神道に率合し、斷じて曰く、海外萬邦の古傳は、皆我が古傳の訛れる也と、又其の關學者の言を聞き、當時理學宗敎抗爭の勢、未だ判明せき、而して其の我に傳ふるや、亦未だ詳悉ならざるを以て、造物の敎を得て、便ち之を悦び、地動の說を得て、便ち之を取り、并せ援て以て古傳の旨を得ると爲せり、若し篤胤をして新舊約の別を知らしめば、或は亦將さに舊約を助けて、而して基督の敎を斥けんとする也、其の佛敎を研究するの餘、禪定治心の義を得て、之を翻して、以て神道の實用を補はんとするや、情慾を離れ、親眷を棄て、汚穢貧窮に處して、以て見性成佛を求むるを排し、皇産靈神が人に賦せる眞心、善美を好むの性を存するを以て道と爲す、蓋し其の儒學を論ずる、漢儒五行織緯の說を本とし、當時儒の古學に得る所少からず、佛敎を論ずる、富永、服部等の說を祖述して、更に精微を析きしが如く、其の治心の說も亦當時儒者の間に漸やく將さに浹洽せんとする餘、姚氏の旨と默契するあるを見る、洵に時運の致す所、自然に此の如き者あるか、論者或は謂ふ、其の空海が兩部神道を痛擧し、更に惟一神道、垂加

篤胤の毀

城戸千楯
弘化二年
八年

齊藤彦磨
安政元年
七年

神道を詆刺し、道海潮音を怒罵するや、反て敵の謀に資して、空海が本地垂迹の説、潮音が佛教統治の策を翻し、彼此を轉倒して、以て其の閎博を遠の神道經綸を大成せんと欲すと、是も亦或は然る也。

要するに其の雄傑悍鷲の才、百部千餘卷の著書横説豎説、同を揆き異を排すること、餘力を遺さず、怒罵抵擧、回避する所なし、是を以て其の同門の士早く已に嫌惡する者あり、大平宣長の嗣子を以て、篤く師説を信ずと稱す、而して後相交親せしと雖も、初め最も相合せず、城戸千楯は評して以て大に山氣ある人物なりとし、殿村安守は以て鈴門の猛虎惜いかな之を服する人なし、藤垣内翁、春庭翁などの手にあひ難しと爲し、伴信友も亦た初め親しくして後に相惡し、其餘毀譽紛々、概ね皆其の説は信ずべからざるも、其人英雄、服すべしと爲せり、獨り服部中庸、齋藤彦磨等、終始之を扶くるある耳、意ふに篤胤温藉雍容の風なくして、而して又機變縱横の術を逞しうす、其の京師に入るや、著書を天閣に獻じ、謁を公卿に通じ、白川家神祇伯を以て、囑するに神祇道の教授を以てし、其の怒罵を被れる吉田家も亦其の聲望を利とし、託するに學頭の任を以てす、篤胤も亦受けて辭せず、藉りて其道を弘め、以て俗神道を變ぜ

生田道滿
天保八年

佐藤信淵
嘉永三年
二年

篤胤以外
の神道
橋守部嘉
永二年
七年

んと欲す、永平の禹麟居士號を贈れば、則ち亦喜で之を受く、其の門下を導く、星醫卜算、問ふがまゝに之を授け、博雜多方、醇駁兼ね有し、業を受くる者五百餘人に及び、大國侯伯、島津前田細川諸氏、皆歳時贈遺する所あり、晚年其の故主佐竹氏の徵に應ず、門戸の大に張れるは、則ち毀譽の百端なる所以、之を終ふるに大扶桑國考の獻皇朝無窮曆の著、水越氏幕廷有司の嫌忌に觸れて著述の禁を被り、竄逐せられて故土に歸り、僅かに二年にして歿し、而して是より先き其の高足弟子、越後の生田道滿は、大塩の亂に感憤して、又身を土寇の酋に殞し、其の同國の奇傑にして、又嘗て業を問ひ、銘造化育論、天柱記の著、益々西説を以て神道に渾融し、蘭學者中に在りて、識力挺拔、構思濶大に、空想の經綸、一代を推倒したる佐藤信淵は、神道方吉川氏の門に學頭として罪を被りて追放せらる、世運動盪の機已に兆するの致す所と雖も、又篤胤等の性之を招く者なくんばあらざる也。

篤胤の神道、宣長の意に合すると否とを問はず、自ら稱して鈴門末弟と爲す、其の門戸を張大して、天下を震駭するに當り、固に亦以て鈴氏の勢焰を揚ぐるに足らざんばあらず、獨り橋守部此際此際に當りて、斷々として本居氏の爲す所に反して、別に一家

の言を立つ、其れ亦一時の雄なるかな。蓋し荒木田久老、内宮の神官を以て縣門の巨擘たり、豪邁卓越の資、律令祝詞に精しく、最も萬葉集に通ず、當時宣長と并び稱せらる。然るに晩年其の家傳を主張して、縣鈴二氏と頗る趨嚮を異にする者あり、守部の學は、則ち此に得る所あり、概ね神宮傳説を祖述すと云ふ。守部は伊勢の人にして、江戸に出で、家を成す、當時古學者、古事記を以て唯一の經典と爲し、方さに且つ崇奉を極む、守部は則ち之に反し、盛んに書紀を揚げ、盡敬王の撰述、盡く古傳を存して、敢て一毫私意を其の間に加へて、取捨する所あらず、其の漢習ある者は、孝徳天智の際、彼土の文物を浮慕すること甚じき日、文人學士、記する所の遺に係り、一切刪去して、其の眞を并せ失ふこと能はざるに由るとし、舊辭本辭の差、雅言談辭の辯、器辭合言の説を根據とし、以て絲解毫析、頗る精義を發揮せり、而して收むる所古傳は、各皆據る所ありて、上古口々傳誦、以て舊聞を存せる者、其の雅言談辭の錯出、疊見して、屢今人の理會を眩る所以は、實に此が爲にして、此れ適往時に在りて、其の誦習を助くる所以たり、當時人皆古傳の義を聞知して、曾て惑ふ所なかりしも、大同弘仁の後、漢學の橫流するに及び、乃ち全く之を失ひ、古意斯に荒む、荆棘永へに披くべからざる

に至るといひ、又天泉アマノイヒ幽現カミツク顯露ウツクの義を解するに、之を有形實物に着せずして、之を無形神界に歸す、謂ふ天也、黃泉也、皆幽冥の一界也、其の處に約すれば、此の世の外に出でず、近く身體を包みて、而して膚に觸れず、遠く六合に彌りて、而して眼に遮らす、神には則ち天と曰ひ、鬼には則ち黃泉と曰ひ、二者を相攝ねて幽と曰ふ、世事萬彙、咸く神之を幽冥の間より治し、興廢禍福、感ずること形響の如し、敬すべく畏るべきの至り也、素盞雄尊の忍穗耳尊と、大己貴尊の瓊々杵尊と、幽顯相代治するの説ありて、大抵古史の跡を以て、之を地理より觀ずして、之を神話の假託に察す、其の他舊事紀が痛く従前學者に斥けられたるを冤として、寧樂の季世に抄録せる古記典に、平安京の中世、偽りて被らすに、聖徳太子撰の舊事本紀の名を以てしたる者と斷じ、其の錄する所は、所謂本辭體の殘篇多く、珍重すべきものと爲し、又漢成の天書、神宮の倭姫命世紀に於て、皆取る所ある等、是れ其の本居一派と趨舍を異にする所とす。世に天保四大家を數ふる者あり、篤胤信友、景樹、守部、即ち此れなり、其の時名ありしを見らるべし、久老の子久守、青木永弘の後、永章等、亦其の説を賛くれば、則ち古學の反動、將さに大に至らんとするの勢、守部未だ必らずしも、其の關振たるに足らざんばあらざる

願ふに其の死後二十年ならずして、國情の大變に遭ひ、國學の氣焰熄む、故に其の變態、竟に之を見るに及ばざる耳。

京師神道の瑣尾
小寺清之
文政三年
松岡厚
嘉永三年
平田神道の餘流
野々口隆正
天明四年
六人部是
香取元
安政六年
餘
安政六年

是時に當りて、京師神道瑣尾極まれり、備中の小寺清之、卜部氏に學び、蚤歲穎敏の稱あり、寛政文化の間、其の地に鳴る、其の國史註疏に於ける、講究せざるまじと雖も、猶ほ山崎氏の軌轍を出づる能はず、谷川士清の通證甚だ備はれるを稱し、其の蘊未だ盡さざる所有りとして、本教闡明以下、述作頗る多し、吉田氏の家司松岡仲良、歸厚等相繼で家學を傳ふるも、亦舊説を沿襲するに過ぎず、故に篤胤が其の叫譟跳梁を極むるに當りて、吉田氏の家司江戸に在る者、屈して其の門に入り、而して京師に報ずるに、斯人に頼らざれば、頽勢支へ難きを以てし、京師家司故老の輩、舊義を株守する者、往々違言あるも、竟に古學の猛將を延て、而して其の殘壘を保つ計を爲さざる能はざりき、其の衰頹の狀知るべし、然るに伊吹廼舍の門に出で、盛んに其の學を主張せし者、野々口隆正、六人部是、香等は、則ち皆京師に在りて家を成し、鶴峯、戊申、亦鎮西の材を以て、水府烈公に用ゐらる、蓋し此等諸人に至りて、而して蘭學習合の風益甚しく、乃ちゴッパを以て産靈神と爲して、憚らざる者ありと云ふ、而して其の

一種臆造の理論を推衍して、此に據りて、天人の宗源を解釋せんと務むるに至りては、淺易の言、心學の徒に類し、獨斷の論、大鹽後素等の風ある者、亦時世の流行、相感發する所ある者か、夫れ儒者に在て物理を明らめ、遂に釋老の言、西洋窮理の說に涉る者、三浦學山、帆足萬里の若きあり、二人皆鎮西に出づ、而して篤胤、信淵の徒は、則ち東鄙に生ず、時は、則ち粗ぼ相前後す、地は、則ち相距る五百里、斯に亦奇なり、而して篤胤の學、殆ど海内に洽く、學山、萬里の澤、鄉閭の間を出でず、豈に亦東に發する者、毎に彌蔓の性あり、而して西に生ずる者、皆孤立の風ある歟。

桂園派の和歌
香川宣阿
享保二十
清水谷實
清永六
慶永六
十元
泉新元
四年
十元
八年

香川氏の詠歌を以て家を爲すや久し、梅月堂宣阿、周防の人を以て京師に入り、清水谷實業に従て、二條家の風を學び、一條の今西行と稱せらる、享保の末に歿す、其子景新、孫景平、曾孫黃中、皆克く箕裘を繼ぎ、家聲を墜さず、景樹は、即ち黃中が螟蛉子、因幡の人、幼より俊慧、十五歳にして、百首異見を著はす、京師に出で、黃中に養はるゝに及び、其の識力益々進み、漸やく古學家の言に浸淫し、又獨造の說あり、頗る家學を變ぜんと欲す、終に黃中と合せ、加ふるに他故を以てし、乃ち梅月堂を辭して、別に自から家を成す、而かも師弟の義を存し、猶ほ香川氏を稱せり、享和文化の交に當り、蘆庵

熊谷直好 文久二年
木下幸文 文政四年
三浦夢宅 文政七年
桃澤夢宅 文政七年
四文政七年

百三十一
蒿蹊等たゞごと一派の巨擘、衰殘相踵ぎ、而して吐屑庵慈延、及び蘆門の名家、馱軒、萍流等、猶ほ時に鳴る、景樹方壯の後進を以て、已に嶄然として頭角を其間に露はし、諸老と相抗衡し、毀譽並に至る、獨り北邊一派、御杖、隆建等、之と交り善し、門人には周防の熊谷直好、備中の木下幸文等、僅かに之を羽翼するあり、桃澤夢宅、澄月の後を承けて垂雲軒に主たり、而して亦景樹に心折し、遂に其の社中に入る。蓋し此時よりして早く已に貫之、躬恒を主とし、風調を尙ひ、識見頗る時流に抜く者あり、既にして古學の風大に世に流行するに及び、景樹は則ち其の詠歌の正路に非ざるを見るや、新學異見を著はして、眞淵の説を駁し、古今代を異にすれば、風體の同じからざるを致すは、自然の理、一賊の發する所、乃ち天地の調たり、風の物に賦じて聲を成すが若し、若し其の世の體を體とせずば、何の體に取る所あらん、徒に古風を主とし、古調を踏襲し、古言を割裂するは、反て偽飾に墮つと爲す、歌は調ぶる者にして、理はる者にあらずとは、其の常に主張する所たり、古今集正義は其の畢生の精力を注ぐ所、前人の未發を啓き、歌道の蘊奧を盡す、意ふに古より歌を説くの精、能く其の右に出づる者罕なり、其の自ら運する所も亦清映秀麗、意筆先に在り、紛々たる咳唾、皆玉屑と爲る、之

赤尾可官 嘉永八年
嘉永八年 中川自休
天保十二年 朝山常清
弘化三年 高橋殘夢
四橋殘夢 七橋殘夢
治承七年 山田清安
一治承七年 山田清安
六山田清安 六山田清安
明和十五年 八田知紀
天明六年 八田知紀
五治承七年 八田知紀

を眞淵に比するに、彼は怪巖天矯、苦みくして老硬なるが若く、此は明珠盤徹、水に入りて見えざるが若く、彼は乾肉を噛むが若く、齒決咬嚼、滋味方に生じ、此は哀家梨を食ふが若く、吻に觸れ咽に下り、快爽言ひ難し、其の上乗なる者に至りては、鏡花水月、妙に幽微に入り、迢然として性情の玄機に觸るゝ者あり、發する者以て紀記萬葉を祖述し、三代集を憲章し、意を古に取り、詞を今に擇び、貫之、躬恒の神髓を得て、其の面貌を襲はず、姿華にして靈活するも、草庵漫吟の口氣なく、意工にして新奇なるも、新古今徹書記の牙後に落ちずと爲す、其の才の流利に過ぐるを以て、動もすれば諧體に流れ易く、鄙近に陥るを譏る者ありと雖も、超詣妙悟、企及し易きに匪ず、文政天保の際、門人大に進み、海内を風靡す、熊谷、木下の外、赤尾可官、中川自休、朝山常清、高橋殘夢、渡忠秋等を近畿以西の材とし、又特に西偏の材、其の手に開拓せらるゝあり、山田清安、村山松根、八田知紀等、薩南より出で、而して明治歌運の隆興、實に此の數老の澤に頼ること多し、海道の材には、穂井田忠友、氷室豐長の若きあり、山道には、内山眞弓の若きあり、而して見山紀成、菅沼斐雄等は、則ち之を關東に擴めたり、是時に當りて、關東には千蔭、春海等已に凋謝して、春海の徒、清水濱臣は其の才あり

水宮豊長 文久三年 内山五郎 嘉永五年 七永成 嘉永四年 兒山成 嘉永四年 菅沼雄 天保四年 九保雄 天保四年 景東の歌 關東の歌 加茂季鷹 天保三年 十保季鷹 天保三年 安田野三 文化十三年 恒本雪臣 天保六年 三保雪臣 天保六年 和歌と詩

て而して其の壽を永くせず。片岡寛光、本間游清等、錦門の後勁たり、足代弘訓、博覽の餘を以て、詠歌も亦工に、景樹が稱して古學者詠歌の最と爲す所と雖も、桂園氏の其の業に篤くして且つ深きが若きは、則ち未だ企つべからざる者あり。加茂季鷹、京師の人を以て、江戸に移りて業大に行はれ、其の狂歌を兼善くし、能俗に投ずるに宜しきを以て、一時名海内に振ひ、王侯貴人、以て俳優市暨に至るまで、其門に出入せざるなく、其の徒も亦安田躬弦、垣本雪臣の若きあり、而かも景桑楡に薄り、門下凋零す、是を以て桂園の業、海内に獨歩し、文學地下に遷りてより、關西の歌人、未だ斯の若きの盛なるあらざる也。

夫れ眞淵を以て徂徠と爲さば、美樹、魚彦が古調を以て之を羽翼するは、服部南郭、安藤東野、山縣周南の類に非ずや、然るに千蔭、春海の輩、眞淵晩年の弟子として、必ずしも萬葉を奉ぜざれば、則ち眞淵の古風に於けるは、徂徠が古文辭に於て一往還らざると同じからざる者あり、故に千蔭、春海が風流相高ふること、江湖社諸人に類するあり、而して其の縣居氏を崇奉すること、江湖社諸人が宋詩を主として、古文辭を罵ると同じからざるも、亦由る所なしとせず。通達、澄月、或は六如に比すべく、蘆庵は其

桂園柿園 家と頼梁二 加納諸平 安政四年 二安政五年

千福有功 安政元年 八政元功 安政元年 萩原廣道 文久三年 一久三 文久三年 治月尼明 治月八年 五治月八年 井上文雄 治月八年 二明治月八年

れ菅茶山か、頼山陽は詩を以て專家たるに非ず、其の作る所亦力を以て局面を壓倒する者多しと雖も、其の才識靈慧透明、而して眞を以て一字訣とし、唯眞故新を以て四字訣とするが若き、之を景樹に比して全く不倫とせざる者あり、然らば即ち梁星巖の地に擬すべき者は、其れ加納諸平か。諸平は遠州に出づと雖も、而かも和歌山に長ず、夏目養庵の子にして、本居大平の弟子たり、故に其の傳は古學氏に由るも、本居氏の詠歌に於ける、宣長より已に新古今を主とす、諸平は又眞淵以來の風に鑑み、古に拘せず、今に徇へず、骨氣の蒼老を衷にして、而して詞采の煥發を求む、亦星巖が唐賢を崇尙して、而して清人の風貌に取るが若き者あり、頤玉集を選して、同時の歌人を品隲し、門下又古學の徒多く、其の風近畿以西に波及して、桂園一派と並び行はれたり、堂上に在りては千種有功、亦二條家の窠臼に墮ちず、而して名手の稱あり、此より其後、浪華に萩原廣道あり、其の名著源氏評釋は、當時儒の文章專家、評文の法に倣ひて、之を國文に應用せし者、頗る微旨を發揮して、眉目瞭然たるを致し、京師蓮月尼の歌、亦一家の風あり、風流の名時に噪し、江戸の井上文雄は、岸本由豆流、一柳千古に學び、其の古を論ずるに、選集を斥けて、家集を主とするが若き、尤も適正の見たり、其

一考東四歐道
 二考昂學の
 三慶應前
 四慶應前
 五慶應前
 六慶應前
 七慶應前
 八慶應前
 九慶應前
 十慶應前
 十一慶應前
 十二慶應前
 十三慶應前
 十四慶應前
 十五慶應前
 十六慶應前
 十七慶應前
 十八慶應前
 十九慶應前
 二十慶應前
 二十一慶應前
 二十二慶應前
 二十三慶應前
 二十四慶應前
 二十五慶應前
 二十六慶應前
 二十七慶應前
 二十八慶應前
 二十九慶應前
 三十慶應前
 三十一慶應前
 三十二慶應前
 三十三慶應前
 三十四慶應前
 三十五慶應前
 三十六慶應前
 三十七慶應前
 三十八慶應前
 三十九慶應前
 四十慶應前
 四十一慶應前
 四十二慶應前
 四十三慶應前
 四十四慶應前
 四十五慶應前
 四十六慶應前
 四十七慶應前
 四十八慶應前
 四十九慶應前
 五十慶應前
 五十一慶應前
 五十二慶應前
 五十三慶應前
 五十四慶應前
 五十五慶應前
 五十六慶應前
 五十七慶應前
 五十八慶應前
 五十九慶應前
 六十慶應前
 六十一慶應前
 六十二慶應前
 六十三慶應前
 六十四慶應前
 六十五慶應前
 六十六慶應前
 六十七慶應前
 六十八慶應前
 六十九慶應前
 七十慶應前
 七十一慶應前
 七十二慶應前
 七十三慶應前
 七十四慶應前
 七十五慶應前
 七十六慶應前
 七十七慶應前
 七十八慶應前
 七十九慶應前
 八十慶應前
 八十一慶應前
 八十二慶應前
 八十三慶應前
 八十四慶應前
 八十五慶應前
 八十六慶應前
 八十七慶應前
 八十八慶應前
 八十九慶應前
 九十慶應前
 九十一慶應前
 九十二慶應前
 九十三慶應前
 九十四慶應前
 九十五慶應前
 九十六慶應前
 九十七慶應前
 九十八慶應前
 九十九慶應前
 百慶應前

山田錦所
 天保七年
 四重賢
 小野重賢
 天保五年
 辛保五年
 九保五年
 谷保五年
 文保五年
 七保五年
 飯保五年
 万保五年
 三保五年

の自ら爲すや、辭を新古今以前、寛治の頃に采りて、巧に之を剪裁し、景樹以後に在りて、異曲同工の歌才と稱せらる。其餘時に名家なきに非ず、而かも詠歌一道、東は終に西の盛に及ばず。然るに信友歿して後、西博洽、汝據の家に匿しく、而して東は則ち丹鶴、穀書の編者、内藤、廣前の若きあり、狂歌の點者、淺草、庵より出でし黒川、春村の若きあり、演臣の門人、前田、夏蔭の若きあり、蓋し武治の季運、時勢の轉變、已に中に蘊する者ありて、東は奢華の勢、積重し、而して西は用世の説流、行すると相感するあり、かの儒學に在りても、清人、汝據の風、益々東に盛に、而して餘姚、直截の學、特に西に喜ばれしと相發明して、以て其の偶然に非ざるを知るべし。

汝據の餘派、語言の學、漸やく盛にして、本居氏、未流、義門、大徳が大に力を此に用ゐし外、東に在ては、海野、游翁が天言活用圖、五十音口訣の著あり、太田、全齋が漢吳音圖に至りては、字音の研覈に於て、従前未だ有らざるの創見を出し、黒河、春村亦音韻考證三十卷を著せり、此等の學は亦文字を戯弄する東人に宜しき所とす。有職の學、亦漸やく博洽を街ふの資と爲り、山本、清溪、大炊、御門家の諸大夫に出で、晩に江戸に遊び、制度に通ず、細井、昌阿は其の門に出で、姓氏に精し、荷田、惟徳、御風の義子を以て、

亦家學に名あり、京師には則ち吉田家の士、山田、錦所、藤井、貞幹の門に出で、小野、重賢は蘆門の巨擘たり、又谷口、胤祿あり、皆縉紳家に仕ふる者、堂上には竹屋、光棣あり、皆文政、天保間の人に係る、而して有栖川宮の臣、飯田、忠彦が野史は、文辭の稱すべきにあらざるも、其の獨力四百餘年を網羅せる精力、其の人慷慨忠誠の性と、並びに傳ふべき也、此を國學變移の梗概と爲す。



餘論

學庶人に及ばず
 實力中心の選降
 諸侯の學
 卿大夫の學

三百年の武治階級制を爲し、士庶の間、嚴に鴻溝を劃し、漫りに踰越することを得ず。東照公以來、右文の政、頗る儒術を崇尙すと稱すと雖も、未だ始より此を以て勸て庶民に及ぶと有らざりき。然るに世運の趨く所は、必ずしも制度の局する所に止まること能はず、且つ士人以上に在りても、實力中心の存する所、世を逐て遞降するあるを見る。慶元の間、偃武の勢、僅かに成るや、戰國の風を承けて、侯伯の文學技藝ある者、猶ほ甚だ匿しからず、蒲生氏郷、伊達政宗等、鈴箱の餘緒に出づと雖も、作る所往々誦すべき者あり、細川幽齋父子、木下長嘯の若きは、則ち稱して專家と爲す、小堀遠州の諸技を兼綜せるが若き、亦以て當時の狀を見るべし。寛永以後に及び、學漸やく卿大夫に遷る、是故に土佐の小倉、野中の若き、備前の熊澤の若き、皆身執政の位に在りて、而して學ぶ所之を其の國に行ふことを得、苟くも學術を以て仕を求むる者、皆千石

二千石を望み、未だ嘗て此を以て自ら過ぎたりと爲さざりき、其兵學の徒の若き、往々五千石、一萬石を以て擬せらるゝ者あり、由井正雪、山鹿素行の若き、自ら居る所人の許す所、同じく然らざる、莫し、蓋し學者仕ふれば、則ち卿大夫、以て之を國政に實にするに非らざれば、苟くも仕へざる也。寛文延寶、以て貞享元祿の際に至るまで、此風猶ほ存す。此時に當りて、賢諸侯の學に篤き、備前芳烈公、會津土津公、水府西山公、加賀松雲公の若き、猶ほ之れなきに非ず、然れども、天下侯伯、其の百戰の勞を以て、茅土の封を受けしより、既に皆三四傳せり、深宮の中に生れ、婦人の手に長じ、放恣にして、檢束せらるゝ所なく、蹈倭四周して、壘蔽極めて多し、所謂安本丹と倣り、了せざる者、幾くもなき也。夫れ戰國儉嗇の風に習ふ者、一たび無事の日に際す、入る者餘あり、出づる者途なし、韃靼の始め、大國侯伯が富實を以て、霸府に忌まれしに異しむことなき也、是に於て、屢大役を土木に課され、遂に參觀を常例と定めらる、其の太だ困しまざりし者は、かの百戰の將士、行陣に慣れ、糲食を甘しとせる者、猶ほ存せる日のみ、一再傳の後、驕奢を以て、封を失ひ、淫佚を以て、國を危くせざる者、希れに、其の勤儉にして、精勵なる者、亦往々にして、改封の禍に罹らんことを恐る、故に愚者は自ら孽を作り、

貨權商買
に移る

賢者も亦自ら晦ますの利たるを知る、徳川氏三四世の間、侯伯が奢靡に沈溺するの風、
過むべからざるの勢ありし者、此が爲なり、諸侯自ら用ゐるの才ある者少くして、而
して能者、卿大夫に出づ、學術の變移も亦此の勢と相表裏す、元祿以後、諸侯既に窮し
て、而して貨權商買に移る、幕府も亦五世豊亨の運、大に其の盛美を縦にして、而して
實力漸く細し、功利の臣用ゐられ、貨幣改鑄の議興る、夫れ儒者の經濟を談ずるもの、
大抵農を貴で、而して商を賤しむ、又貨權の治者を離れて、而して商買に歸するを以
て憂と爲さざるなし、故に其の學術の歸宿する所に於けるも、亦下るも、士人以下に
在らしむることを欲せざるは、古今譏者の其の軌を一にする所なり、學術漸やく、卿
大夫を離れて、而して士に歸すれば、學者の仕ふる者も亦士を以て自ら甘せざるを
得ず、徂徠の大才、五百石に過る能はず、春臺は則ち二百石に非ざれば、仕ふべからず
と曰ふ、其の價逾下る、學者既に諸侯卿大夫の厚禮を受る能はざるを思ふ、其學ぶ所
を以て國政に施す能はざるに論なき也、紀平洲の米澤藤山公に於るが若きは、則ち
優曇華の華さくが若き耳、是に於て、學を爲す所以の者、歧して二と爲る、祿仕を求む
る者と、市井に活を求むる者と也、かの市井の儒の大に張りしは、該苑の學の流行と

士の學

祿仕の學
市井の學

戲玩の學

相因縁す、何とあれば、士人以上の學は、其主とする所、猶道を以て自ら任するに在り、
若し夫れ庶民に在ては、たとひ學ぶ所あるも、以て戲玩の一種と爲すに過ぎず、香道
茶式と以て擇ぶ所あるなし、故に文字を弄するの學は、其の就き易き所、徂徠其人は
經世の志なきに非ざるも、聖人の道を説くに、功利の術を以てす、是れ一は我か民種
の特性、實際に着して空理を喜ばざると、一は其人冥々の間、時運に影響せられて自
ら知らざるとの致す所にして、其の徒益文辭を誇張するに及で、市井の儒、士民を雜
へて、而して授くる者、皆其の矩矱に従て、而して生を爲し易きを便とせり、抑も元祿
の際、西に在りて仁齋已に身を買人に起す、仁齋の生を爲すや、以て售れんことを買
人に求めしに非ず、而して其の身を起す所以と、其の學の理を斥けて、氣を主とする、
漸やく功利の風を開くと、皆偶然に非ざるが若き者あり、此も亦由あり、京儒が口を
講説に糊して、祿仕する者少きは、從來皆然り、講筵に參する者、士庶に擇ぶなければ、
即ち其の松永朝山輩、天子の禮遇を蒙り、山崎の徒、貧困に甘じて、道を行ふの意氣を
喪はざるの外、大抵流れて、徇俗の弊に入らざるを得ず、仁齋の人と爲り、俗に媚ぶる
者に非ず、益軒、東涯の博物亦必ずしも買人に售るを求むるに非ざるも、一世の趨く

東西邊に
及ぶ

水府修史
問道の故
に非ず

所は、則ち免るゝ能はず。此風京師より開けて、而して江戸浪華に大成せり。若し刻實に論ずれば、水府の修史を以て文士を徵するが若き、已に問道の故に非ず。山崎の徒、此に趨くを以て師弟の義を相絶つ者あるに至る。此も亦該國の前に在りて、文士一派の泉源を開ける者なり。然るに江戸の文辭派、方さに滔天の勢あるに當り、浪華懷徳書院の興る、尙ほ前輩守道の風ある者は、其の晩く開けて、而して激する所あるに由る。中井氏、竹山、履軒より、已に其の父の風に異なる者あり。同時諸儒に至りては、皆買人に售るゝの學を勤むるのみ。白石の仕途、一たび大用の機を得、其人亦禮文を好む。故に學士人に在るの時に際すと雖も、猶ほ卿大夫氣象を失はず。幕府八世有徳將軍の時に及び、將軍已に有司の政を好み、武健の風を愛し、儒士經世の空談を喜ばず。九世十世、庸暗相踵ぎ、儒人益々用ゐられず、而して市井の學益々盛なり。白川樂翁の新政は、當時一息纒かに存せる士人の學を復興し、而して市井の學を禁壓せんとせる者、其の成就する所の績と、其の東西の輕重を爲せる所とは、前已に之を論ず。其の後五十年間、時に一昂一低あり、大御所時代に繼たれて、而して水越時代に擒せらる。要するに寛政新政の餘波に過ぎざる也。

八世以後

儒學は竟
に戲玩に
適せず

夫れ市井の學、彼れが如く其れ盛に、以て實力買人に存する時勢に順應すと雖も、儒學の以て買人の戲玩に供するに便せらざるは、竟に易ふべからず。故に修辭考據、以て玩弄學術の漸やく盛なるを致せるも、儒士の譏、士庶の別を泯滅するを得る者あり。而して其の經世の志ある者は、毎にかの市井の學を抑へて、之を士人以上に局らんと欲するの勢あること。白川氏、水越氏等の若し、武治の政を革めて、王政の古に復するの日、其の一革變以往、士族の勢力大に衰頹に就き、買人の跋扈益々甚しきを見るを以てす。かの革變の功は、則ち儒籍國學に養はれし最下級の士に成りて、竟に買人の手に成らざりき。故に市井の學は、經世を主とせる儒學とは、其の盛衰の勢毎に相反す。天下苟くも事あれば、則ち市井玩物の學熾す、而して無事恬安の日、買人が其の利權を占めて、富盛を極むるに當りては、其の戲玩に供する所以、固より儒學が派生せる修辭考據を以て足れりとする。こと能はず。國學ありと雖も、其の神道者流は、儒の守道經世の徒の類あり、其の詠歌者流は、儒の文辭派の類なり、其の有職、古の學は、儒の攷據派の類なり。買人は、士流と異なり、禮法檢束に堪ふる能はず、而して其の富盛は、則ち益々其の淫靡の嗜好を長じ、以て之に應ずる所以の者、必ず新た

國學し亦
儒學の類

上行の學
下行の學

に生ぜざる能はざるを致す、狹邪遊倡、劇部歌曲の盛なる、奢華輕薄、淫奔情死の行はる、斯に戯曲脚本稗官小説の作出で、以て之を寫すなかるべからず。故に三百年の文學、上行する者あり、儒學、國學の若き是なり、下行する者あり、戯作の若き是なり、上下に通する者あり、美術、工藝の若き是なり、而して宗教は之を前代に視るに、極めて力なきの時とすと雖も、其の世運と相關係する者、亦度外に付すべからず。夫れ上行する者は、立制を以て主と爲し、面して世運の趨く所に放任することを欲せず、若し此を以て順勢と爲さば、則ち下行する者の専ら世態人情、自然の趨勢に率ひ、動もすれば立制の旨と相撞突するは、以て逆勢と爲すべき歟、而して上下に通ずる者は、亦かの順逆の勢と相感じて、各々時に變移あり、此の數者を備論するに非ざれば、三百年文運、未だ其の全觀を盡すと謂ふべからざる也。今已に略ぼ其の上行する者を論次す、當に次で而して論すべきは、其れ下行する者か、其れ上下に通ずる者か、嘗て試みに論じて曰へらく、

蓋し徳川氏の府を江戸に開きしより、凡そ百餘年、元祿寶永正徳の間に至るまでは、覇都の繁華、猶京都浪華に過ぐる能はず、其の文化の若きも、東に在て林家一門、

順勢逆勢

庶民文學

學柄を獨占せるの日、西には則ち山崎伊藤諸人盛に門戸を張り、彬々として多士なりき、水戸府、加賀氏が人材を收納せしが若きは、特に入作に出で、自然に非ざる者あり、國學に於ては、隱家茂暉、覺東なき古調を口吟み、季吟湖春父子、召されて東下するの際、長流契沖、既に復古の氣焔を西に揚げたり、其の庶民に流通する者に至ては、更に甚しき者あり、西鶴、巢林、之を浪華に創め、自笑、其磧、之を京都に繼ぐに當りて、東都は僅かに岡清兵衛の金平物語、近藤清春の赤本を生出せしに過ぎざりき、然るに儒學は享保以後、國學は寶曆以後、庶民文學は明和安永以後に至り、江府の繁華、方さに成熟せるの期と相先後して、文物盡く東に徙り、天明寛政文化文政の際に於て、其の燦爛たる偉觀を極めたり、是時に當り、天下方に江府を以て風尚の標準とし、輕靡なる文學の潮流、華奢なる習俗の嗜好は、一に鐘を江戸に取し、留守居の豪華、札差の侈靡、始めに芙蓉社、後に江湖社の詩文、京傳、一九、馬琴、種彦の戯作、一代の嚮ふ所は、實に此等に在り、列藩士庶、大都の風尚に倣ふに後るゝを耻とし、讀書の士、江戸に學ばざれば、以て文士に齒列するを得ず、僅かに京阪の儒士と、崎嶇傍近の學者と、稍々其の下風に趨らざるありしのみ。

又嘗て書を論ずる中に言ふことあり、

徳川氏の文物は岐して兩派と爲り、一は上行し、一は下行す、下行する者は、淨瑠璃、歌舞伎、洒落本、草艸紙、讀本と爲り、上行する者は、儒學の流行、國學の復興となり、俳諧、狂歌は上下の間に出入す、畫風の變遷を觀るに、又其の跡を同じうする者あり、又兵衛、一蝶、師宣、祐信等は、其の下行の運に應じ、土佐、狩野の筆より出で、而して題目を當代の風俗に取る、是れ已に一變態に屬す、沈詮、伊海等の舶客、大雅、蕪村等の雅人、其の上行の運に乗じ、南畫の風格を傳へて、新たに海外の趣味を播す、光悅、宗達、光琳等は別格を創意して、更に一幟を建てたり、而して大勢遂に圓山氏に定まれば、是れ猶ほ土佐氏が中世の畫柄を握りしがごとく、爾來百年、百家並び興ると雖も、能く與に盛を競ふことなし、亦實に徳川氏文物が寶曆より以て寛政に至るの際に於て一變し、該園修辭は、八家宋詩と爲り、縣居の古調は、桂園の新派と爲り、淨瑠璃、八文字、屋本は、洒落本、草艸紙と爲り、荒事、丹前は、所作事世話物と爲り、土佐江戸節は、豊後節と爲るの時會に靡り、應舉氏卓出の材を以て、寫生の新派を開き、當時の耳目を一洗せし功なり。

是れ實に讀て未だ詳なり、又反て人の視聽を惑はず者あらん、爾ふ異日更に此論を續で、而して其大綱を提擧するを待たんか。





ふみ、れはれもせぬゆめのこゝちして

うつゝにしらぬとも、ありけり

尙 忠

行未はわれをしのふひさやあらん

むかしなれもふこゝろならひに

俊 成

近世文學史論終

附 録

地勢臆説

地勢の人文と相關るや、或は地勢因たり、而して人文果たり、或は人文因たり、而して地勢果たり、小にしては都邑の盛衰を致し、大にしては邦國の興廢を致す、民物の豊歉、文化の隆汚、其の往に徴して而して、其の來を推すに、龜卜數計よりも著き者ある也。神武の都を大和に奠め給ふや、路内海に緣る、其後版圖、西は即ち遠く韓地に跨るに至りて、舟船往來年々絶えず、文化の輸入、以て近畿の風氣漸やく開くるを致す、東は即ち經略已に奥越に及ぶも、重山層嶺、東漸の文化を梗し、平城の文物、蔚乎として其れ盛なるに至りて、王化猶ほ未だ邊陲に洩きこと能はざりき、蓋し此際以て風氣遷移の關鍵とする歟、西は已に内附の韓地を棄て、而して内漸くに成熟に向ふの文明を以て、唐土の輸來、又歲月新を加ふ、近畿掌犬の地、以て之を受容するに足らず、是に

地勢と人

本邦の地勢と人文

於て文化、威力と俱に漸やくにして東に流溢す。阪將軍邊功を建て、後、夷種の叛亂、一たび之を元慶の際に見ると雖も、小野春風に秦王郭令公の威望あるにあらざして、單騎賊巢に投じ、以て之を定むるに足る。王化の光被、勢已に成れるを見るべし。然れども東徼の領土、已に京を距ること二千里に及ひ、而して西は則ち筑紫を極めて其半に過ぎ、尾大不振の勢も亦此より萌す。故に西海海賊の患を絶たざるも、隨て起れば隨て滅し、剿誅毎々且夕にして辨ず。東國は則ち天慶の將門、已に天下を擾動するに足り、其の敗るゝも亦下野押領使の手に斃れて、征東將軍の誅に死せず。前九年の戰、清原氏の援あらずんば、源將軍父子を以てするも、之を奈何ともすること無からんとせし也。武衡家衡何物ぞ、能く八幡太郎を支へて三年なるとを得。但だ奥羽美地と雖も、其の太々僻在するを以て、亦關西を控制するに足らざるは、平泉の繁華をして、徒らに衣川と共に水逝せしめし所以、其れ唯關東か、地形雄偉、霸圖を建つるに足る。保元平治の亂を経て、平安の王氣、頓に衰頹を致し、而して鎌倉山の雄風、海内草の如く偃せる所以なり。畿内は帝王の居する所たるを以て、往々、猶群瞻視の嚮ふ所たりと雖も、北條倍臣を以て源氏の故地に據り、源氏の故業を承くる、室町氏の關

地氣の地

東を得て興り、關東を失て衰ふる。徳川氏の江戸三百年の昌榮を致せる、毎々東強うして西弱きは、大局已に定まる。小田原氏の獨り豊公に滅さるゝは、人物の懸絶と、創業守成の勢を異にするに由るのみ。江戸の中葉よりして、京阪の人文、盡く關東に移り、以て明治維新に及て、北方の經畧、更に宏謀を増し、而して神器遂に關東に奠まれり。

此理を以て之を坤輿大勢の遷移に視るに、之くとして當らざるなし。儒者鹽谷世弘嘗て地氣の説あり、論空疎に近きも、亦髣髴を得る者也。是より先、清人趙翼、已に其の國勢に視て地氣の變を論せ、曰く、

地氣之盛衰、久則必變。唐開元天寶間、地氣自西北轉東北之大變局也。秦中自古爲帝王州。周秦西漢、遞都之。苻秦姚秦西魏後周、相間割據。隋文帝遷都於龍首山下、距故城僅二十餘里。仍秦地也。自是混一天下、成大一統。唐因之。至開元天寶、而長安之盛極矣。盛極必變。理固然也。是時地氣將自西趨東北。故突生安史。以兆其端。自後河朔三鎮、名雖屬唐、僅同化外。羈縻不復能臂指相使。蓋東北之氣將興、西方之氣已不能包舉而收攝之也。東北之氣始興而未盛、故雖不爲西所制、尙不能制西。西之氣漸衰而未竭、故雖

不能制東北。尙不爲東北所制。而無如氣已日薄。一日帝居遂不能安。於是元宗避祿山。有成都之行。代宗避吐蕃。有陝州之行。德宗避涇師。有奉天梁洋之行。地之艱難不安。知氣之消耗漸散。迨僖宗走成都。走興元。走鳳翔。昭宗走華州。又被劫於鳳翔。被遷於洛。而長安自此夷爲郡縣矣。當長安夷爲郡縣之時。契丹安巴堅已起于遼。此正地氣自西趨東北之真消息。特以氣雖東北趨。而尙未盡結。故僅有幽薊。而不能統一中原。而氣之東北趨者。則有洛陽汴梁。爲之延遲潛引。如堪輿家所謂過峽者。至一二百年。而東北之氣積而益固。於是金源遂有天下之半。元明遂有天下之全。至我朝。不惟有天下之全。且又擴西北塞外數万里。皆控制于東北。此王氣全結于東北之明證也。而抑知轉移關鍵。乃在開元天寶時哉。

頗る斬新の論と爲す。鹽谷登に此に淵源して、而して之を坤輿に推せるか、今や支那存亡將さに坤輿一大問題たらんとす、而して其の地勢の利用、實に之をして存せしめ、之をして亡せしむるに足る、趙氏の言、現勢に拘はりて未だ盡さざる者あれば、則ち更に其の案を覆して、來日の形勢を推想す、是れ亦文明の大勢に着眼する者の必す無用とせざる所也。

趙氏の言
未だ盡さ

長安の前
洛あり

趙氏獨り長安を論じ、而して長安の前、又洛あるを説かず、禹貢九州、其の開化の源泉、冀豫兩州の間より發す、蓋し黄河の利に資ると云ふ、堯平陽に都し、舜蒲阪に都し、禹安邑に都す、皆冀州の地、殷亳に都す、豫州の地あり、水患を避けて、相に遷り、耿に遷り、亳に復歸す、要するに二州を出でず、周は西鄴鎬に興ると雖も、其天下の中なるを以て洛に營み、諸侯を朝會す、二州の生ずる所、文物郁々乎として、大成を告げたり、後世稱して四戰の地、徳あれば興り、徳を失へば亡び易しと謂ふ、亦地勢の中たるのみならず、併せて人文の中たればなり、春秋の時に及んで、齊魯の文物、永く澤を後昆に流すと雖も、是れ寧ろ風化晚く開けて、周道を保存せるが爲のみ、其の巧詐早く進む者は、則ち晋の地を最とす、五伯の最も長く、其の業を保てる者も、亦晋なり、戰國の際、縦横の策を抱き、諸雄の間に談説して、人國の興衰を唇舌に弄せし者、皆衛晋の士たり、齊魯は則ち淳于の滑稽、孟軻の仁義、魯連の解紛、猶ほ忠孝の俗を存す、蓋し此時にして二州の地氣、索き、人力衰へたり、西漢の際、潁川南陽、人材輩出し、東漢魏晋、再び此に都すと雖も、猶ほ我が王室中ころ衰へて、後、室町氏復た平安に居り、豊臣氏大阪に城くが若きのみ、其の繁華は以て貨利通賈の要衝たるべきも、復た天下を控制す

長安の地
氣洛に代
り興る

燕京は人
文の中に
非ず
燕京論

るの根據たる能はず、拓跋魏復た此に居り、宋の汴に都するか若き、豈に更に言ふに
足らんや。

長安の地氣は、則ち洛陽に代りて、雍州の人力を興す者なり、其の西周以來、以て唐に
及び、極盛の運に達せしは、趙氏言ふ所の如し、李世民實に隴西に起る、其の土着の族
たること、始めの姬氏と同じき也、趙氏は唐末衰殘、以て其の王氣此に歇むと爲せど
も、趙宋の起るや、藝祖實に長安に都して形勝に據るに志あり、太宗の諫に因り、明ら
かに後患を知りて而かも汴に都せり、此時長安の地氣、未だ全く索きたりと謂ふべ
からざる也、其の燕京の若きは、趙氏以て東北の氣積で而して生ずる所と爲せども、
是れ特に地勢然る者あり、其人文に至りては、未だ然る能はざる也、夫れ燕京の建つ
は遂に始まり、而して金、元、明清、皆此に都す、然るに明の顧祖禹は則ち言ふあり、
遼起于臨潢、南有燕雲、常慮中原之復敗之也、故舉國以爭之、置南京于燕、西京於大同、
以爲久假不歸之計、女直自會寧而西、擅有中夏、仍遼之舊、建爲都邑、內固根本、外臨河
濟、亦其所也、蒙古自和林而南、混一區宇、其創起之地、僻在西北、而仍都燕京者、蓋以開
平近在漠南、而幽燕與開平形提相屬、居表裏之間、爲維繫之勢、由西北而臨東南、燕京

且都會矣。

朱明の此に居するは、燕棧位を纂ふの後に於てし、太祖の舊に非ず、顧氏の若きは其
の失計たるを論じ、

以燕都僻處一隅、關塞之防、日不暇給、卒旅奔命、輓輸懸遠、脫外滋肩背之憂、內啓門庭
之寇、左支右吾、倉皇四顧、待徵兵於四方、恐救未至、而國先亡也、撤關門之勢、以爲內援
之師、又恐軍未離、而險先失也。

と曰ふに至る、故に所謂東北の氣積むと云ふ者、若しかの權力の托する所、形勝を言
は、則ち可なり、若し其の人文を以てすれば、則ち嚮往集中する所、別に在る有る也、
明祖の起るや、馮國用策を献じて曰く、金陵は龍蟠虎踞、帝王の都なり、先づ鼎を此に定
めんと、江南の地氣蔚興、一日の故に非ざる也、周の時楚子最も先に王を僭す、郢の地
の文物、戦國の時、優に上國に抗衡す、學は則ち老莊、辭は則ち屈宋、其の吳に敗るゝ者、
猶ほ晋地の秦に侵さるゝがごとし、洛陽の文化、長安を援て而して之を起すを知ら
ば、以て吳の風氣、楚に由りて而して開くるを知るべし、伍員か怨を本國に報ずる、實
に楚人を以て而して吳國を用ゐたり、衛鞅、張儀の徒、西の方秦の用を爲すも、情相似

江南の地
氣

八
る也。顧氏曰く、越の故傲せば、吳且さに天下に覇たらんとす。項羽江東の子弟を卒
みて、而して中原に雄長し、虎狼の秦を亡す。山東の豪傑、能く與に先たるなし。吳楚難
に首として、西漢殆ど危く、三國に及では、三分の天下、吳長江を劃して、中原の外に一
帝國を建てたり、其の都は建康、是れ實に六朝の繁華を極盡せし所の處、此時に當り
て、神州陸沈、胡馬に蹂躪せられ、三代漢魏の文物、盡く遷りて、而して南に歸す、故に隋
唐以後、帝都此に在らずと雖も、其の人文未だ嘗て少しくも衰へず、建炎南渡、又唐
宋の文物を將來して、化澤深潤、愈々深厚を致し、以て明氏の起るに及て、擧て而して
此に都せしむるに至れる也。成祖北遷の後、猶ほ南京の官職を置き、改めて郡縣と爲
さず、王氣の結集する所日に固きを見はす、所以に非ざらんや。吳楚の方言、古より已
に莊嶽の音に異なり、惟に今日南北官話の差あるのみならず、其の人種相好も亦復
同じからず、遂に禪家書家をして南北の派別あらしめ、閩姚の學をして漢唐訓詁と
趣向を異にせしむるを致す、平原千里、長江の天塹も、輿袞の運を遮ざる能はず、故に屢
々分れて、而して屢々合すと雖も、大勢の趨く所、遂に支ふべからず、江浙四近、方に天
下文物の中と爲りて、狀元進士、風流詞客、常々此間に出て、陝西河南、寥々として聞ゆ

計東が勢
南論

るなく、乃ち近時の若き直隸の地に填つる將相、盡く吳楚徐淮の材なり、太平王か十
數省の地を擾すや、亦金陵に據有すると十餘年、偶然に非ざる耳、計東が籌南論に曰

兵以衛民、而川浙吳楚之兵、爲天下勁兵處、食以養兵、而東南財賦、自唐宋以來、無不倍
出於西北。昔項籍以江東子弟橫行而西、李陵以荆楚勁卒、轉鬪塞北、及我明戚繼光、必
須以義烏三千人、立威薊鎮、頃四川石柱司秦良玉、以一婦人將三千人、斬敵兵萬餘、則
南兵之強可知也。東南財賦之饒、見諸全史者、自唐肅宗始、至汴梁而三倍其數、至南宋
而加增數十倍。

筆廣が南
北強弱論

章濂が南北強弱を總論するや、亦言ふあり、西北の兵、持久に便にして、速戰に便なら
ず、東南の兵、亟かに戰ふに利にして、持久に利ならず、張良、賈充、鄒家、の徒、皆南兵、剽銳
の言あり、而して北の勝を制する、守成不戰の功を以てする者、蓋し其鋒を畏れて、而
して敢て争ふこと、莫き也。古より惟だ北人の南を畏るゝを聞く、未だ南人の北を憚
かるを聞かずと、顧祖禹曰く、

顧氏が揚
州形勝論

揚州富庶常甲天下、自唐及五季、稱爲揚一益二、今魚鹽穀粟、布帛絲絮之饒、商賈百工

披蕩之衆。及陂塘隄堰。畊屯種植之宜。千古未有改也。用以聚糗糧。厚資儲。則奔走天下。不患無具矣。

且つ夫れ北直の地瘠薄。其の民の食。東南の轉輸に須たざれば。則ち給足することを得ず。故に計東。明祖北伐の略を論じて云ふ。

既據金陵十六年。截淮而取之。則東南之財賦。分毫不得入北。而元人坐困。故一旦北討。而有取無戰。

滿州の將來

見るべし。趙氏が現局に拘はりて。東南を畧して。而して東北王氣の積聚を説く。殊に皮相見たることを。但だ滿州の地。頗る膏腴と稱す。其の百年の後。地方の開發。未だ必ずしも期し難からず。則ち燕京か此の新輿の土を負て。而して南に俯すや。王氣の旺盛。此に於て其の實を得。以て南方の文物に頓頭するに至るも。亦未だ知るべからず。然れども。滿州の河水。其の大なる者は。南に背て。而して北に嚮ふ。其の地力。人文。果して燕京に集中すると否と。猶ほ鐵路交通の後。待て之を論せざるべからざる者あり。且つ其の風化。漸やくに開け。地氣益々東北に傾かば。燕京の力。以て南方を控制すべからざるや。益甚しからん。支那の勢力。其れ竟に兩分せんか。

支那勢力の兩分

地氣の東

抑も是れ特に沿海の地を以て之を言ふのみ。中世以來。地氣漸やくにして。東偏し。南北京皆海に逼近す。其の勢極まるや。亦竟に西方を制するの力。強弩の末たるを免がれざるに至らん。顧祖禹は固より燕京帝都の非を主とする者。而かも其の金陵を論ずる亦云ふ。東南に局促して。中に宅し。大を圖るの業に非ざと。三國の時。吳の力。蜀を侵すこと能はざる。豈に此に由らずや。夫の蜀の地も亦輕視すべからざる者あり。地理を誌す者。謂ふ。重山疊嶺。深溪大川。境內を環繞し。自から相藩籬し。古より險塞と稱す。周鍾以て數千里石穴なりと爲す。故に云く。蜀民外寇を苦まず。然るに姦雄内に作れば。懸車東馬。勢相及はず。猝かに定め難き者あり。是れ適に其の重隘たる所以なりと。西漢の時。相如子雲以下。己に人文の觀るべきあり。陳壽。子昂。眉山の蘇。皆中原を動かせり。王莽の末。公孫述。此に據りて。一方に雄視す。諸葛又此に據りて。炎漢の祚を延べたり。天下亂る。毎に僭偽の主。必起る。晋の惠帝以後。李特。此に據り。義熙の初。譙縱の據る所と爲り。唐末には。王建あり。既にして。又孟知祥あり。元末には。明玉珍あり。其の太だ僻在するを以て。中原一統すれば。輒ち并吞せらるるを免かれずと。雖も。地氣太だ東偏すると。今日の勢の若きに及では。蜀中復た之が控制を受けざるに至ら

蜀地の形

んと必せり、况んや錦官城の繁華は、玉帛金縷、技作工巧、而して中原の兵亂に罹ること少く、別に一區を爲すに於てをや。意ふに諸葛の益州を治するや、瘴癘を侵して南中を夷らぐ、若し四川の饒沃、連ぬるに黔滇の險固を以てし、而して之を濱海の地に通せば、蓋し亦居然たる一帝王國なり。清初三藩の叛く、吳三桂の老悖を以てするも、猶ほ雲南の地を以て、天下を援助するに足る、西南の地氣、亦決して侮るべからず、佛人の朶頤、豈に以なしとせんや。

更に一區あり、兩廣是れなり。嶺南の地、風氣最も晚く開く、而かも其の西洋と交通するや、其の文化に感染すること最も早し、其の人、伶俐、交易に巧に、支那人中に在りて、別に一生面を開く者、地理家、廣東を謂ふ、地、嶺海に介し、北は以て吳楚に臨むに足り、東は以て甌閩を制すべく、西交迤の嚙吭を扼し、南黎夷の門戸を控ふ、廣州一郡、屹として中樞たり、山川綿邈、環拱千里、都會と爲すに足ると、故に昔は偏隅たり、今は樂土たり、其の廣西は、則ち風躡氣習、廣東と異なり、猛獠多くして、而して編氓少し、要するに稍偏促を免かれざるも、其の山海の利、土産の饒、番貨の聚、亦中原に背て、而して自ら治むるに足る者あり、而して今は、即ち英人實に其の咽喉を扼せり。若し夫れ陝西

兩廣の形

より西北、廣漠の地、長安すら既に其の盛を復すべからざれば、其の王氣の興隆、今日の論せるを要せざる所たる也。

嗚呼、支那の存亡、方さに坤輿の一大問題たれば、則ち其分合の形勢、地方人文の中たる處所、往に徴し來を推して、之を今日に概論し、以て文明の大勢轉移の方嚮を致ふるは、必ずしも沒趣味の事にあらざるを知る、願はくば更に同好の士と之を詳論せん。
(明治二十七年十一月稿、二十九年十二月訂正)

日本の天職と學者

日本が將さに大に命せらるゝ所あらんとするや、識者久しく之を審かにす。

夫れ神聖業を創め統を垂る、宏猷深謀、妄漫臆測を逞しうすべからざるのみ、西蕃交通の事、史に見えしより、茲に二千年、神功征韓の後、未だ百年に滿たず、王仁論語千字文を獻してより、十有三年のみ、而して已に高麗の表文を毀つ、稚郎子あり、而して

我邦文物の變遷

後三百年、乃ち一海島の主を以て、三百年亂離の日没處を統一して、意滿ち心驕れる
 隋煬帝書を贈り、抗禮相下らざるの厥、戸皇子あり、其の選に係る憲法、文字整然見る
 べく、冠位の階、典禮の基を啓けり、而して後五十年、弘文始めて詩詞の作あり、是より
 して詩は即ち懷風藻、經國、凌雲諸集の載する所、漢魏の遺響あり、文は則ち諸々詔勅
 勅願の文、太安萬侶が古事記序等、駢體の妙域に臻る者あり、既に學んで而して異邦
 の辭に嫻ふ、豈に其國語を以て自ら述る能はざらんや、是故に萬葉の歌たる、祝詞宣
 命の文たる、以て三百篇尙書と光を争ふべし。平安の初、中興の英主、又盛に唐の文物
 に資り、文儒輩出し、而して其の延喜以後は則ち守文の世、八代集の歌、物語草紙の文、
 國語の英華を揚げたり。此時に當り、疆域大に東北に拓けて、而して化澤漸く京畿に
 竭きんとす、是に於て鎌倉府の勃興、乃ち金槐の雄風を生ず、其後干戈相躡き、文運中
 ころ細すと雖も、割據の未や、又群雄競うて文藝の僧徒を延き、慶元偃武の後に至り
 ては、蜀府頗る右文の闔に傾きしより、列藩規倣、唯た後れんとを之れ恐れ、儒師の聘
 禮、一種流行の觀あり、其の中葉以後は、獨立の識力ある者、徃々門戸を張りて仕進を
 求めず、以て所謂海内文章落布衣を致し、國語國學の復興、又之か爲めに激せられ、國

家性格の發揮、頗る爲めに面目を一新し、かの小説戯曲の流布の如きは、文字ありし
 より來た、久しく上流に沈滞せし文學をして、一般社會に浹洽せしめたり。蓋し王代
 の隆治は、唐の文物を受けて、而して之を融化し、江戸の盛世は、宋明の學術を傳へて、
 而して之を含咀し、皆因て以て國家特色の文華を搜起し、各其美觀を極めたり。其教
 義の世道人心を綱紀する者、王代は則ち佛教ありて、傳來十宗の外、法然の専修念佛、
 日蓮の題目、新たに機軸を出し、江都は則ち儒學ありて、尊王攘夷の論、忠孝仁義の談、
 自ら王政中興の基を成し、其の美術の國民の品位を擧うする者、寧樂の彫像、印度に
 非ず、希臘に非ず、隋唐に非ず、清秀温雅、別に所長を見し、巨勢氏、土佐氏の唐畫を變し、
 狩野氏、雲谷氏の宋元畫を承くる、光琳氏、圓山氏の新手法を開ける、髹漆の東山に盛
 んに、陶磁の徳川に進める、乃ち伎樂雅樂の隋唐の舊を存して、寧樂平安の間、金聲し
 て、而して之を玉振せる、平語謠曲の足利氏に出て、小唄淨瑠璃の徳川氏に發達せ
 るに至るまで、衆伎雜流、凡そ所謂開明せる社會の當さに有るべき所、殆んど有らざ
 ることなし。

かの國家社會替るく、興り交々衰ふるの跡を觀るに、其の襟狂華味の世よりして、

一たび進んで文化開明の域に入るや、則ち衰兆此に萌し、漸くに漸滅に就かざることなし。希臘のペリクレスの時に盛なる、後に歴山王ありと曰ふと雖も、固より純正の希臘人に非ず、其の事業又攻伐に止まる、羅馬の神聖帝國一たび破壊して、意大利の人力、復た歐洲文明の中心たるに足らず、阿輸迦王佛教の保護者たりし後、印度再び轉輪王を出さず、白露、墨西哥の如きは、其の生熟盛衰、自ら一地疆に在りて一元を終始して、全く壞空に期せり。乃ち支那に至りても、三代の兩漢と唐宋明清と、文化一たび斷えて而して再び盛んに、三たび興るに似たり。と雖も、河洛の開化は關中の文明にあらず、江北の休治は江南の人文にあらず、代る代る、相推移して、必ずしも復た興らざる也。唯た江南の人文、久ふして益隆に、治者世を更ふるも、曾て之と盛衰せず、意ふに其れ民種の潜勢力厚き者、一再文明の域を経て而して發揮し了せざる也。かの歐洲の如きは、其文明の域に入りしより四五百年のみ、其成就する所を以て、之を古來有る所文明諸邦に較視するに、固より大に誇るに足るものあり、然りと雖も地勢時運、天幸の存するあり、未だ此を以て其潜勢力の厚薄を定むべからず、若し近時其の盛運既に窮まり、弊患既に萌し、復た支持し難きに至りては、彼の間の明者、自ら

江南の人文

之を見る者あり、其索焉に竟らんこと蓋し幾くもなし、松柏凋むに後る、國家社會も亦潜勢力最も厚き者最も後に存す、現在の支那、帝系は瀋陽の胡種に出つと雖も、其實權は多く江岸人に歸す、歐人が來日に於て支那人の勃興に寒心する者、故なしとせず。

二千年の
文化の
歴史

江南人の來日に興起せんこと、無稽の想像に非せとせば、かの二千年、二九たび至盛の文化を開いて、後者は寧ろ前者より美に、而して其人力綽々然として餘裕ある民族、是の如きは尤も當さに國家壽數に於て春秋鼎盛の域に在る者と謂ふべからざらんや。

種弱民族

牛馬は鼠鼯を餌せず、獅虎は豈菴を茹はせ、人は之を兼ぬと雖も、猶素食を愛する者は、脂多きの物を取れば必ず嘔し、肉食を好む者、單に菜蔬を供せらるれば必ず瘧、唯た脾胃強壯にして消化力盛なる者、此を取り彼を茹ひ、未だ嘗て其の體を傷らざるなり、然れども是れ特に少壯にして嗜好未だ定まらざるの際のみ、老境一たび至れば、則ち嗜好偏に定まり、或は其の以て元氣を損すべきものにして、而して竟に絶つこと能はず、或は其の以て滋養に資くべきものにして、而して竟に取ること欲せず。

民族の持
長相易ぶ
る能はず

支那と歐
土と度々
なる耳

ず、漸く衰殺に之て、克く之を支ふることなし。國家社會も亦之に類する者あり、其最も
も稚弱にして單純なるものに至りては、一たび之に壯強者の食を與ふれば、則ち食
傷す、布哇か白人と交通してより僅かに數十年にして、其生口を減すること十の八
九なる、北海道アイヌ人が方さに漸く滅盡に赴くか若き、皆是れ、蓋し社交の複雑、思
慮の紛錯、壯強國民の容與として處する所、稚弱民種堪へざるなり、疾疫の劇、魔醉劑
喫飲の毒、壯強國民の慣れて而して中てられざる者、稚弱民種堪へざるなり、乃ち壯
強の國民と雖も、其性格の宜しき所、各相同しからざれば、則ち近日歐土諸國、鳧脛鶴
脛、長短自ら守りて、相易ふること能はず、亦猶ほ希臘、大の國にありて、雅典の華美、
斯巴爾達の健朴、風尙相反し、晏嬰が魯人、儒雅の習、齊國儉嗇の風を變せんことを恐
れて、孔子を拒むか如き者あり、且つ其の全土風氣、漸やく叔季に屬し、其の自ら成就
せる物質的文明に矜夸するの餘、其異種の文明に於て、概して斥けて未開の習とな
し、取りて之を咀嚼すること少なく、偶々取ることあれば、則ち亦其澆漓の思想に近
似せる古印度の思想の若きに過ぎず、其の老境將さに至らんとして、嗜好の偏傾日
に甚しきの状見るべし。かの支那の自尊にして、頑固なる如きは、特に歐土と度に於

我邦文明
の消化力

人進文明
の大任時
を以て命
せらる

て差あるのみ、性異なるに非ざる也。夫我邦に至りては、唐と西域との開化を咀嚼し
て、王代の盛あり、朱明の開化を咀嚼して、江都の盛あり、而して啖與未だ滅せず、江戸
の中葉よりして、密障蔽の隙、纒かに歐土の珍膳を窺うて、早く己に垂涎の思あり、一
旦禁弛ぶや、大に饕餮を縱にし、而かも其食傷の患あらんとするに際して、又國粹主
義の論ありて、節制滋養の度を過らしめず、彼れ將さに其消化力を節用して、歐土有
る所精汁、噴收して盡さんとす、脾胃の強壯斯の如く、曾て老衰の態なし、其の體力行
々將さに軀骸の外に溢れんとすれば、則ち將た何くにか之を洩さん。
將さに重きを負はしめんとすれば、則ち牛を命ず、將さに疾きを争はんとすれば、則
ち馬を命ず、鼎を扛くる鳥獲に須つことあり、禽を射る養由基に須つことあり、かの
人道と文明とを生民に光被せしむる、豈に健強國民に須つこと莫からんや。人道の
文明と、生民以て一日も離るべからず、故にかの國民に命すること、世々にして其任
に堪ふる者を選て而して之に命せざるなし。天の歴數爾の躬にあり、尤に其の中を
執れどは、堯の以て舜に命し、舜の以て禹に命する所、亦未だ嘗てかの大命に慎しむ
所以に非ずんば、あらず、然れども其の誤りて予一人の事と爲すや、則ち放伐の不徳

を犯すを免れず。夫れ河洛の澤盡きて、而して關内の化盛んに、北方の文物枯れて、而して南方の人文榮ふ。亦時を以て而して命せらるゝ所あるなり。埃及、亞西利亞、印度、波斯、菲尼斯亞、希臘、羅馬、相踵て遞に起る。亦各時を以て而して命せらる。彼れ皆其の時、に於て、人道と文明との宣布に最も力あるべき者、而して又其の跡に於て、各克く其任を盡せる者あるを見る。文明の中心、時と移動する所以の者、其由此に存す。今又將さに大に移らんとす。識者は實に久しく此の間の肯綮を了知して、我の將さに大に命せらるゝ所あらんとするを審にする也。

殷は夏の禮に因り、周は殷の禮に因り、而して損益する所あり。夷狄殘暴の侵襲を被るにあらざるよりは、大抵後に出る者漸くにして、整美に趨く。故に周は二代に鑑みて、郁々乎として文なることを得。三代の所謂禮は、後世の制度法令に同じ。唐の制度は隋に因り、又實に宇文周に原す。其の祖孝孫、か雅樂を定むるや、梁陳の音は吳楚多、周齊の音は胡夷多きを以て、古聲を考へて、唐の雅樂を作ると云ふ。亦因習する所あるを見る也。希臘哲學の祖は多く埃及、菲尼斯亞の間に學び、羅馬の學者、制法家、概ね希臘に遊學す。唐の文明は、半ば西域、印度の傳來に係る。南北の際よりして、渡天の

文明中心
前後の因習

特色得失
相代る

僧、西來の僧、項背相望む者、以て之を致すこと有るなり。此を以て之を觀るに、文明中心の移動するや、後の中心、必ず前の中心に因ることあり、而して損益する所あり。前者の特色、或は失ふは、後者の特色の新たに之に代る所以、而して各其時に宜しうす。以て人道と文明との系統を萬世に維持す。譬へば、猶ほ商那和修が龍奮迅定、優婆塞多か曉了すること能はざる所、如來の三昧は諸の辟支佛其名を識らず、緣覺の三昧、一切聲聞、解了すること能はず、大目犍連、舍利弗等所入の三昧、其餘の羅漢、測度すること能はずといふがごとく、前聖後聖、其の揆を一にせずと雖も、其の各極致を成就するは、則ち同じ。前の文明の中心か成就する所、後の文明の中心か成就する所に、あらずと雖も、其の自然の神秘を發して、人道と文明とに裨益するあるは、則ち同じ。或は禮文を以てす、周の若し、或は幻技を以てす、印度の若し、或は哲學、美術を以てす、希臘の若し、或は法律を以てす、羅馬の如し、而して其の前後文明の中心を鏈繋する者は、則ち學術の土、古を稽へ、今を揆り、以て新思想を創するに須つことある也。西洋學術の輸入せられしより、二十餘年、世人既に往々我が大學に望むに、徒らに彼に傳ふる所、生吞活剝、以て之を轉售するに止まらずして、其の新理論を發揮し、新學

學者の任

世人の大
學に對する
希望

在野學者の發奮

説を創立し、以て東方學術の特色を表見すべきを以てす、其の彼の地に留學せるより歸り、未だ十年を経ず、而して其の年齢皆五十に滿たざる博士を捉て、便ち強ふるに、抑新の學説を以てするは、酷なるに似たりと雖も、國民の情既に新文明の創立を翹企するを見るべく、古より民の聲に畏るゝ所の者、國民の希望は毎に無作に出で、之を克く遇むることなきを以てすれば、我が學術の早晚一新生面を開くは疑を容れざる所たり、且つ其在野學者の若きは、早く亞細亞大陸を探檢して、學術の新資料を蒐集するの已むべらざるを倡道し、其學理に於ても、奮て新説の創興を試みる者あり、其の意に謂らく、四海事無し、熒熒揚らず、其の實力を以て、歐洲列國に示すべき者、武に由ることを得難ければ、則ち清平の臣民、以て國光を耀かすべき者、學術に若くはなしと、夫れ歐洲近代の文明は、賊に格物致知を以て特色とせり、然れども代りて而して文明の中心たる者、復た其の故路を履で、必ず理學に奮ふべきは、未だ知るべからざる所、或は我の極致を成就すべき者、決して此に在らじ、但だ前の文明を承て、之に超上せんとするの氣力は、一轉して特色の極致に至る所以、英邁卓絶の士一たび起らば、此の間の幹旋擧手投足の勞のみなりと雖も、かの其の人の起るや、空

我の成就すべき極致

時勢の變

しく其の生ずるを待つは、學者の本分に非ず、今の時に當りて、學術を專攻するの士、豈に徒爾にして已むべけんや。
 天下一日事無きに安んずべからず、清平無事、力の以て伸ぶべきなしとせる者、數月の前、誰れか然らずと謂はん、而して今は則ち變意外に起り、難干戈に及ぶ、國民の意氣、勃然として颯擧、幾と歐洲諸強國を藐視す、當局の人、其の謀を失らず、局を收むるに便宜を占めば、則ち我の威力日に以て伸暢、南は原田孫七郎、山田仁左衛門が經略せる地より、北は間宮林藏が跋渉せる處を極め、西豊公が指畫せし大陸に及ぶ、我が風化を光被せしめんこと、蓋し十數年内の事たらん、東方の新極致を成就し、以て歐洲に代興して、新たに坤輿文明の中心たらんこと、反掌の間に在らざらんや、而して嚮日、實力の以て歐洲に示すなく、已むを得ずして、學術に奮ひ、聊か驕慢なる白人をして一顧を我に垂れしめんとせるの、太だ膽小なりしを自ら晒ふべき也。
 且つ學者の國運に於ける關係、更に是より大なる者あり、夫れソクラテス、プラトあり、而して亞歷山あり、瞿曇あり、而して阿輸迦あり、ゾオルテ、ヤ、ルーソーあり、而してボナバルトあり、孔丘あり、而して嬴政、劉徹あり、王通、智顛あり、而して李世民あり、

東方の新極致

學者と國運

プラトの弟子は、亞歷山の師たり、聖賢の法は、阿輪迦の保護に弘まり、ゾオルテイヤ、ルソーの思想は、ボナバルト暴興の運を啓き、儒者荀卿の弟子秦氏を助けて、千古の變局を成し、儒者董仲舒漢氏の學術を大一統し、王通の門生、世民の股肱たり、玄奘、杜順、慧能、皆智顛の風を聞て起る者、學者の取れる天下なしと謂て之を輕ずへからざる也、而して學者の興る、時運と相感するあること、孔子が儒師の職を離れて、儒家者流を立つる、齊桓晋文か流離の餘、天子を挾むに似、ソクラテス、プラトの起る、實にペリクレスの政治に催さる、ゾオルテイヤ、ルソーの、前、リシエリユーの覇業あり、蘇綽の宇文氏を助くる、混一の芽既に抽く、釋迦の前後、轉輪聖王の當さに出づべきこと、久しく國民の信望する所たりし也、夫れ、南は原田孫七郎、山田仁左衛門か經略の跡より、北は間宮林藏か跋渉せる地、西は豊太閤か指畫せる國を、并せて、風化及ぼざるなし、此の如き時運、以て新文明中心の先聲たる大學者を感興するに足らすと謂ふか、吾れ今の學者か自ら疆めずして其の本分を、後生に推譲し、以て斯邦をして其の人道に盡すの天職を奉行するに於て、一日怠慢の咎を犯さしむることを恕する能はず。

(明治廿七年十一月稿)

文明中心の先聲

畫とは何ぞや

畫道の大疑問 (上篇)

人願の技能、能く宇宙活動の玄機に契ふ者、是を美術と謂ふ、繪畫は其の一科に屬す。其の籍りて而して立つ所の物は、平面上に於ける形象と色彩となり、其の極致を成す所以の法は、筆墨傳彩の調和なり、其の興を托する所の題目は、山水花卉翎毛仙佛人物等なり、其の運用に至りては、或は筆に専らにして墨に略し、或は筆墨に假りて、傳彩を去り、或は筆墨傳彩並び備へ兼ね存す、其の題目に至りても、其の托せんと欲する所興趣、既に一なることを得ざれば、則ち其の寫す所も亦擇ぶ所あるを免かれず、苟くも其の玄機に契ひ、其の極致を得る、何れを取り何れを舍つるとしてか可ならざることあらん、唯だ夫の技を操るの人性稟に偏あり、而して遭ふ所の時、處る所の地、好尚同じからざれば、則ち畫風に今古の異あり、畫派に諸家の別あるは、理勢の自ら臻る、復何ぞ怪しむに足らんや、抑も彼の後れ出る者、縦に數千年既に存するの

畫風畫派の岐分

蹟を觀て、横に百家美を熾ふるの際に生る、前人の蹊逕を趁へば、往々疑ふ所なきこと能はず、我より古を作れば、動もすれば、雅尙に入り難きを思ふ、徘徊彷徨として適從する所に迷ふ、蓋し當代の映は、當代に在て既に映し盡す、後世之に法らんとするも、殘肴冷炙、舌に上すに堪へず、斯人の美は、斯人に在て始めて發揮すべし、後世之に倣はんとするも、零芥賸馥、人を飫かすに足らず、是れ作家の屢々筆を投じて其の安心立命の地を得がたきに苦しむ所、而して一代人心か屢々其時を代表するの美術なきに歎焉たる所以なり。

夫れ明治の時は、實に開闢而還の一大變態に際會せる者、彼の往昔に在て、其の親しく相交通し、文物相影響せるは、止だ支那ありし者、今や四海比隣、其の國情風尙、最も相隣違せる西洋諸國、思想習俗、相浸潤せざることをなし、内には則ち七百年覇者の治、一旦古に復せるのみならず、新法創制、耳目を一變し、社會の綱紀、人心の乘彝趨舍、未だ明かならず、簡擇惑ふことあり、更革の當時、美術が殆んど一大厄運に瀕せしを異しむことなき也、創業の勳臣は多く鄙裔樸學の徒より出で、所謂實學儒教と、耽古國學とを奉じて、儉の野に陥いるを恤へずして、文の華に流るゝを力排す、故に美術の

明治時代の
美術の厄運

倫理と相關し、實用と相渉る所以、又其の人生至靈の活動と相感發する所以に至りては、固より其の見の及ぶ所に非らず、又神佛甄別の論、廢佛毀釋の議、暴風急雨の樹を抜き、陵に襲るか若く、寺院祠觀、千餘年間、美術の府庫、殘敗零ぼ盡く、然れども舊物の厄運に際せしは、獨り美術に止まらず、美術は則ち其の復興の最も早くして、而して一切文物復興の氣運に動機たりし者、是れ實に歐洲に在て、博覽會の賞鑑、始めて晦蒙の當路を醒せしに因り、美術に獨立の能力あるを感じ、其の灰燼を收めて、復た殘燼を吹くに至りし也、是に於て繪畫は實に其の首要の一科として、獎勵振作の道、頗る朝野の間に講究せられ、其の鑑賞批評の法、新たに薦紳の徒に倡道せられ、而して一大疑問は亦隨て世人の口に發して、當家の前に掲げられたり、曰く今日の繪畫を如何すべきと。

一大疑問

疑問未だ
釋けず

工部省が美術の生員を養て、西風の技術を傳へたるは、美術獨立思想の勃興と偕に熄みぬ、美術に關する諸協會の踵起、美術學校の設置、國風美術の氣焰再燃に力めざるなし、而してかの一大疑問に至りては、未だ渙然として氷釋すること能はざる也、一時美術の厄運に乗じ、跋扈を俗間に極めたる、一派龜策の文人畫は屏息せり、而し